

第3章

加盟団体の歴史

I | 競技団体

II | 学校体育団体

III | 郡市体育団体

I 競技団体

長野県スケート連盟

(1) 長野県スケート連盟の沿革

長野県スケート連盟の沿革を語る上では、長野県におけるスケートの歴史を紐解かねばならない。

長野県の中でも「スケート発祥の地」とされる諏訪湖へスケートが入ったのは明治31年(1898年)。諏訪出身で帝国大学(現東京大学)教授の稲垣乙丙がドイツ留学を終え帰国した際に土産としてスケート用具一式を高島学校(現高島小学校)に寄贈したのが最初とされている。その後、諏訪湖を中心にスケートが盛んに行われるようになっていった。

大正時代には県下各地で大会が盛んに開かれるようになり、大正4(1915)年には大町の木崎湖でスケート大会、大正6年には南佐久で氷上運動会が開かれた。大正12(1923)年には極東氷滑競技会が玉川村と原村の青年会によって行われ、後に県スケート連盟会長となる堀忠雄、オリンピックに初めて出場する潤間留十、オリンピックにトレーナーとして参加する小池富治らが出場している。

昭和元年(1926年)、平野村に白鳥クラブが誕生する。白鳥クラブは当初、フィギュアスケートとホッケーを主体に活動していたが、後にスピードスケートクラブとなり、名選手を輩出することになる。昭和2年、白鳥クラブは長野県スケート連盟の前身となる中部スケート連盟を作り、平野村の海洋道場に事務局を置いた。その後、スケート熱が高まる中で県下各地に体育協会が設立されていった。また、全国でもインカレや全日本選手権、全国中等学校氷上大会(インターハイ)等が本格的に開かれるようになった。

終戦後の昭和21年(1946年)9月、長野県体育協会が発足した。更に12月には長野県スケート連盟が誕生した。その後の長野県スケート界は多くの名選手を輩出し、団体での活躍はもとよりの国際大会にも出場し、日本のスピードスケートをけん引してきた。

(2) 連盟のあゆみ(昭和63年～)

① 国民体育大会冬季スケート大会の成績

- 【平成7年】第50回大会で天皇・皇后の両杯を獲得。
- 【平成13年】第56回大会皇后杯を獲得。
- 【平成14年】第57回大会皇后杯を獲得。
- 【平成15年】第58回大会で2度目の天皇・皇后の両杯を獲得。
- 【平成17年】第60回大会で3度目の天皇・皇后の両杯を獲得。
- 【平成18年】第61回大会皇后杯を獲得。

【平成20年】第63回大会皇后杯を獲得。

【平成24年】第67回大会皇后杯を獲得。

【平成28年】第71回大会で4度目の天皇・皇后の両杯を獲得。

【平成29年】第72回大会で天皇・皇后の両杯を獲得。2連覇。通算5度目。

【平成30年】第73回大会で天皇・皇后の両杯を獲得。3連覇。通算6度目。

【平成31年/令和元年】第74回大会で天皇・皇后の両杯を獲得。4連覇。通算7度目。

【令和2年】第75回大会で天皇・皇后の両杯を獲得。5連覇。通算8度目。

【令和3年】第76回大会で皇后杯を獲得。天皇杯は7点の僅差で2位となり、6連覇を逸した。



2021 岐阜国体より

② 連盟所属選手の活躍

【平成3年】

ワールドカップ女子500mで島崎京子(三協精機)が日本人初の総合優勝。

【平成4年】

第60回全日本スピードを茅野市で開催。女子総合で上原三枝(日本体育大学)が初優勝。

アルベールビルオリンピック。男子1000mで宮部が銅メダル。長野県スケート史上で初のメダリストとなる。

【平成6年】

世界ジュニアスピードで清水美映(信州大学)が総合優勝。県関係選手の女子で史上初。

【平成8年】

ワールドカップ男子1500mで野明弘幸(日本体育大学)が総合優勝。

【平成9年】

ワールドカップ男子500mで清水宏保（三協精機）が総合優勝。

【平成10年】

長野オリンピック開幕。男子500mで清水宏保（三協精機）が金メダル獲得。日本スケート史上で初の金メダリスト誕生。

【特設 小平奈緒】

茅野北中学校時代に全国中学校記録を樹立。全日本ジュニアでは史上初の中学生王者。

伊那西高校時代、インターハイ500m・1000mの2冠。全日本ジュニアでも優勝。

信州大学時代、1年時にインカレ500m・1000mの2冠を達成。2年時には全日本距離別1000m優勝。4年時、全日本距離別1500m優勝。

平成21年相澤病院所属。

平成22年、初の冬季五輪出場となったバンクーバーオリンピックでは1000mと1500mで5位入賞。

ソチオリンピックでは、500mで5位、1000mでは13位だった。

平成30年、平昌オリンピックで女子500m金メダル獲得。

500m連勝記録はW杯23連勝/国際大会28連勝/国内外大会37連勝。

③ 長野県内の施設等

【昭和63年】サンピア松本にスケートリンクが開場。

【昭和64年/平成元年】諏訪市スケート場が閉場。茅野市運動公園に国際スケートセンターが開場。

【平成2年】軽井沢風越公園アリーナがオープン。

【平成6年】岡谷市やまびこスケートの森アイスアリーナ・岡谷市やまびこ国際スケートセンターが開場。小海町松原湖高原スケートセンター開場。

【平成10年】長野市オリンピック記念アリーナ（エムウェーブ）開場。

長野県スケート連盟事務局が岡谷市やまびこ国際スケートセンター内に移転。

【平成12年】佐久市洞源湖スケート場が閉場。

【平成23年】浅間温泉国際スケートセンター閉場。

(3) 今後の活動

長野県スケート連盟では、フィギュア・スピード・ショートの3部門でジュニア競技力の向上や国体強化を目指した合宿・選手育成事業を行っている。

また、長野県スケート連盟に係る競技会の企画・運営として県内の競技会はもとより全日本クラスの競技会や国際大会の運営にも携わっている。

昨今、競技人口の減少が問題となっている。かつてはどの地区でも冬になると多くの小学生スケーターがスケートに親しんでいたが、最近はその数がめっきり少なくなってきた。小学生が少なくなれば、中学生や高校生の選手もおのずと少なくなっていく。原因はいくつか考えられるが、我々にできることは「スケートの楽しさを多くの皆さんに知って（再認識して）もらい、老いても若きもスケートに親しんでもらう」ことだと考えている。選手の育成と同時に、スケートの魅力を伝えていきたい。そして、スケート長野を陰ながら支えたいと思っている。

長野県アイスホッケー連盟

昭和63年度（1988年度）

長野冬季五輪招致に向け、8月に軽井沢町で長野県知事杯アイスホッケーサマーシリーズを開催、10月に長野市に高校生クラブチームの長野ゲネオスを創設。1月：国体で成年4位。

平成2年度（1990年度）

10月：風越公園アイスアリーナがオープン。12月：金井文雄会長に代わり、羽田孜衆議院議員が本連盟の会長に就任。1月：軽井沢町で開催された国体で、成年6位、少年4位入賞。

平成3年度（1991年度）

6月：1998年冬季五輪が長野に決まり、長野市内に続々とアイスホッケーチームが誕生。軽井沢町に県内初の女性チーム誕生。2月：軽井沢町で開催の全中大会で軽井沢中学4位入賞。

平成5年度（1993年度）

9月：茅野市にアイスホッケー協会（会長 浅川孝典）が設立。11月：長野五輪アイスホッケーA会場の起工式開催。2月：リレハンメル冬季五輪に本連盟関係者4名が運営視察。

平成6年度（1994年度）

4月：国際スポーツ交流員として、元ソ連五輪選手のユージ・リャプキン氏が着任し、県内のジュニアチームを指導。7月：岡谷市にやまびこスケートの森アイスアリーナがオープン。

平成7年度（1995年度）

1月：長野市で当時世界最強のロシアスパルタクとフィンランドのEPSを招き、第1回国際ジュニアアイスホッケー大会を開催。3月：広徳中学校アイスホッケー部が発足し、軽井沢中、桜ヶ岡中、更北中、広徳中の4校により第1回中学生県大会を開催。

平成8年度（1996年度）

4月：第1回全日本オールタイム大会が仙台市で開催され、ユーリ・リャブキン氏を擁する長野ドリムスが優勝。12月：長野五輪のテストイベントとして、長野カップ96を、3月には第64回全日本選手権をビッグハットで開催。1月：第52回国体で少年4位入賞。

平成9年度（1997年度）

10月：第1回長野県ジュニアアイスホッケー選手権を岡谷市で開催。2月：長野冬季オリンピックが開催され、多くの当連盟関係者が運営に従事。3月：パラリンピックのアイススレッジホッケーがアクアウイングで開催され、競技運営を当連盟関係者が担当。

平成10年度（1998年度）

5月：長野市長に5万1千人分の署名を提出し、五輪後もビッグハットやホワイトリングを残すよう陳情。1月：日本リーグがホワイトリングで開催され、6,000人近い観客が集まる。1月：第54回国体アイスホッケー競技会が軽井沢町で開催され、少年が3位入賞。

平成11年度（1999年度）

12月：U20男子世界選手権をビッグハットで開催、多くの当連盟関係者が運営に従事。

平成12年度（2000年度）

4月：長野五輪記念基金活用により、元日本代表選手の関川道昭氏を招聘。7月：本連盟に医事委員会とレディース委員会を新設。10月：本連盟事務局を㈱ながのアド・ビューロ内に設置。

平成13年度（2001年度）

4月：長野東高校にアイスホッケー部発足。6月：ビッグハットの冬季間の恒常的リンク利用が決まり、コクドが長野を第2本拠地とすることを表明。1月：第57回国体で総合6位。

平成14年度（2002年度）

1月：第58回国体で成年6位、少年5位入賞。2月：チェコ、カナダ、フィンランドのチームを招き、長野カップ国際アイスホッケー大会を開催、多くの当連盟関係者が運営に従事。

平成15年度（2003年度）

1月：木村拓哉がアイスホッケー選手を演じるドラマ「プライド」が放映、エキストラの派遣など本連盟が全面支援。1月：第1回アジアリーグ長野シリーズをビッグハットで開催。

平成16年度（2004年度）

2月：第72回全日本選手権を長野市と軽井沢町で開催。2月：スペシャルオリックス冬季世界大会が長野市で開催され、本連盟関係者がフローアホッケー競技の運営を担当。

平成17年度（2005年度）

2月：デンマーク・ドイツを招いて長野カップ2006を開催。日本代表チームに犀陵中・長野工業高校出身の酒井大輔が選出。同じく長工出身の小林渉がラインズマンとして出場。3月：風越カップ全日本少年大会小学生

の部が「スポーツ拠点づくり推進事業」承認大会に選定。

平成18年度（2006年度）

12月：長野カップ2007を開催。ともに犀陵中出身の酒井大輔と上野拓紀が日本代表に選出。

平成19年度（2007年度）

1月：「長野かがやき国体」を長野市と軽井沢町で開催。少年が5位、成年が8位入賞。2月：長野五輪10周年記念事業としてロシアとカナダのチームを招いてU16国際大会を開催。

平成21年度（2009年度）

4月：軽井沢スケートセンターが閉鎖となり、SEIBUプリンスラビッツアイスホッケー部も廃部。その一方で、長野市出身の上野拓紀と酒井大輔が相次いでアジアリーグ加盟チームとプロ契約。7月：羽田孜前会長に替わり塚田佐氏が本連盟の会長に就任。

平成22年度（2010年度）

8月：本連盟創設30周年記念誌を刊行。1月：インターハイアイスホッケー競技選手権大会が岡谷市と軽井沢町で開催され、本連盟関係者が運営に従事。

平成28年度（2016年度）

12月：第84回全日本アイスホッケー選手権大会をビッグハットで開催。1月：ながの銀嶺国体アイスホッケー競技会を軽井沢町と岡谷市で開催。

平成29年度（2017年度）

8月：塚田佐前会長に替わり宮下富夫氏が本連盟の会長に就任。12月：長野五輪20周年記念事業として、女子アイスホッケー日本代表と女子ロシア代表との国際試合を開催。1月：日韓青少年冬季スポーツ交流事業の一環として県選抜アイスホッケー選手団を韓国に派遣。

平成30年度（2018年度）

3月：全日本オールタイムアイスホッケー大会をビッグハットとエムウェーブで開催。

令和2年度（2020年度）

9月：本連盟に医師3名を含む「新型コロナウイルス感染症対策チーム」を設置し、「大会及び練習試合等の開催に関する指針」等を随時公表。1月：万全な新型コロナウイルス感染防止対策の実施の下、インターハイアイスホッケー競技選手権大会が岡谷市と軽井沢町で開催。



第76回国体（愛知県）

公益財団法人 長野県スキー連盟

公益財団法人長野県スキー連盟は昭和7年（1932年）10月27日に創立致しました。

本連盟は、長野県におけるスキー界を代表する団体として、県民の正しいスキーの普及と振興をはかり、健全なスポーツ精神を養うと共に、県民の体位向上に寄与し、併せて広く体育文化の進展に貢献することを目的として活動しております。

組織は、総務本部、競技本部、教育本部の3本部から成り、選手の育成・強化（競技本部）、スノースポーツの普及・発展（教育本部）を柱に運営され長野県内に約4,000人の会員を抱えております。傘下団体として地域・職域クラブ63団体と、公認・認定スキー学校48校が加盟しており、長野県のスノースポーツを統括する団体として1932年に全日本スキー連盟に加盟しています。

競技団体としては、今日まで荻原健司氏はじめ、世界で活躍するトップアスリートを多数輩出し、現在も渡部曉斗選手（北野建設SC所属、2014ソチ五輪・2018平昌五輪銀メダリスト）などの選手を有し、世界を目指すトップ選手強化をおこなうとともに、世界で活躍を経験した指導者達によるコーチングを受けたジュニア選手は夢と希望を持ってスキー競技に取り組んでおります。競技運営においては、冬季五輪開催県として多くの国際大会を開催し、地域と連携しながら運営スタッフの充実等図っております。

また、所属公認スキー学校において年間約17万人の方々にレッスンを受講いただき、その中でもファミリースキーや修学旅行のニーズが高く、多くの子供達が長野県のスキー場ではじめてのスキー・スノーボード体験しています。そのため、長野県のスキー・スノーボードスクールは減少を続けるスノースポーツ参加人口を回復させるうえで大きな役割を担っています。

いま、当連盟は少子化・スキー離れが進む中、スノースポーツに関わる産業界、行政、さまざまな企業とも問題意識を共有し、連携しながらスノースポーツの魅力を伝える活動を行っております。スキーシーズンの幕開けを祝うオープンイベントを開催や、ファミリーや初めてのお子さんに雪を楽しんでもらうため、体験教室を開催するなど、スノースポーツの振興と業界活性化に向け取り組んでおります。

■長野県スキー連盟のあゆみ

○昭和63年（1988）

- ・中国吉林省滑雪協会と友好提携調印
- ・1998冬季オリンピック招致の日本候補地として長野が決定

○昭和64年／平成元年（1989）

- ・中国吉林省長白山にてクロスカンントリー合宿開催

○平成2年（1990）

- ・第45回国体スキー競技会皇后杯優勝（青森・大鰐）
- ・国際ジャーナリスト長野ウインターフォーラム開催（志賀高原）
- ・中国ジャンプ訓練隊合宿受入（野沢温泉）

○平成3年（1991）

- ・1995インタースキーが野沢温泉にて開催決定
- ・1998第18回冬季オリンピック長野開催が決定

○平成4年（1992）

- ・北野次登会長就任
- ・第16回オリンピック冬季競技大会（フランス・アルペール）にてノルディック複合団体金メダル獲得（河野孝典選手出場）

○平成5年（1993）

- ・第48回国体スキー競技会皇后杯優勝（鳥取・大山）
- ・IVSS国際学校スキー部会開催（車山高原）
- ・ノルディック世界選手権大会複合団体で優勝（河野孝典選手・荻原健司選手出場）
- ・荻原健司選手がワールドカップ（ノルディック複合）個人総合優勝

○平成6年（1994）

- ・第17回オリンピック冬季競技大会（ノルウェー・リレハンメル）にてノルディック複合団体金メダル獲得（河野孝典選手・荻原健司選手出場）、ジャンプ団体銀メダル獲得（西方仁也選手出場）
- ・荻原健司選手がワールドカップ個人総合2連覇

○平成7年（1995）

- ・第15回インタースキー野沢温泉大会開催
- ・第50回国体スキー競技会天皇杯優勝（福島・猪苗代）
- ・荻原健司選手がワールドカップ個人総合3連覇

○平成8年（1996）

- ・第1回国際スキー技術選大会開催（野沢温泉）
- ・長野県スキー連盟会館起工式

○平成9年（1997）

- ・オリンピック国際前大会として、クロスカンントリー・ジャンプ・ノルディック複合・フリースタイル・スノーボード・アルペンのワールドカップ等がオリンピック会場にて開催される
- ・長野県スキー連盟会館竣工

○平成10年（1998）

- ・第18回オリンピック冬季競技大会長野1998開催、12名の県選手が出場

○平成11年（1999）

- ・第48回全国高等学校スキー大会で飯山南高校が学校対抗男子・女子総合優勝（青森）

○平成12年（2000）

- ・第49回全国高等学校スキー大会を飯山市にて開催、飯山南高校が学校対抗男子・女子総合連覇

○平成13年（2001）

- ・第56回国民体育大会冬季大会を飯山市にて開催、天皇杯・皇后杯優勝
- ・第48回全国高等学校スキー大会で飯山南高校が学校対抗男子・女子総合3連覇（新潟・妙高）

○平成14年（2002）

- ・第57回国体スキー競技会天皇杯優勝連覇（新潟・妙高）
- ・第19回オリンピック冬季競技大会（アメリカ・ソルトレーク）に12名の県選手が出場

○平成16年（2004）

- ・山岡聡子選手がワールドカップ（スノーボードHP）個人総合優勝

○平成17年（2005）

- ・第60回国体スキー競技会天皇杯優勝（岩手・安代）
- ・デモンストレーターによる普及イベント「スプリングキャンプ」を開催

○平成18年（2006）

- ・第20回オリンピック冬季競技大会（イタリア・トリノ）に15名の県選手が出場

○平成19年（2007）

- ・第56回全国高等学校スキー大会で飯山南高校が学校対抗男子・女子総合優勝（富山・南砺）
- ・全日本選手権アルペンスーパーGで中学生の後藤選手が優勝
- ・国体クロスカントリー種目で山室選手が4連覇
- ・友好交流のある中国吉林省（北大湖スキー場）にて、アルペン部シーズンイン強化合宿として中国遠征事業がスタート。

○平成20年（2008）

- ・第63回国民体育大会冬季大会を野沢温泉にて開催、天皇杯優勝
- ・上村愛子選手がワールドカップ（フリースタイルモーグル）5連勝と個人総合優勝を果たす
- ・児玉幹夫会長就任

○平成21年（2009）

- ・第58回全国高等学校スキー大会を白馬村で開催
- ・上村愛子選手がフリースタイル世界選手権猪苗代大会モーグル・デュアルモーグル両種目で優勝
- ・ノルディック世界選手権大会複合団体で14年ぶりに優勝（渡部暁斗選手出場）
- ・トップアスリート支援「スキースターズ長野」発足

○平成22年（2010）

- ・第21回オリンピック冬季競技大会（カナダ・バンクーバー）に10名の県選手が出場、上村愛子選手が4位入賞

○平成23年（2011）

- ・日本スキー発祥100周年を迎える

○平成24年（2012）

- ・信州スキー発祥100周年、連盟創立80周年を迎える

- ・矢口公勝会長就任

- ・SAJナショナルデモンストレーターの丸山貴雄選手が全日本スキー技術選手権大会で史上初の3連覇を達成

○平成25年（2013）

- ・ノルディック世界選手権大会ジャンプ混合団体で優勝（竹内択選手出場）
- ・8月1日に公益財団法人に移行

○平成26年（2014）

- ・第22回オリンピック冬季競技大会（ロシア・ソチ）に12名の県選手が出場、ノルディック複合渡部暁斗選手が銀メダル、ジャンプ竹内択選手が銅メダル、モーグル上村愛子選手が4位入賞

○平成27年（2015）

- ・第70回国体スキー競技会天皇杯・皇后杯優勝（群馬・片品）
- ・北野貴裕会長就任、全日本スキー連盟会長に長野県より初の会長として就任

○平成28年（2016）

- ・全日本選手権アルペン大回転で高校生の加藤選手が優勝

○平成29年（2017）

- ・第72回国民体育大会冬季大会を白馬村にて開催
- ・北海道・札幌市で開催の2017アジア冬季競技大会に4名の県選手が出場、クロスカントリーレンティング選手が大会三冠・宮崎選手がリレーで優勝
- ・国際スノースポーツ指導者連盟（IVSI）国際会議開催（白馬八方尾根）

○平成30年（2018）

- ・第23回オリンピック冬季競技大会（韓国・平昌）に8名の県選手が出場、ノルディック複合渡部暁斗選手が2大会連続の銀メダル獲得
- ・渡部暁斗選手がワールドカップ（ノルディック複合）シーズン8勝と個人総合優勝を果たす
- ・第73回国体スキー競技会天皇杯・皇后杯優勝（新潟・妙高）

○令和2年（2020）

- ・第57回全国中学校スキー大会を野沢温泉村で開催、以降10年間にわたり野沢温泉村で拠点化開催となる
- ・スイスで開催の第3回ユースオリンピック冬季競技大会に6名の県選手が出場、ジャンプ・ノルディック複合混合団体で銀メダル（宮崎・西方・久保田選手出場）

○令和3年（2021）

- ・第70回全国高等学校スキー大会を飯山市で開催、飯山高校が14年ぶりに学校対抗男子・女子総合優勝



一般社団法人 長野県水泳連盟

日本水泳連盟に1県2団体で加盟していた当県が統一加盟を果たしたのが昭和45年1月であり、昭和51年全国高校総体、53年第33回国体を開催し、この会場となった長野運動公園総合市民プールを中心として県下の水泳競技の普及・強化が図られてきた。1998年長野冬季オリンピック開催決定を機に、当時の水泳関係者の英断もあり、このプール施設を平成7年に取り壊し、新たな水泳競技強化拠点となる「アクアウイング」の建設に着手、冬季五輪の競技会場としての利用後、平成11年に待望の完成をみた。以降、通年使用可能なアクアウイングを拠点とした当連盟の競技力向上事業が飛躍的な進捗をみることになる。

高い評価をいただく競技運営

同年8月には第39回全国中学校水泳競技大会を開催。国際規格の設備に加え、統制された中でも選手への思いやり溢れる競技運営に対し、閉会式を終え競技役員が退場しようとしたその瞬間、「フレー、フレー、ナガノ。有り難う、ナガノ！」と観客席総立ちのエールが上がり、役員が全員退場するまで続いた。目頭を押さえる者、観客席に向けて手を振る者など、期せずして沸き起こった「感動のエール」の中で熱い感動を共有したこの時の役員が、以降の大会運営に携わり今日に至っている。その後、全国実業団水泳選手権（H.17）、全国歯科学生水泳競技大会（H.19）、全国国公立大学水泳競技大会（H.22）など、ほぼ毎年のように全国大会が開催されている。東日本医科学生大会では、学生たちと共に大会を創り上げていく喜びを連盟役員も享受しながら学生たちの真摯な姿に学ぶことも多く、学生たちからも、大きな達成感を得ることができたと感謝の声が寄せられている。

「選手を育てる競技会運営」を合言葉として、競技役員の一統された動き、大型映像装置の活用、タイムリーなBGMや役員の入退場曲に「信濃の国」を使用するなど、役員や選手が観客と一体となり会場を盛り上げる運営に努めており、日本水泳連盟からも本県の競技会運営につ



アクアウイングで開催される競技会

いては高い評価をいただいている。

競技運営におけるシステム化が進み、競技会業務全般を支援し、記録を管理する情報システムの運用が重要な役割を占める状況となってきた中、県内ブロック委員、加盟団体及び中体連・高体連などが一体となって業務を遂行する体制構築を進めてきている。

選手の育成と強化

アクアウイングを拠点とする選手の育成及び強化は、強化委員会が中心となり競泳ほか各委員会を統括し、「長野県からのオリンピックの輩出」を目標として取組みを進めている。強化事業の重点を国民体育大会に置き、「チーム長野の形成」と「成年種別の充実」という2つの目標を定め、高校総体や全国中学の全国大会出場者が少数である状況を踏まえ、各チーム単位で大会に臨むのではなく、県内の一つのチームとして融合・協力し合うように呼びかけ、今では、スイミング、中体連・高体連等とも一体化したチーム形成ができ、国体に向けての合同合宿等に参加する選手は、チーム長野の一員という意識の下に練習に取り組んでいる。高校卒業後の選手生活を県内で続けるという選択肢がない現状にあって、県外の大学に進学し新たな環境下で選手生活をスタートする選手に対しては、伸びしろを引き出し競技力を支える人格形成を加味した育成支援を行い、大学生スイマーがチームの一員として活躍することで、中高校生の目標となり全体レベルが底上げされ、近年の国体では天皇杯・皇后杯共にトップ10以内が狙えるまでに強化の成果が見えてきている。

本県初めてのオリンピック選手は、シンクロ（現AS）競技の箱山愛香選手であった。大学生で2012年ロンドンオリンピックに念願の初出場を果たし、卒業後も日本代表メンバーとして厳しい練習に耐え、2016年リオオリンピックに連続出場。チーム競技銅メダル獲得という偉業を成し遂げた。箱山選手と同じ長野ASクラブで練習を続けてきた選手たちの中からは、全国大会等に出場し活躍する多くの選手が育



オリンピック2大会連続出場の箱山選手

ち、藤原菜那・和田彩未選手の世界ジュニア選手権銅メダル、和田選手の日本選手権4連覇、藤原・和田選手と小林唄選手の3名による国体デュエット競技2連覇をはじめ、全国・国際大会で活躍する選手を多数輩出している。

競泳競技では、国体連続11回出場、優勝も含め10年連続入賞の佐藤 綾選手(長野東高卒)の活躍が特筆される。大学3年次のユニバーシアード大会では4×100mフリーリレーで銀メダル獲得という快挙を果たし、2019年世界選手権で女子4×100mリレー東京オリンピック出場権の獲得に貢献。競泳で初のオリンピック出場が期待されたが、最終予選会にピークを合わせ調整してきた本大会が1年延期となり、2021年のオリンピック最終予選会において残念ながら出場権獲得は叶わなかった。

次の世代を牽引する選手としては、JO春季全国通信大会(R.2)高校女子100m及び200mバタフライで優勝の山岸琴美選手(飯田女子高)、同大会中学女子100mバタフライ優勝の清水花峰選手(長野・三陽中)の活躍が

著しく、今後の活躍が期待される。

飛込競技は、全国高校総体や国体での入賞を果たすも、これに続く選手の育成が進まず、委員会として初めて他県から選手兼指導者として長谷川英治選手(新潟県出身)を招聘した。高校で全国高校総体・国体での優勝経験もあり大学でも活躍、教員として長野に住所を移した後も国体・日本選手権での入賞、2019年ユニバーシアード大会に出場という活躍を果たしながら、2028年二巡目国体に向けたジュニア層の選手育成を担当している。水球競技については、昭和53年国体以降ほぼ活動休止状態が続いていたが、令和2年に長野東高水球部OBの堀水球委員長が異動で母校に赴任。水球部を復活し水球競技の普及強化の取組みを始動した。

2028年長野県開催の国民スポーツ大会に向けては、強化委員会が「チーム長野」として各委員会の強化事業を統括し、中長期的な強化計画の下に進捗状況を評価しながら、全種目エントリー・入賞を目指して本連盟一丸となった取組みを推進していくことになる。

長野県ボート協会

黎明期

○長野県ボート部の誕生

内陸地である長野県で競技ボートが始まったのは、諏訪中学(現諏訪清陵高)の生徒の熱意によるものであった。1901年、端艇部が発足し同年には第1回端艇大会が開催される。以降昭和の戦前までボート競技の地歩を固めていったが、戦争によって競技としてのスポーツが徐々に衰退していく中、諏訪中学においても1944年にはすべての運動部の活動が停止した。

復興期

○長野県ボートの復活

終戦後、1947年に諏訪中学の端艇大会が復活。2年後には諏訪清陵高として全国高校競漕大会出場。同年、第4回国体夏季大会に長野県勢として初出場を果たす。

○長野県漕艇協会設立

諏訪清陵高が第4回国体から連続出場するなか、県からの指導もあって国体に出場するために県漕艇協会を設立することになり、1952年4月1日に活動を開始。

協会が設立されたことによって、高校ボートが盛んになっていく。

普及期

○社会人チーム発足

1964年の東京オリンピック以降、高校男子だけの活動だった県内ボート部は社会人にも拡大し、諏訪湖周辺の企業などで続々とクルーが生まれる。中でも諏訪清陵高OBによるクラブの諏訪漕艇会は、発足と同時に国体一般男子(現成年男子)に出場。その後も社会

人が活躍していく。

○やまびこ国体開催へ向けて

1978年、第33回国体ボート競技を下諏訪町の諏訪湖で開くことが決まり、町や県漕艇協会による準備が始まる。

それ以前から、県漕艇協会強化部は国体開催を見据え、各チームが伝統的な漕ぎ方に終始していたものを統一するなど徹底的な選手強化を図っていた。

結果は早くも表れ、1974年には小嶋克人(諏訪清陵高)が世界ジュニアに出場、林秀樹(岡谷南高)が県勢初のインターハイ優勝を果たす。

黄金期

○黄金期の幕開け

1976年、第33回国体(やまびこ国体)の漕艇会場となった下諏訪町では、県漕艇協会の事務局が同町教育委員会に移転、下諏訪町漕艇場・艇庫・錬成の家が完成。同年には岡谷南高のNF(ナックルフォア)がインターハイ、国体の高校2冠を手中にする。

○伝説のクルー

やまびこ国体を1年後に控えた1977年、県漕艇協会では強化部が中心となって、「地元国体で勝つ成年クルー」作りに乗り出す。ここで編成されたのが、C:竹折善文、整調:青木悟、3:矢島正恒、2:小泉辰也、B:鳥塚健司の長野選抜である。実業団やクラブチームが活躍する成年の中で「国体に勝つ」を目的にしたクルーは全国的にも珍しかった。やまびこ国体のリハーサルを兼ねて諏訪湖で開かれた第27回全日本社会人実業団選手権のNFで圧勝したクルーは、青森国体に乗り込

み、予選から準決勝まですべて1位で通過し、国体初優勝を飾る。翌年やまびこ国体でも連覇を果たし、その後解散するまで、実に33連勝を記録し「負けなかったクルー」として名を残すことになる。

○やまびこ国体成功

やまびこ国体が開催される1978年は、長野県ボート史の中でもひとときわ輝かしい年となる。

毎年5月に開催される信毎諏訪湖レガッタが初めて開催され、第33回国体夏季大会漕艇競技は9月10日に開幕。地元長野勢の快進撃は続き、成年男子NFで長野選抜が前年に続いて全レース1位で大会2連覇を遂げると、成年男子シェルフォアで駒草ローイングクラブが4位、成年女子NFが5位と大健闘。少年勢では男子1×(シングルスカル)で逢沢靖(岡谷南高)が2位、女子NFの岡谷東高が7位入賞を果たした。漕艇競技での長野県の得点は男女総合(天皇杯)3位、女子総合(皇后杯)5位。責任を果たし、秋季大会へと繋いだ。

発展期

○やまびこ国体の遺産を継いで

やまびこ国体の成功を受けて、長野県のボートは発展期を迎えることになる。

1979年～1981年にかけて下諏訪中学校、下諏訪向陽高校、岡谷南部中学校と次々にボート部が誕生。1980年には、岩波健児(下諏訪町役場)がモスクワ五輪の代表に選ばれるが、ソ連のアフガニスタン侵攻によって同オリンピックを西側諸国がボイコット。日本も追随し、岩波のオリンピック出場は幻となってしまふ。1981年にはインターハイで諏訪清陵高が男子4+、岡谷南高が男子NFでダブル優勝、小林広法(岡谷南高)が世界ジュニア選手権に出場するなど、県勢の活躍が目立った。

○下諏訪町民レガッタ開催

やまびこ国体の開催によって、下諏訪町はボートの町として知られるようになる。国体後の漕艇場の有効活用やボートの人口拡大を目的に1982年に下諏訪町体協漕艇部が誕生。県漕艇協会とともに下諏訪町民レガッタ(現下諏訪レガッタ)を主管することになる。開催目的は、第一線の競技者がレースをするだけでなく、多くの町民がボートの楽しみを肌で感じることであった。1984年には、レガッタ参加者から「参加するだけでなく自分たちも苦勞して自前の大会にしたい。」と要望が出て、下諏訪町漕艇協会が発足。ボートは確実に町民生活の中に浸透していった。また、競技人口拡大のため、親と子のボート教室もこの年から開催される。

充実期

○低迷期打開へ

1988年(昭和63年)から平成時代の初めまで成績は低迷していた。県漕艇協会は状況を打開するために、1994年国体参加には選抜方式を採用することを決定。

長野県では中学生から社会人までが早朝に諏訪湖に集まって一緒に練習する「諏訪湖方式」が定着していることもあって、比較的スムーズに受け入れられた。だが、これが実を結ぶまでには数年を要することになる。

1995年に、県漕艇協会は大幅な役員体制を変更し、組織の若返りを図った。1998年には日本漕艇協会が日本ボート協会に改称したことに伴い、長野県も長野県ボート協会に改称。

以降、2001年にも大幅な組織体制の再編。また、2005年にはかつての国体2連覇メンバーで強化部長だった青木悟が下諏訪町長就任に伴い、会長に選任され、2020年まで会長を務める。

○長野から世界へ

低迷期を打ち破る強化策が実を結び始め、1996年、岩本亜希子(岡谷南高)が県勢女子選手として始めて世界ジュニア選手権に出場。その後、早稲田大に進んで4年時に長野県出身の女子ボート選手としては初めての五輪へ出場。2013年に現役引退するまで、アジア大会4回、世界選手権7回、2000シドニー・2004アテネ・2008北京・2012ロンドンと五輪に4回出場し、日本女子ボート界の象徴といえる選手となった。

他にも、岡西正明(中央大-諏訪清陵高出)、池田竜雄(同-岡谷南高出)、金子明(明治大-岡谷南高出)もアジア選手権や世界選手権で日本代表として活躍。

2001年には今井裕介(中央大-岡谷南高出)、柿沢義紀(同大-岡谷東高出)、中村仁(同-諏訪清陵高出)が揃って23歳以下の国際大会に参加。今井裕介は、卒業後にNTT東日本漕艇部へ入部。以降、2015年世界選手権まで、数々の国際大会に出場している。

さらに未来へ

○新艇庫完成 2巡目国体へ

2017年、日本体育協会理事会において、2027年開催の第82回国体の長野県での開催が内々定を受け、ボート競技は前回同様下諏訪町が会場として選定された。

2巡目国体に向け、さらなる競技力向上が期待される。また、東京オリンピック開催で日本全体のスポーツへの関心が高まる中、国や県の多大なる理解と協力もあり、2020年に悲願であった新艇庫が諏訪湖畔につ



完成した新艇庫

いに完成した。

愛称も公募され、下諏訪町漕艇場一帯は「下諏訪ローイングパーク」、新艇庫は「AQUA未来(アクアミライ)」と名付けられた。

○東京2020五輪合宿

2021年、AQUA未来でイタリアのボートチームとアルゼンチンのボートカヌーチームが合宿することになった。新型コロナウイルス感染対策により十分な交

流はできなかったが、オンライン上で交流会を開くなどし、世界レベルの考え方や漕ぎ方に触れることができた。

この希少な経験を活かし今後も諏訪湖から世界に羽ばたく選手を数多く輩出していきたい。

※本稿は日本ボート協会100周年記念誌をもとに編集したものである。

長野県セーリング連盟

昭和53年やまびこ国体に参加するために昭和46年結成された長野県ヨット連盟はその成果を準優勝で納め、国体を機に日本少年少女オープンヨット大会を招聘し、その後諏訪湖で平成11年第19回まで連続して開催され、その後山中湖・野尻湖・諏訪湖と会場を変えて平成19年第27回野尻湖での大会を最後に長野県では開催されなくなった。

一方、やまびこ国体で用意されたスナイプ級ヨットを利用して昭和62年に関東地方の大学を中心とした10大学OBヨットクラブ対校レースが始まった。他大学にも人気のこの大会は17大学まで膨れ上がっていった。が、艇の老朽化は進み各大学から艇の提供があって継続してきたが、平成27年第29回大会を最後に東京都に移された。



諏訪湖での大会もオリンピック艇種から外れたソリング艇を江の島などから集結させて東日本ソリング級ヨット大会及び全日本ソリング級ヨット大会を開催するのみとなった。

やまびこ国体直後はインターハイで北

信越の常連校として活躍してきたが、当時の高校ヨット部も現在では廃部となり、一般のジュニアヨットクラブ内での活動に変化していった。その間、日本ヨット連盟が日本セーリング連盟に改名されたのを機に長野県セーリング連盟に改名され、平成24年会長も4代目となる横山真となり、理事長も5代目笠原賢一の現在の体制になった。

2巡目長野県国民スポーツ大会に向けてもう一度復活すべく現体制を強化していきたいと努力している。



茨城国体での競技風景

長野県カヌー協会

活動概要(昭和63年から令和2年まで)

昭和62年に活動拠点を長野市七二会の小田切ダム上流に艇庫を構え、近隣の高校生を主体としたジュニアチームを強化する活動をしてきた。

平成8年から犀峡高校にカヌー部が設立され、強化活動の主体を信州新町に移した。信州新町を拠点に犀川流

域をつなげた「多夢タムらんどカヌー競技大会」を10年続け、カヌースポーツの普及振興に努めた。

平成18年から飯田市出身の矢澤一輝・亜季の兄妹が活躍し、北京五輪、ロンドン五輪、リオデジャネイロ五輪、東京五輪と出場し海外にも活動の幅を広げた。

五輪出場者の紹介

2008年北京五輪

男子カヌースラロームK1 矢澤一輝 予選18位

2012年ロンドン五輪

男子カヌースラロームK1 矢澤一輝 決勝9位

2016年里オデジャネイロ五輪

男子カヌースラロームK1 矢澤一輝 準決勝11位

女子カヌースラロームK1 矢澤亜季 予選20位



2020年東京五輪

女子カヌースラロームK1 矢澤亜季 予選20位

国体入賞者の紹介

昭和63年（1988年）第43回京都国体

成年女子レーシングK1 500m
登玉貴子 6位入賞

成年女子レーシングK1 300m
登玉貴子 7位入賞

少年男子レーシングK4 500m
森山・舟坂・笹井・柳本 8位入賞

少年男子レーシングK4 300m
森山・舟坂・笹井・柳本 8位入賞

平成元年（1989年）第44回北海道国体

成年男子レーシングK1 500m
武江一 4位入賞

成年男子レーシングK1 300m
武江一 6位入賞

少年男子レーシングK1 500m
柳本正澄 8位入賞

平成2年（1990年）第45回福岡国体

成年男子レーシングK1 300m
武江一 7位入賞

平成3年（1991年）第46回石川国体

成年女子スラロームK1 15ゲート
佐々木元子 7位入賞

成年男子レーシングK1 500m
武江一 7位入賞

成年男子レーシングK1 300m
武江一 8位入賞

平成4年（1992年）第47回山形国体

成年男子レーシングK1 300m
武江一 8位入賞

平成5年（1993年）第48回東四国国体

少年女子レーシングK1 500m
内山美智子 4位入賞

平成6年（1994年）第49回愛知国体

成年男子ワイルドウォーター 500m
武江一 3位入賞

成年男子ワイルドウォーター 1500m
武江一 6位入賞

平成7年（1995年）第50回福島国体

成年男子ワイルドウォーター 1500m
武江一 7位入賞

平成9年（1997年）第52回大阪国体

成年男子ワイルドウォーター 500m
武江一 8位入賞

成年男子ワイルドウォーター 1500m
武江一 7位入賞

平成16年（2004年）第59回埼玉国体

成年男子レーシングC1 500m
吉澤雄一 4位入賞

平成18年（2006年）第61回兵庫国体

成年女子スラロームK1 25ゲート
矢澤亜季 7位位入賞

成年女子スラロームK1 15ゲート
矢澤亜季 7位位入賞

成年男子ワイルドウォーター 1500m
内山岳佳 8位入賞

平成19年（2007年）第62回秋田国体

成年男子スラロームK1 25ゲート
矢澤一輝 優勝

平成20年（2008年）第63回大分国体

成年男子スラロームK1 25ゲート
矢澤一輝 3位入賞

成年男子スラロームK1 15ゲート
矢澤一輝 7位入賞

少年男子スプリントK1 500m
梅香正徳 8位入賞

少年男子スプリントK1 200m
梅香正徳 8位入賞

平成21年（2009年）第64回新潟国体

成年男子スラロームK1 15ゲート
矢澤一輝 優勝

成年男子スラロームK1 25ゲート
矢澤一輝 優勝

少年男子スプリントK1 500m
梅香 4位入賞

少年男子スプリントK1 200m
梅香正徳 8位入賞



平成23年（2011年）第66回山口国体
 成年男子スラロームK1 15ゲート
 矢澤一輝 優勝
 成年男子スラロームK1 25ゲート
 矢澤一輝 準優勝
 平成25年（2013年）第68回東京国体
 成年男子スラロームK1 15ゲート
 矢澤一輝 優勝
 成年男子スラロームK1 25ゲート
 矢澤一輝 準優勝

平成26年（2014年）第69回長崎国体
 成年女子スラロームK1 15ゲート
 矢澤亜季 優勝
 成年女子スラロームK1 25ゲート
 矢澤亜季 優勝
 成年男子スラロームK1 15ゲート
 矢澤一輝 準優勝
 成年男子スラロームK1 25ゲート
 矢澤一輝 優勝
 平成27年（2015年）第70回和歌山国体
 成年男子スラロームK1 15ゲート
 矢澤一輝 3位入賞
 成年男子スラロームK1 25ゲート
 矢澤一輝 3位入賞
 少年男子スプリントK1 500m
 竹下世界 8位入賞
 平成28年（2016年）第71回岩手国体
 成年男子スラロームK1 25ゲート
 矢澤一輝 準優勝

一般財団法人 長野陸上競技協会

Nagano Athletics Association
 (略称 NAA)

1 沿革

1946年（S21）4月1日 設立
 2012年（H24）2月16日
 一般財団法人登記完了 新陸協旗（2016年）
 1996年（H8）12月8日 創立50周年記念式典挙行
 2016年（H28）12月10日 創立70周年記念式典挙行
 1981年以降の歴代会長（年度）は次のとおり
 第五代 唐沢俊二郎 1981（S56）～1994（H6）
 第六代 宮下 創平 1995（H7）～2009（H21）
 第七代 小坂 憲次 2010（H22）～2016（H28）
 第八代 萩原 清 2017（H29）～現在に至る
 1988年度と2020年度の登録状況を以下に示す。



8回目の優勝（全国男子駅伝）2019年1月

会員登録状況（女性：内数）2020年12月31日現在

地区	支部	審判				競技者		総数	1988年度		
		S級	A級	B級	計	女性	男性		審判	競技者	
南信	飯伊	3	7	48	58	9	56	14	114	43	35
	上伊那	12	18	48	78	10	67	6	145	93	52
	諏訪	13	16	68	97	13	61	9	158	148	45
	塩尻	3	7	25	35	5	23	1	58	41	13
中信	木曾	4	5	14	23	5	6		29	41	15
	(東筑)									48	8
	松本	12	14	59	85	14	108	18	193	74	32
	安曇野	2	10	18	30	4	28	7	58	39	13
北信	大北	4	8	43	55	3	13	2	68	91	14
	千曲	1	1	25	27	3	23		50	26	15
	長野市	20	20	97	137	26	112	34	249	88	114
	須坂	2	2	27	31	3	24	2	55	36	24
東信	飯水		1	7	8	4	5		13	22	46
	中高		2	15	17	0	21	3	38	0	32
	上水内		2	7	9	0	12	1	21	9	1
小計	上田	12	11	44	67	5	50	4	117	62	50
	佐久	15	8	73	96	21	66	19	162	55	65
	小計	103	132	618	853	125	835	120	1688	916	574
競技者数：中体連3614、高体連1358、学連360、マスターズ160										学連173	
合計				853		6167		7020		917	

2 1987年（S62）以降のおもな歩み

- 1987年（S62）～ 理事長 小口正行 長野市
 - 1990年日本学生選手権大会開催（長野市）
 - 1991年世界陸上参加の「オランダ・ポーランド・デンマーク」選手団が長野市で事前合宿
- 1995年（H5）～ 理事長 伊藤利博 長野市
 - 1997年日米ジュニア長野大会開催（茅野市）
 - 長野オリンピック記念マラソン大会開催確定
- 1999年（H11）～ 理事長 城田忠承 上伊那
 - 2000年シドニーオリンピックに柳澤哲（中野実高出）、小池昭彦（長野高出）2名が出場
 - 2001年第17回日本ジュニア選手権大会開催（松本）ジュニア日本新1、同タイ1、高校最高1、大会新

延べ17、同タイ2など好記録に沸いた

- ・2004年第9回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会で初優勝、2005年、2006年と史上初の3連覇
- (4) 2007年(H19)～理事長 細田完二 上田市
 - ・2008年塚原直貴(東海大三高出)が、北京オリンピック4×100m(第1走者)で銀メダル獲得
 - ・2008年男子第59回全国高等学校駅伝競走大会で佐久長聖高校が初優勝(県勢初優勝)
 - ・2011年第46回全国高専 代替地開催(長野市)
 - ・2012年第96回日本選手権・混成競技、第28回日本ジュニア選手権・混成競技開催(長野市)
 - ・2012年ロンドンオリンピックに藤澤勇(中野実業高出)、佐藤悠基(佐久長聖高出)の2名が出場
- (5) 2015年(H27)～現在 理事長 内山了治 長野市
 - ・2016年第43回全日本中学選手権開催(松本市)
 - ・2016年リオオリンピックに荒井広宙(中野実業高出)50km競歩銅メダル、藤澤勇(同)、川元奨(北佐久農高出)、大迫傑(佐久長聖高出)が出場。
 - ・2017年第52回全国高専大会開催(松本市)
 - ・2021年第105回日本選手権・混成競技、第37回U20日本選手権・混成競技10年連続開催(長野市)

3 競技会運営について

2015年度改選にあたり内山了治理事長が審判部長に青柳智之(39)、競技部長に横打史雄(38)を抜擢するなど全体的な若返りを図った。新体制で陸協が一丸となり、2016年開催の全日本中学大会に向け、日本陸連の指導を仰ぎながら日本選手権・混成競技をはじめ各種競技会の改善に取り組み、Athlete(競技者)、Spectator(観客)and Referee(審判員) Friendlyの視点を尊重し、会場が一体となり競技会を盛りあげ、競技者のパフォーマンスを引き出す運営を心掛けて定着させてきている。これらは、青柳審判部長が2015年に日本陸連JTOに合格し2017年に競技運営委員会委員に推薦され就任、横打競技部長はじめ7名が世界陸連NTOに合格するなど、審判員個々の意識改革や努力の賜が本協会全体の競技運営力の向上と評価に結び付いている。

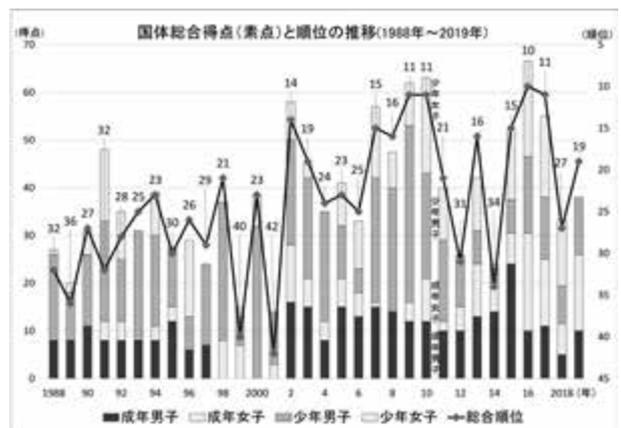
競技運営の要となるIT化は、1991年度に審判委員会の中に「写真判定部」が新設され本格化した。2001年度には「情報システム委員会」が新設され、大会準備、競技運営、大会後の日本陸連への記録申請など多岐の業務を担った。特に記録処理では、松本にセイコータイムシステム社製「Mark 5」とスリットビデオ(写真判定装置)が導入され、正確かつ素早い記録判定と結果発表所要時間を大幅に短縮した。また、スタンドアローン型のMark 4が県下の競技場(長野・伊那・飯田・茅野)に導入され、同委員会は各地の指導とオペレーターの育成に追われた。その後、投てきや跳躍競技の距離と高さを光学的に計測する「光波測定器」が導入され、高精度な計測と大幅な時間短縮、並びに審判長が現場で即時記録承認する流れとなった。更に、短距離の不正スタート判定を

サポートする「SIS: Start Information System」(反応時間が0.100秒未満の場合に自動的にリコール信号を発信するなど)が2014年長野、2016年松本にそれぞれ導入され、IT化はますます進化した。2016年に「情報システム委員会」は当初の役割が一段落したため廃止され、競技運営委員会記録部としてこれまでと同様に活動することとなった。

また、本協会ホームページは2000年に遠山正洋総務委員長が開設し、その後、(有)丸ノ内企画へ業務委託し、より見やすく機能的になり訪問者は1日平均1,400人を超え、2021年8月には延べ500万回を超えた。これらのIT化推進・充実には葛城光一副理事長並びに瀧沢佳生記録部長が重責を果たしている。

4 競技力向上、2028国スポ成功・優勝に向けて

本協会の1988年度以降の国民体育大会の成績変遷を図に示した。1978年に本県で開催された第33回国体(やまびこ国体)では、天皇杯2位、皇后杯優勝という輝かしい結果を残したが、10年後の1988年には天皇杯32位、皇后杯は成年女子0点、少年女子1点のみという結果に落ち込み、その後の10年間も天皇杯の平均順位は27.7位、1999年には40位、2001年は42位という結果に至った。2001年に就任した玉城良二普及強化委員長と掛川和彦強化部長は、記録会の開催をはじめ強化対策を充実させ、翌年の高知国体では男子リレーが初の決勝進出7位入賞他、天皇杯は14位となり飛躍への転機となった。その後も、少年で活躍した競技者:石川和義、塚原直貴、藤澤勇、今井沙緒里、宮澤有紀、原翔太、嶺村鴻汰、宮坂楓、川元奨らが力を伸ばし、日本のトップ選手としてオリンピック、世界大会及びアジア大会などへ出場し活躍した。国体にもチーム長野の大黒柱として参加し、その存在が少年や各競技者の安心感や自信に繋がり、選手団の勢いを強め2009年と2010年は天皇杯を11位まで押し上げた。2012年は、佐藤悠基、藤澤勇がロンドン五輪へ出場、2014年は川元奨、佐藤悠基、大迫傑がアジア大会出場により、総合得点は落ち込んだが、男子リレー(松下、原、樋口、塚原)が39秒89の県記録で7位入賞するなど成果を高めた。2015年からは中津敦喜委員長、藤森要強化部長に交代し、やまびこ国体以来の女子リレー入賞(2015



年)と皇后杯6位入賞(2016年)を果たした。その後、普及強化委員長は中津から藤森、横打史雄へ、強化部長は藤森から名取和訓、中津へ交代し成果を高めている。これらの背景には、2000年富山国体から選手団に帯同する県体協派遣のJATAC長野のトレーナーの存在、特に野竹接骨院野竹富士雄院長はじめ数多くのトレーナーが日頃の練習会でも競技者の特徴を捉え信頼関係を深めたコンディショニングの成果があったと言える。

2028年国民スポーツ大会の成功・優勝に向けては課題が多く、2017年に4つのプロジェクト(デザイン、競技力向上、競技運営力向上、競技施設)を立ち上げ取り組

んでいる。やまびこ国体で活躍した小松茂美副会長は、担当として本県の置かれた状況を鑑み、競技者と指導者が一体感を持ち、「少年世代の強化を充実させる」、「有望選手の獲得も視野に入れ、体制づくりに取り組む」ことを優勝の要件としてあげている。近年の国体優勝には120~150点が必要であり、少年期から世界を視野に入れ世界で活躍できる競技者の育成が必須となる。多様性のある強固な協会組織・運営とともに、競技会運営と競技力向上を目指し、総力をあげてさらなる取り組みが必要である。

一般社団法人 長野県サッカー協会

長野県サッカー協会は、サッカーを愛する先輩各位の献身的な熱意と協力により、1946年7月、協会創立の準備会がもたれ、その翌年の1947年に誕生した。

本年度で設立74年を経過し、長野県スポーツ協会とほぼ同じ歩みを進めています。

日本の屋根アルプスを背にした長野県は、四季の変化に富んだ山紫水明の地であり、自然を愛し、スポーツに親しむ県民性がみられる。

日本が新しい時代を迎えた明治から令和の時代までの長野県のサッカーの動きを追ってみることにする。

本県におけるサッカーの黎明期にあげられるのは、明治44年に阿佐美昌三が松本中学に赴任し、大正3年に、蹴球部が設立されたが、1年のみで定着しないまま終わってしまった。

大正12年、松本高等学校の競争部の中に付属蹴球部が設立された後に、いち早く高技に取り入れたのは隣接の松本第二中学校(現松本県ヶ丘高等学校)で、初代校長の小松武平氏は、松本平に自由にして斬新な中学校を作りたいと高遠な理想をいだいて、自ら希望して新設校に赴任した。そして、その教育理念は、自由闊達にして、健全なる青少年を育成するために、知育、徳育と相まって重要視したのは体育即ちこの精神をくんだのがサッカーであった。そのユニークな教育方針は、イギリス流の自由教育であり、生徒に紳士的なフェア精神と粘り強い闘争心の強い持ち主になることが理念であった。このように県サッカー界の発展の源となっていく。

同校で初代監督には松本寛次氏を大阪府立堺中学校より招き初代の教頭兼監督としての最適任者として迎えた。氏は東京高等師範時代はサッカー部のキャプテンとして活躍した人物で、氏を抜擢したのは、小松校長のサッカーに賭ける情熱とみられる。小松校長の方針は全校生徒にサッカーシューズを買わせ、通学はもちろん、校舎内もこのシューズをはかせるといった徹底ぶりであった。このサッカー学校の伝統は一時第二次世界大戦

で中止されたものの、現在なお、県高校サッカー界に君臨している。

一方南信地方では飯田中学校を中心にした発祥がみられる。ここでも春日賢一校長が外遊時に本場イギリスのサッカーゲームを見て、感激した春日氏は、帰国土産に「本校でもサッカーをやろう」とみずから指導に乗り出し、校長陣頭指揮で活気づき、松本二中に続きサッカー学校の出現となった。部の創立は大正13年、塩沢幹(元日本体育協会事務局長)らが中心になって発足した。その後、昭和3年、東京師範のウイングとして活躍した平林圭介(長野県サッカー協会会長、元松本深志高校長)が飯田中学に赴任してきた。平林氏は前年、塩沢氏の依頼でコーチにきていたので、部員は偶然とは思わぬ再会に驚いた。

同年夏には東京師範チームが飯田市で合宿して、合同練習するなど、二つのサッカー部は兄弟のように親しくなった。高師仕込みのサッカーで力をつけた飯田中学は、九月に近県下中学校大会で松本二中を破って初優勝した。翌年4年も連勝を果たし、六年にも優勝するなど県下に名をなした。

北信地方では長野中学蹴球部の発足は昭和2年であるが、サッカーはすでに大正末期から導入され、そのクラスマッチは荒いことで長中名物となっていた。ラフプレーは当たり前で、今では語り草となっている。蹴球部の育ての親は樋口秀治教諭。樋口氏の努力で東大や早大からコーチが招かれ、長中の「荒いサッカー」は、近代サッカーへと急速に発展していった。そして昭和8年、長野中蹴球部にとって最良の日を迎えるのである。9月の近県下中等学校大会の初優勝、10月の県下中等学校大会でも決勝で、松本二中を1-0で破っての優勝と、県下中等学校サッカー界の王座に就いた。

東信地方では、南信地方と同じく上田中学校の蹴球部創設は昭和3年である。当時、全国Aクラスについた暁星中学との親善試合に勝って、サッカー熱は一段と高ま

り、部の独立を果たした。その後、兄貴分の上田蚕専の胸を借りて鍛えられ、強くなっていった。OBの結束力も強く、上田中学をサッカーどころに仕上げていった。戦後、復興期に他校に先駆けて国体出場（昭和27年）の一番手になったのは、このチームワークの開花とみてよい。

戦後ではやはり3強の争いであったことは事実で、途中で無くなった飯田中学を別にすれば、松本二中、長野中学、上田中学の三強の争いに尽きる。

学校体育以外の動きについては、昭和に入り、急速にサッカーが普及し、実業学校や社会人のチームもあられ、昭和3年から開かれた県体育会主催県下蹴球選手権大会への参加チームも急速に増加し、昭和6、7年には戦前の最盛期を迎えた。その後戦争の激化により、昭和16年以降大会は行われなくなり、各校の蹴球部も次第に活動中止の状態に陥り、昭和19年以降、県下のサッカー空白の時代を迎えた。

敗戦の混乱がやや沈静化した昭和21年から、各中学校に蹴球部が復活、また新設も始まり、松本、上田を中心に社会人チームも活動を開始するようになった。因みに、21年松本二中の復活に続き、大町中学に新設された。よく22年には、上田、飯田、長野を中心に復活している。また学制改革で旧制中学校が新制高等学校に変わり、合併、新設高等学校も盛んに創立されていった。

昭和21年の夏から当時の県体育課、長野師範学校、松本、上田、飯田などの関係者は物心両面の苦しい状況下、県蹴球連盟結成の準備を進めてきて、昭和22年7月16日に県庁で最終の会を持った。当日の出席者は体育課長宇野氏、長野から坂田氏、松本から坂野氏、福原氏、立川氏、上田から土屋敦博氏、飯島栄次氏、大日向氏、飯田からは高堂氏と、県庁の柿沢氏で、即日県蹴球連盟の結成となった。（体育史）役員構成では、会長丸山恒人氏（松本）理事長坂田明氏（長野）が選出され、事務局は県庁体育課柿沢章治氏が担当し発足した。その後昭和28年に長野県蹴球協会に名称が変わっている。

戦後、県下中等学校の蹴球部の復活にOBの援助や指導は献身的なものがあつた。松本二中OBでかつて早大蹴球部の主力選手をつとめた折井好郎氏は傷痍軍人として松本国立病院で療養中から後輩の指導に当たり、退院後昭和34年まで12年間監督をつとめた。

22年に県ヶ丘高校OBを中心とする松本サッカークラブが結成され、また富士電機、宮田製作所、片倉機器、中部電力等の社会人チームが誕生し、これら松本地区のチームは学生も加えて、リーグ戦を開催し、以後数年続いた。

昭和23年の新学制施行以降は年々高校サッカーチームが増加していった。昭和41年に至り、全国高校総体に出場した松本県ヶ丘チームは、前年優勝校大阪明星高校を破り準決勝に進出し3位の座に輝いた。

当時の長野県のサッカーは、東信地区、中信地区にかたよりがみられ、実業団チームも松本地方にあるだけで、



サッカー基盤の貧弱が叫ばれていた。40年代は全国的に高まったサッカーブームで中学校にサッカー部が急増した。

昭和50年からは北信越サッカーリーグが始まり、長野県から2チームが参加し社会人サッカーの発展に努めた。

昭和60年、平成に入り、県下各地区でサッカースクール熱が盛んになり、底辺である小学校年代の意気が盛んになってきた。また、高校選手権の覇者の座も、東信から中信、南信へと年々固定しない状態が続き、実力が均等化してきた感がある。また、小学校、中学校、高校でトレセン活動が盛んになり、技術向上に拍車がかけられている。平成5年のJリーグ発足、平成14年のワールドカップ招致等で平成年代は野球を凌ぐ感があり、プロサッカークラブは多くのサポーターを従えるようになりサッカー熱が一層高まってきた。

また、長野県ではJリーグを開催できる正式施設建設も進み、平成13年県的施設として松本平広域公園総合球技場アルウィンが完成し、現在のプロサッカーチームの活躍の場となっている。

長野県サッカー協会は、平成25年6月、日本サッカー協会の指導の下、法人化を果たし一般社団法人となった。平成29年には創立70周年を迎え、過去の功績者に感謝するとともに、これからの長野県サッカー発展を祈念した式典が盛大に開催された。

長野県には男女合わせて3つのプロサッカーチームが誕生し、また県内各地では全国を目指す育成環境の構築が進みつつある。

ここからの長野県サッカーは令和10年開催予定の長野国体に向け、競技力向上及び環境整備を進めながら更なる発展を目指して歩いていくことになる。

長野県テニス協会

1. 沿革(組織体制)

昭和30(1955)年:「長野県庭球協会」として、上田・長野・飯田・伊那・軽井沢の愛好者により発足。同時に日本庭球協会・長野県体育協会に加盟

昭和36(1961)年:長野県高体連の庭球部に男子3校(深志・松商学園・上田)女子(松商学園)が加盟、以降、高校に部活の増加

昭和50(1975)年:規約を日本庭球協会に準じて改定、創立20周年誌発刊、(常任理事13、理事39、加盟団体14、大学6、高校12)

昭和57(1982)年:日本テニス協会の改名に準じて「長野県テニス協会」に改名

昭和58(1983)年:ジュニア大会の増加に伴い、競技部から分岐したジュニア部発足

昭和61(1986)年:創立30周年記念式典、記念誌の発刊(常任理事22、理事112、加盟団体32、大学2、高校39)

平成1(1986)年:規約を大幅改正し、加盟規定・会計規定・表彰規定・賛助会規定などを整備する

平成7(1995)年:創立40周年(常任理事20、理事61、加盟団体28、大学2、高校68、特別加盟団体2)

平成13(2001)年:長野県中学校テニス連盟が加盟、これを契機にテニス部の中体連加盟の支援を行っているが道は遠い

平成16(2004)年:創立50周年記念誌発刊(常任理事20、理事57、加盟団体24、大学2、高校76、中学3、特別加盟団体3)

平成21(2009)年:委員会とは別に部会(選手選考・公認指導員認定)を新設

平成22(2010)年:競技者のマナー向上を図るため倫理部会増設

平成24(2012)年:財政基盤の強化を図るため財務部会を設ける

2. 協会の歩み

(1) 主たるトピックス

昭和42(1967)年:第57回高校総体テニス競技を松本市県営庭球場にて開催

昭和52(1977)年:国体に向けて浅間温泉庭球公園を整備

昭和53(1978)年:第33回国民体育大会「やまびこ国体」松本市浅間温泉庭球公園にて開催(役員255名、補助員226名)

昭和55(1980)年:ランキング制度を運用開始、シード選手基準の適正化を図る

昭和56(1981)年:北信越国体を松本市浅間温泉庭球公園にて開催、以後ミニ国体として5年ごと北信越5県の持ち回り開催となる

昭和57(1982)年:オール信州エプソンカップが開催され、

1000名の参加を超える県内最大級の大会に発展したが1998年をもって終了する

昭和63(1988)年:「テニスのしおり」が発刊され、大会要項、申込書が統一されたものとなる。全日本テニス選手権のシングルス予選会として長野県選手権を位置づける

平成6(1994)年:信州博覧会会場のやまびこドームに砂入り人工芝コート6面(後年8面に拡張)を整備し、冬の大会等に活用

平成7(1995)年:協会のホームページが開設され、情報公開・伝達の円滑化を図る

平成9(1997)年:ホームページにランキングが公開され、随時更新されることとなる

平成11(1999)年:松本平広域公園のコートを砂入り人工芝8面に改修し長野県大会の主会場となる

平成12(2000)年:松本市南部屋内運動場(室内4面砂入り人工芝コート)が完成し、協会の諸事業に通年活用される

平成13(2001)年:長野オリンピックの開会式会場の長野市南長野運動公園に砂入り人工芝16面のコートが完成し、ジュニア大会などの主会場として活用される

平成15(2003)年:独自ドメインのサーバー設立、ホームページを多方面に充実したものに再整備、携帯電話からのアクセスも可能にした。会員登録制度の運用で、大会への申し込みを団体からの申し込みから個人エントリーとし、申し込みのミスが改善された

平成20(2008)年:北信越ベテランテニス大会を浅間温泉庭球公園で開催、以後毎年開催する

平成29(2017)年:長年にわたり貢献した三村功(現会長)が旭日単光賞を叙勲

令和2(2020)年:新型コロナウイルスによりほとんどの行事が中止となる中、感染防止の統一ガイドラインを設けて可能な限りの行事を行う。理事会は初の文書回覧決議となった

令和3(2021)年:引き続き無観客などの感染対策を講じつつ、全国高校総体を高体連の先生・生徒の方々の力で完遂する



<現在の県協会のホームページ>

(2) 選手強化の成果：主たる全国大会入賞者

昭和48(1973)年：第28回千葉国体、少年男子ベスト8

昭和49(1974)年：第29回茨城国体、成年男子ベスト8

昭和58(1983)年：第38回群馬国体、少年男子ベスト4

平成4(1992)年：第47回山形国体

平成8(1996)年：第51回広島国体

いずれも少年男子第7位

平成9(1997)年：第19回全国選抜高校大会、松商学園高校、女子団体ベスト4、第52回大阪国体、成年女子第7位

平成11(1999)年：第38回全国実業団大会(B)、シメオ精密、男子団体準優勝

平成12(2000)年：第38回全国実業団大会(B)、シメオ精密、男子団体優勝

平成13(2001)年：第23回全国選抜高校大会、松商学園高校、男女とも団体ベスト8

平成19年(2007)年：第62回秋田国体、少年男子第4位

平成21(2009)年：第64回新潟国体、少年女子第6位

平成22(2010)年：第65回千葉国体、少年男子第8位

平成23(2011)年：第66回山口国体、少年女子第6位、少年男子第7位

平成24(2012)年：第67回岐阜国体、少年男子第7位、第102回全国高校総体：松商学園高校、諱五貴・西脇一樹、男子ダブルス優勝、牧野菜摘・野崎真帆、女子ダブルス準優勝

平成27(2015)年：諱五貴：全日本学生室内男子シングルス優勝、全日本学生男子単準優勝、男子複ベスト4、西脇一樹：全日本学生男子複ベスト4、全日本学生室内男子複ベスト4

平成28(2016)年：第71回岩手国体、成年男子第3位、諱五貴：全日本学生男子複ベスト4、西脇一樹：全日本選手権男子複ベスト4、全日本学生男子単ベスト4

平成29(2017)年：第107回全国高校総体、松商学園高校、女子団体準優勝、川島和美・笠原沙那：女子複ベスト4

平成30(2018)年：第57回全国実業団大会(B)、キッセイ薬品工業、女子団体優勝

令和1(2019)年：第58回全国実業団大会(B)、キッセイ薬品工業、女子団体準優勝

(3) 普及への試み

近年は競技者の減少に歯止めがかからない中、ジュニアからテニスに馴染むため、PLAY&STAY、テニピンなどに力を入れている。



長野県ホッケー協会

長野県内でのホッケーは現在、駒ヶ根市のみで行われています。

ホッケーは、6人でプレーする大会と11人でプレーする大会があり小学生は6人、中学生は6人と11人、高校生からは11人の大会となります。

スポーツ少年団(小学生)、赤穂中学校、赤穂高等学校、駒ヶ根工業高等学校、成年男子・女子で活動していましたが、少子化に伴い赤穂高等学校男子ホッケー部が廃部となり、続いて2014年に駒ヶ根工業高等学校ホッケー部が廃部、2020年に赤穂高等学校女子ホッケー部も廃部



(スポーツ少年団 2018年東日本大会)



2020年 小学生を対象とした体験会
キーパーは2020年U15日本代表に選ばれました。

となり、長野県内で高校ホッケー部がなくなってしまいました。現在は同好会として活動できないか検討しているところです。

スポーツ少年団は、毎年10~15人程度小学生が集まります。男女混合チームでの参加が可能な西日本・東日本大会に毎年参加しています。2018年には東日本大会で優勝していますが、全国交流大会は、高学年のみの男女別

で参加となるため、なかなか参加できない状態となっております。

赤穂中学校では、人数がギリギリの状態の年もありますが北信越大会に参加して、全国を目指しております。また2020年には女子ホッケー部から全日本代表選手が選ばれるなど活躍しております。

成年男子は、関東リーグに参加して、現在は1部リーグでがんばっています。

競技人口が減ってきている現状ですが、2018年頃より普及活動に力を入れており、小学生を対象とした体験教室や外部コーチを招いてのトップアスリート事業などを行っており、徐々に人が増えてきているように思えます。また、2020年からクラブチームを設立し小学生から社会人の一貫した強化に努めています。

今後も2028年の長野国体にむけて、人員の増員・強化、練習場所の確保に努めていきたいとおもっております。



2019年 日本代表選手など外部コーチによるトップアスリート事業

長野県ボクシング連盟

1 発足当初

昭和21年、上田市に新聞記者として赴任した、日大ボクシング部OBの高柳博典が、戦後混乱期に青少年の非行防止と不屈の精神涵養を目指し、上小地区の青少年を集めて清明小学校の講堂を借りて練習を始めた。物資の欠乏が著しい時期であったため、進駐軍の使い古しを譲り受けた。

やがて、上田繊維専門学校（現信大繊維学部）の学生と、市内の中学生等50人程が集まり「高原拳闘倶楽部」を結成、初代会長に矢崎憲一が就任した。

22年6月、名称を「上田拳闘倶楽部」と改称し、日本アマチュアボクシング連盟に加入。練習場も上田市原町（現中央三丁目）に二階建ての土蔵を借りて開設。ここには、サンドバッグも仮設リングも設置され、軽井沢や長野方面からも入門希望者が集まり、多い時は150名の練習生が汗を流した。

2 創設期

当時、東信各地では新興スポーツのボクシングに対する住民の興味が強く、自分たちの村や町で公開試合をしてもらいたいとの依頼も多かった。しかし、正規のリングも無いため、盆踊り用の舞台上荒縄1本が張られた場所で試合をしたことも少なくなかった。また、選手のがい用のビール瓶に本当にビールが入っていたという笑い話もあった。このような啓蒙試合をきっかけにして、松本市に「松本体育拳闘会（会長丸山恒人）」・小県郡丸子町（現上田市丸子）に「丸子拳闘倶楽部」・佐久郡岩村田町（現佐久市岩村田）に「佐久拳闘同好会」が次々につくられた。そして、これらを一本にする機運が生まれ、22年9月13日、上田商工会議所において長野県拳闘協会が発足、初代会長に矢崎憲一、副会長に丸山恒人、

理事長に高柳が就任した。

3 発展期

北信越で最初に発足したせいもあり、22年10月に金沢でおこなわれた第2回国民体育大会に初めて出場した。23年4月には上田繊維専門学校と上田中学（現上田高校）にボクシング班が誕生している。また、24年5月におこなわれた第1回全日本社会人選手権大会に於いて、宮下正人がバンタム級で優勝、水上路輝がフェザー級で準優勝を果たした。同年12月、県拳闘協会は「長野県アマチュアボクシング連盟」と改称、上田拳闘倶楽部も「上田ボクシングクラブ」へと名称を変えた。

県連盟は23年9月1日に体育協会に加盟し、これを機会に一層の普及発展を図るため神奈川大学・拓殖大学・日本大学等関東の名門を迎え強化試合を積極的におこなった。こうした機運のもと、大学へ進んだ選手は高度な技術を身に付け活躍している。宮下、水上両名の他では、土屋潔（日大）がバンタム級、友成光臣（早大）がウェルター級で優勝、大月久丸（拓大）が3位と輝かしい成績を収めた。

第6回広島国体では優勝候補の前評判が高かったが、2回戦で強豪の東京都と対戦し4-3で惜敗している。この試合はスポーツ新聞等に『ミスジャッジで優勝候補長野県敗れる』と掲載された程であった。なお、27年から29年までの2年間、県警察学校が体育にボクシングを採用、高柳理事長が指導者に委嘱されて指導をおこなった。（機動隊と長野署では講習会）

4 過渡期

35年6月、松本美須ヶ丘高校・上田東高校・東京特殊電線会社にそれぞれボクシング部が誕生した。しかし、

個々には優秀な選手も存在したものの国体は団体戦であるため、第2回大会から36年まで通算12回の出場をはたしながらも1回戦敗退が続き、選手層も減少傾向が目立ち始めていた。このような中で、初期の練習生であった青島正利が神奈川大学を卒業後、上田市にUターンし、上田クラブのコーチに就任して地道な努力を重ねた。また、この頃には名門明治大学ボクシング部で活躍した、大宮司洋一氏（後2代目理事長）が中心となって試合に出場し、南条、市川といった上田クラブの選手達と共にチームを支えた。

5 充実期

47年、中京大学ボクシング部出身の小宮山泰典が池田工業高校にボクシング部を創設して高校の選手育成に努め、51年の長野インターハイに初出場した。53年長野県丸子町で開催された長野国体に於いては成年・少年とも5位入賞という快挙を成し遂げ、全員が手を取り合って喜びあった。

また、北信越高校選手権大会に於いても、池田工業が計3回の学校対抗優勝を遂げている。なお、卒業生の中で特筆すべきは、清沢利安選手である。拓大ボクシング部に進学し、フェザー級に於いて全日本選手権で二連覇し、アジア大会に出場して銅メダルを獲得している。こうして高校OBにより成年も充実したチームを編成することができた。



小宮山は、池田での9年間の指導の後、丸子実業高校（現丸子修学館）に転勤しボクシング部を立ち上げた。代表的な選手はLウェルター級の手塚選手とはLフライ級の海藤である。伴に全国高校総体で5位入賞を果たしている。また、北佐久農業高校から東京農大に進学し、大学リーグ戦、全日本で活躍した中沢剛（現更級農業高校高校教諭）がその後、監督となり、土屋・須江を擁して北信越を制している。

6 現在

日本連盟が変更したことから、県連盟もアマチュアボクシング連盟から長野県ボクシング連盟へと名称を変え現在に至っている。理事長には長年尽力された大宮司氏から、奥原亨氏が就任している。恵仁会の黒澤一也会長、紀子医事委員長の大きな支えもあり、2018年には、福井国体に少年が32年振りに出場する事が出来ました。選手の努力と役員の皆様の地道な努力の賜物だと思います。現在は野口尚宏会長をお迎えし、皆で協力して選手の育成に励んでおります。令和3年度は、選手も大幅に増え、北信越国民スポーツ大会には女子フライ級で長野県初のエントリーをする事も出来ました。

2028年やまびこ国民スポーツ大会に向けて、ボクシング競技を大発展させて参ります。

一般財団法人 長野県バレーボール協会

当協会は昭和61年10月財団法人を設立し同年創立40周年、平成28年には創立70周年を迎えるに至っています。本稿では財団法人設立以後30数年間の活動状況を10年毎に区切って報告することとします。

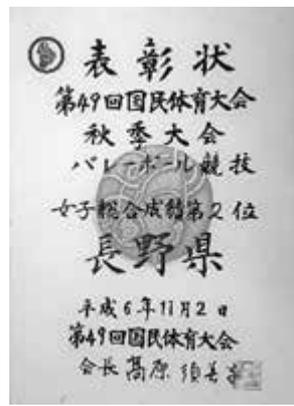
■昭和62年～平成8年

若尾勝美・齋藤治両専務理事などの尽力でNHK杯（S62）、国際男子ジュニア大会（S62）、全日本ジュニア男女中国対抗戦（S63）、男子日ソ対抗戦（S63）、女

子全日本・キューバ戦（H1）など比較的小規模ながら精力的に国際大会を誘致、また全日本男女チームの紅白戦や多くの日本リーグ（現Vリーグ）など国内イベント開催での堅実な大会運営で日本バレーボール協会の信頼を勝ち取り、平成3年11月ついに'91ワールドカップ男子松本大会を開催するに至った。現在では珍しくないが当時この規模の国際試合が地方都市で開催されることは稀で松本市での開催が先鞭をきった。竣工まもない松本市総合体育館には日本チームがないにも拘わらず2日

間で延べ14,200人のバレーボールファンが詰めかけ大成功の裡に幕を閉じた。松本市では平成7年にも'95ワールドカップ女子大会の開幕戦（3日間）が開催され延べ14,000人が来場した。県内では以後世界選手権やワールドリーグ、グランドチャンピオンズカップなど多くの国際ビッグ大会が開催されるようになった。

国体においてはH2年福岡国体で天皇杯（男女総合）3位（115点）皇后杯（女子総合）4位（60点）H4年山形国体天皇杯3位（95点）平成6年愛知国体皇后杯2位（60点）など、上位常連都道府県に楔を打ち込み「バレー長野」の存在を示した。その間常に上位入賞し得点源となったのは少年男子（岡谷工高など）成年女子9人制（セイコーエプソン）で、両種別の安定的な活躍に他の種別が上乘せされるスタイルが確立された。また9人制2部において往年の名選手達が県選抜のもとに集結貢献すると共に県協会結束の原動力となり、また加盟団体などの飛躍にも貢献したことは特筆すべきことである。



その他長野教員男子チームが全日本教員選手権大会で4連覇（H6～H9）、女子チームも連続準優勝など常に上位入賞し、またクラブカップなどでも大いに活躍した。この世代の教員の多くがやがて県内ジュニア世代の指導者としても大いに力を発揮し、その後の中学高校大会での県内選手・チームの大活躍に繋がっていく。岡谷工高男子は春の高校バレー（高校選手権）にて準優勝（H2）国体での活躍も含めて期待が高まっていく。中学生はさわやか杯全国都道府県対抗大会（現JOC杯）において女子が準優勝（H2）しH7年大会では念願の初優勝を飾る。また全日本中学選手権大会では岡田隆安監督率いる裾花中女子が優勝（H8）男子も小布施中が準優勝（H7）するなど男女ともに全国の強豪に数えられるに至った。小学生バレーにおいては社会貢献のもと協賛企業も多く連盟において多くの大会が企画され登録チームも増加し盛況となる。ビーチバレージャパン女子大会で長野レディース（永井・勝野ペア）が準優勝（H2）し山国長野においてビーチの芽吹きの時となった。高橋由紀子（県出身）のアトランタ五輪ビーチバレー5位も話題となった。

H3年原敏会長が退任、替わって羽田孜氏（衆議院議員）が会長に就任した。この年生涯スポーツとして愛好

家を増やし長野県ソフトバレー連盟が設立、初代会長に原敏氏が就任し組織化が図られた。H8年には設立50周年を迎え「全日本対ロシア」の国際親善マッチを記念事業として開催した。

■平成9年～平成18年

5期10年にわたり専務理事として法人化や組織・財政基盤の確立などに尽力された齋藤治氏が退任、替わって杉村彰則氏が専務理事に就任し協会事務所も松本市から岡谷市に移転した。

松本市において'91-'95ワールドカップに続き世界選手権女子大会（H10）を開催、長野市においては冬季長野五輪の余韻が残る長野市ホワイトリングで'99ワールドカップ男子大会（H11）を開催、3日間で50,700人（Bサイト史上最高）の観客を動員し国際バレーボール連盟（FIVB）より高い評価をいただいた。両市においてはそれ以後もワールドリーグ男子（H13-H16松本市）、ワールドカップ男子（H15長野市）、ワールドグランドチャンピオンズカップ（H17長野市）、世界選手権男子大会（H18長野市 5日間）など毎年の様に国際ビックイベントが開催された。また日・ロ、日・米対抗戦など国際親善試合やVリーグは地区連盟・地区協会の主管で運営開催されるようになり協会組織の底上げが図られていった。またこの頃より国際試合やVリーグの試合・セット間においてマーチングバンド、チアダンスなどが行われ次第にエンターテインメント化が進んでいく。しかしながら、Jリーグなどスポーツのプロ化や多様化が進行する中でバレーボール人気に陰りが見えはじめビックイベントの観客動員数も次第に減少傾向となっていく。

国体においてはH9年大阪国体で皇后杯4位（52.5点 成年女子2部準優勝）と健闘、H11年以降は得点源の9人制女子セイコーエプソンが復活し少年男子の大活躍をベースにH12年富山国体天皇杯7位（少年男子優勝）、H14年高知国体（少年男子優勝）、H15年静岡国体天皇杯4位（88点 少年男子優勝 成年女子9人制第3位）、H16年埼玉国体天皇杯8位（64.5点）、H18年兵庫天皇杯4位（97.5点 少年男子優勝 成年女子9人制第3位）と好成績を残した。

高校においては壬生義文監督の下、全国屈指の強豪に成長した岡谷工業高校が史上2校目となる春の高校バレー全国高等学校選抜優勝大会3連覇（H9～H11）、3冠達成（H12春高バレー・高校総体・国体）、国体少



年男子県選抜の主力としてこの十年で優勝4回、その他春高バレー・高校総体では優勝6回・準優勝3回等々、その名を全国に知らしめた。中学においてはアケリアス杯（現JOC杯）全国都道府県対抗中学生大会（H12）において男子が念願の初優勝、女子も第3位と大活躍、女子はH17年に2回目の優勝を飾る（男子第3位）など常に上位を狙う強豪県の一つとなった。その中心となったのが裾花中学であり自身もH16年-17年と全日本中学選手権大会を連覇（優勝3回）した。またこの時期県下小学生バレーも活躍し全日本小学生大会において小布施スポーツ少年団女子優勝（H14）準優勝（H15）し、若穂ジュニア男子も優勝（H18）を飾った。この世代からは後にオリンピックや日本代表、またVリーグで活躍する多くの選手が輩出されたが一方で有望選手が県外高校へ進学してしまうケースが多くなり後の県下高校バレーのレベル低下の一因となっていった。

H13年には杉村専務理事が退任、替わって江村恵一氏が就任した。H12年には長野県クラブ連盟が設立、初代会長には北村嘉男氏（県協会名誉副会長）が就任した。長野県クラブ連盟はその後北村会長指揮の下で多くの全国・ブロック大会などを誘致し組織力を充実させる中で後の県協会を担う多くの人材を輩出していく。駒ヶ根市にビーチバレー普及強化の拠点となる県下唯一のサンドグラウンドが整備（H14）された。H17年には長野県ビーチバレー連盟が設立され初代会長に若尾勝美氏（県名誉副会長）、理事長には現役プレーヤーの三島英徳氏が就任した。H16年には江村専務理事の下で県協会ホームページを開設し県協会ニュースもデータ配信化するなど情報化時代への対応を図った。

■平成19年～令和2年

H18年羽田会長が退任（8期16年）、替わって瀬木 潔氏（㈱長野放送取締役副社長）が会長に就任した。また県協会は設立60周年を迎え松本市ホテルヴェナピスタにて記念式典と祝賀会が盛大に開催された。H18年6月公益法人をめぐる各種の不祥事や天下りの弊害、現行制度の制度疲労からの脱却等を目指して社団・財団法人制度改革の法律が公布され。これを受けて江村専務理事が中心となり当協会是一般財団法人への移行に向け準備が進められた。H22年3月理事会・評議員会にて移行が決議され「一般財団法人長野県バレーボール協会」として新たな船出をすることとなった。H25年には竹淵光雄氏が専務理事に就任し一般財団法人としての基盤固めが進んだ。H27年瀬木会長が退任（4期8年）され、替わって船木正也氏（㈱長野放送常務取締役）が就任し、R1年には竹淵氏に替わって村上里志氏が専務理事に就任、新たな体制の下で現在に至っている。

H19年2007ワールドカップ男子大会、H22年には世界選手権女子大会が松本市にて相次いで開催された。とくに世界選手権大会では米国・キューバなど世界の強豪6ヶ国が松本市に集結、5日間に亘って熱戦が繰り広げ

られ観客数はBサイトながら延べ34,600人を動員、主催者である国際バレーボール連盟（FIVB）より「日本の各会場が松本のようにやってくれたら世界バレーは必ず成功するでしょう！」と絶賛された。国際大会については長野市においてもワールドリーグ男子（H22）、2011



ワールドカップ女子大会（H23）、2019ワールドカップ男子（H30）、松本市では2015ワールドカップ女子大会（H27）が開催され、FIVB並びに日本バレーボール協会（JVA）の厚い信頼の下で何れも成功の裡に終了した。

バルセロナ五輪（H20）には県出身の松本慶彦と岡谷工高出身の越川 優が日本代表チームの主力選手として出場し健闘した。H27年にはVC長野トライデンツがVリーグに参戦し県バレー界にとって念願のVチームが誕生した。VC長野はCL2を制覇してCL1に昇格、翌年には長野ガロンズもCL2リーグに参戦、また女子についてもルートインホテルズブリリアントアリーズが誕生しV2リーグ参戦（R01）を果たした。VC長野はその後H30年シーズンに国内最高峰のV1リーグ昇格を果たし飛躍を続けている。しかしながらVリーグはH30年よりプロ化を目指して新リーグとなりホームゲームの主催もチーム側となったため、協会の関りは「協力」の立場となった。そのため多くの試合（R2年：51試合）が開催されても直接の収益源にはならないというジレンマを抱え財政難の当協会にとって今後Vリーグとの共存共栄を図る上で大きな課題となっている。

国体はH23年山口国体より9人制が廃止となり9人制女子を安定的な得点源としてきた本県には大きな痛手となった。H19年秋田は少年男子が準優勝、H20年大分は少年女子（東海大第三高主体）と成年女子9人制（セイコーエプソン）の健闘で天皇杯6位・皇后杯2位を獲得、翌年の新潟国体皇后杯3位、H22年千葉では少年男子（創造学園）の健闘で天皇杯7位皇后杯5位となった。H23年以降は9人制廃止の煽りを受け低迷するが、その中でもH25年東京国体ビーチバレー（公開競技）男女の初出場は明るい話題となった。またH27年和歌山では成年男子（VC長野トライデンツ主体）と少年男子（創造学園）で天皇杯7位と5年振りに入賞、H30年福井でも成年男子（VC長野）と少年男子（松本国際）で天皇杯7位を獲得し、男子種別中心に復活の兆しが見えた。今後は2028長野国民スポーツ大会に向け女子種別強化が課題となっている。

高校男子は名門岡谷工高に替わって壬生義文氏率いる創造学園（現松本国際）が台頭、女子は県中学女子強化の相乗効果で徐々にレベルアップが図られた。中でも東海大三は後にVリーガーとなる多くの選手を輩出した。また、中学から高校バレー界に転身した岡田隆安氏率いる東京都市大塩尻が頭角を現すことになる。創造学園はH23年高校総体に初優勝、同年の春の高校バレーでもおいても準優勝しその後も国体少年男子の主力として多くの入賞を果たし、R1年には松本国際高（H30校名変更）として再び高校総体の優勝を飾る。女子は東海大三・松商学園・都市大塩尻・長野日大など私立がしのぎを削り、指導者の世代交代なども相まって戦国時代が続いている。その中から安定的に全国上位に顔を連ねるチームの出現が期待される。中学では岡田氏の後継者である今井一仁氏率いる裾花中学女子が全日本中学選手権大会でH22年・25年・27年（6回目：史上最多）と全国優勝を飾り、裾花中を主力として臨んだJOC杯全国都道府県対抗中学大会においてもH20年・23年・27年と優勝し「バレー長野」の力を示した。この結果は中体連関係者が全

県的に選手発掘の網を張り巡らす組織的な強化活動の賜物でもあり関係者の努力は賞賛に値するものである。一方男子はサッカー・バスケットなどへの人材流出が顕著に現れジュニア期の競技人口が急減し低迷を余儀なくされている。またH28年以降は女子もこの傾向が顕著となり2028国民スポーツ大会に向けてジュニア期の競技人口拡大・国体世代の選手発掘強化体制の抜本的見直しに迫られている。

H29年設立70周年を迎えJVA嶋岡会長はじめ多数の来賓と諸先輩方とともに松本市のホテルヴェナピスタにおいて記念式典と祝賀会を開催し関係者一同で更なる発展を誓い合った。加盟団体においては県大学連盟設立（H23）県小学生連盟30周年（H24）県ソフトバレー連盟10周年（H27）県ママさん連盟設立40周年（R1）県ソフトバレー連盟30周年（R2）県クラブ連盟20周年（R2）など組織の成熟と基盤が拡大されている。

最後に設立以来多くの諸先輩方が情熱を傾け発展を続けてきた歴史を心に刻み、更なる発展を目指していくことを宣言して結びとする。

長野県体操協会

平成、令和の初めにかけての活動・活躍をまとめてみました。

◎新体操女子選手の活躍

新体操は、やまびこ国体で少年女子新体操3位入賞以降全国規模での入賞が全くなかった。昭和55年に松本にジュニア新体操クラブwingまつもとR.S.Gができ、その後平成になってから橋爪みすず（旧姓笠井）氏を中心とし、伊那弥生ヶ丘高校を基盤としたジュニアの選手育成を図る。このジュニアの選手育成の動きが全県中に広がり、多くのチームができて、切磋琢磨して長野県の新体操のレベルを上げることとなった。最近では平成21年新潟国体新体操女子6位、22年千葉国体新体操女子6位、24年岐阜国体新体操女子3位などの輝かしい成績を収めている。

◎平成20年全国中学体操競技総体誘致

全国中学体操競技総体が長野市ホワイトリングにて開催される。約20年ぶりの全国大会の誘致、また初めてホワイトリングでの開催ということで中体連を中心に3年ほど前から実行委員会を作って大会運営にあたってきた。多くの競技役員、ボランティアのもとで大会は成功裏に終わった。

◎平成25年東日本ジュニア体操競技選手権大会誘致

28年ぶりに東日本ジュニア体操競技選手権大会が長野

市ホワイトリングにて開催される。全日本ジュニアの予選会を兼ねたこの大会は、東日本各地より男女選手590名、5日間に渡って行われ、熱戦が繰り広げられてきた。県内からも多くの選手が参加し、そんな中、ジムネット体操教室所属松村朱里選手がAクラス2位に入賞。そして全日本ジュニア選手権で優勝という快挙を成し遂げた。

◎平成26年全国選抜新体操大会伊那西高校、個人総合猪俣涼子初優勝

新体操における活躍は先ほど述べたとおりだが、ジュニアで育ってきた選手がさらに力をつけて、ついに全国大会において伊那西高校が選抜大会で優勝。個人でも伊那西高校猪俣涼子が優勝した。新体操界で全国優勝は初めての快挙となる。

◎平成27年全国高校総体伊那西高校、個人総合猪俣涼子優勝

昨年に続き伊那西高校（猪又、北原、塩澤、児玉、河野、小宮山）が全国高校総体で優勝。個人でも伊那西高校猪俣涼子が優勝した。

◎平成27、28年全国中学校体操選手権大会大町第一中学校3位、29年2位入賞

ジムネット体操教室で育ってきた松村、坂口、原田、斉藤、國府方を擁し2年連続大町第一中学校3位入賞、

29年には2位入賞を果たした。

◎平成29年トランポリン協会との合併

日本体操協会とトランポリン協会の合併に絡み、長野県でもトランポリン協会が体操協会の一員となり合併を行う。それに伴い、トランポリンも強化、普及、審判委員会が設置される。

◎体操、新体操女子選手の大活躍

平成30年全国高校総体大町岳陽高校、伊那西高校ともに3位入賞。

国民体育大会少年女子3位、全日本体操競技種目別選手権において坂口さんは跳馬1位、段違い平行棒にて松村さん2位。全国規模での活躍が目立つようになってきた。そして日本代表メンバーとして選出され、種目別ワールドカップで坂口選手跳馬5位。

カナダ国際体操で、國府方さん個人3位入賞。世界でも活躍する選手が育ってくる。

◎世界で活躍する選手の排出

令和元年全国高校総体伊那西高校3位入賞、国民体育大会少年女子（器械）が2位入賞。

そしてついに世界体操競技選手権大会、日本代表メンバーに松村朱里さんが選ばれる。オリンピック代表選考

に県内選手が複数人残り、様々な場面で注目をあびる。その他種目別ワールドカップに坂口選手跳馬4位入賞。全日本体操競技団体選手権大会女子においてジムネット体操教室が団体総合2位入賞。この大会は実業団、大学なども出場するいわゆる日本一のチームを決める大会でこの2位も大変すばらしいものである。



第74回茨城国体

◎コロナ禍での大会実施

コロナ禍で多くの大会が中止となった中、インターハイ代替大会の令和2年2020年全国高等学校体操競技選抜鯖江大会にて大町岳陽高校2位入賞、令和2年度全国選抜新体操大会伊那西高校3位入賞。今後も女子選手を中心に活躍が期待される。

一般社団法人 長野県バスケットボール協会

昭和3年長野商業（長商）OBによって設立されていた「長野県バスケットボール協会」は、「大日本バスケットボール協会長野支部」として再出発した。大東亜戦争への足音が高まる中、昭和16年（1941年）2月には「大日本籠球会」と名称が変わり、昭和17年（1942年）9月大日本体育協会が「大日本体育会」と改組され「大日本体育会籠球部会」として吸収されていった。

そんな中、昭和20年（1945年）12月「日本バスケットボール協会」の発足に呼応して、松本市において「長野県バスケットボール協会」が設立された。この年開催された第1回国民体育大会北信越予選会では、ことごとく敗れたが、翌年は岡谷高女と松本中が北信越を抜いて出場し、岡谷高女は準々決勝まで駒を進め女子の活躍を暗示させた。

上田染谷丘高校は、昭和23年（1948年）福岡インターハイ、昭和24年（1949年）東京インターハイ、昭和26年（1951年）名古屋インターハイにおいて準優勝、名古屋大会では岡谷東高校も第4位に入賞している。

昭和27年（1952年）酒田インターハイでは岡谷東高校が優勝、昭和29年（1954年）の秋田インターハイでは飯田風越高校が準優勝、同じく神戸インターハイでも第4

位の成績を残す。

昭和26年（1951年）第6回国民体育大会で上田染谷高校女子が優勝、昭和25年（1950年）から昭和27年（1952年）まで全日本総合選手権大会において3連覇した上田染谷丘クラブなど戦後の10年は、日本の頂点に燦然と君臨した。

その後、男2、女2の実業団チームが誕生し本格的な活動を開始した。短い期間ではあったが、10年近く一般の部の競技力向上に貢献した。協会の恒常的な活動として、日本協会から一流の講師を招き技術講習会の開催や、昭和37年に第1回全国教員選手権大会を開催、幾多の国際試合の招致、ラジオ放送やTV放映（NHKの協力）にも力をいれ「普及」「強化」の為に県民へ情報を流し、関心を高める活動を行ってきた。

このような中、30年代、40年代の低迷期を脱する機会が、昭和51年全国高等学校総合体育大会（インターハイ）が本県での開催となり、女子松本蟻ヶ崎高がベスト8、男子松本県ヶ丘高がベスト16と頑張りを見せた。

昭和53年の本県開催の「やまびこ国体」では見事「総合優勝」を勝ち取ることが出来た。

それ以後は、協会として中長期の強化計画「ドリーム

プラン（計画）」を策定し、その実現に向けて力を合わせ、現実目標として、北信越国体を勝ち抜き、本国体において上位を目指せるようなチーム作りに邁進した。全国教員選手権大会では、2回の全国制覇、国民体育大会では、



成年男子が平成6年（1994年）第49回愛知国体・平成7年（1995年）第50回福島国体・平成8年（1996年）第51回広島国体において3年連続5位入賞を果たした。その後、平成30年（2018年）第73回福井国体において第3位、令和1年（2019年）第74回茨城国体において第5位の成績を収める。少年男子においては、平成22年（2010年）の第65回千葉開催において第5位入賞、平成24年（2012年）第67回岐阜開催では、念願の決勝進出し京都府との対戦でしたが、及ばず第2位の成績を収めてくれた。そ



の後、成年女子は、平成27年（2015年）に北信越国体を全勝で勝ち抜き、第70回和歌山国体において第5位の成績を収める。全国高校総合体育大会（インターハイ）においては、東海大学附属第三（現諏訪）高校が平成22年（2010年）の沖縄開催において第3位の栄冠に輝いた。

その後もインターハイでは上位の進出を重ねている。（公財）日本バスケットボール協会も公益法人化に改変するとともに、各都道府県協会のガバナンス改革に着手することになり、当協会も今までは任意団体の協会であったが、平成28年（2016年）に法人格を取得、一般社団法人長野県バスケットボール協会と改称した。2028年の二巡目になる「長野国体」に向け、役員一丸となって強化に取り組む所存です。

長野県レスリング協会

昭和41年、3代目会長（故）小林靖氏の念願であった長野県レスリング協会が創設され、競技普及への試行錯誤がはじまった。昭和53年長野国体（小諸市開催）の成功に向け日本レスリング協会や大学にアドバイザーを依頼し小諸市及び小諸市民とタイアップしながら見事に成功へと導いた。国体以後、競技力も飛躍的に向上し全国大会上位入賞や日本代表として海外へ渡る選手も数多く誕生する。2巡目長野国体に向け協会の念願である総合優勝実現に向け「一致団結」し普及・強化に邁進している。

役員歴任者

会長 柏木譲 油井孝一郎 小林靖
小林哲夫 中嶋則行（現）
理事長 油井孝一郎 小林靖 竹内喜久
柏木景岳 中嶋則行 小沢治
井出優（現）
事務局長 竹内喜久夫 田沢久幸 小沢治
中嶋則行 小林俊一 黒岩孝幸（現）
事務局所在地 小諸市役所 小諸青年の家 小諸高校
小諸商業高校（現）

【昭和60年代以降の足跡】

組織 支部組織発足は昭和61年に佐久市レスリング協会・平成元年小諸市レスリング協会・平成17年上田市レスリング協会がそれぞれスタートし3市の協会が出揃った。県少年少女レスリング大会も3市を順回りで開催となる。

当協会も定期総会に向け三役会・常任理事会の開催や各委員会を構成し組織の充実と普及、強化に努めている。

高校 昭和63年に北佐久農業高校にレスリング部が創部、その4年後の平成4年には上田西高校にもレスリング部が誕生した。両校が切磋琢磨し競技力が飛躍的に向上し全国レベルへと引き上げた。

女子は現在まで北佐久農業高校5名、小諸高校5名、上田西高校2名が在籍している。

歴代長野県大会参加校

小諸商業高校 箕輪工業高校 佐久高校 軽井沢高校 阿南高校 小諸高校
下伊那農業高校 松代高校 長野南高校 飯田長姫高校 丸子実業高校
北佐久農業高校 上田西高校 佐久平総合技術高校

大学・社会人 平成7年から高校で活躍した選手が強豪大学（日本体育大学・拓殖大学・専修大学・山梨学院大学等）に入学し多数の学生チャンピオンが誕生する。更にその選手が大学卒業後にオリンピックを目指し自衛隊体育学校・クリナップ・アルソック・新日本プロレス等に入り日本代表として世界選手権大会・アジア大会・アジア選手権に出場している。

女子も優秀選手が中京女子大学（現至学館大学）・大東文化大学・早稲田大学・法政大学・育英大学に入学し活躍している。

国体にも女子の部が新設され、現在2階級で実施されている。女子の普及、強化も2巡目長野国体に向け大きな課題である。

中学・キッズ 現在、長野県には小諸キッズレスリングクラブ、佐久市レスリング教室クラブ、上田レスリングスポーツ少年団の3クラブが活動しており情熱のある指導者のもと幼年から小中学生まで指導を行なっている。各クラブ共に全国レベルであり全国大会優勝者や入賞者を多数輩出している。

クラブ卒業生の活躍も目覚ましいものがあり2018年世界選手権の日本代表として小柳和也選手（小諸キッズレスリングクラブ出身）がフリースタイル61kg級に出場し7位入賞を果たして長野県レスリングに大きな希望と勇気を与えた。

今、活動をしている子供達が2028年の2巡目長野国体の主力選手になることから、協会が一丸となって育成に努め中期の強化計画を実施していく事が重要になる。

日米交流 日米親善高校レスリング大会が長野県では昭和51年から始まり、今まで15回15チームが来県し対抗試合を行った。長野県からも日本代表として過去に役員4名、選手30名がアメリカに渡っている。

【栄章】

【叙勲】

柏木 讓 S 52 藍綬褒章 S 63 勲三等瑞宝章

油井孝一郎 H 9 勲五等瑞宝章

(H 7 文部大臣表彰・H 3 知事表彰)

小林 靖 H14 勲五等双光旭日章

(H11 文部大臣表彰・H 9 知事表彰)

小林 哲夫 H29 勲旭日双光章 (H25 知事表彰)

【国体功労者表彰（選手、監督で合計30回以上参加）】

平成30年度 井出真一

【日本レスリング協会表彰】

《長野国体功労賞》S53柏木讓・小林靖、S57油井孝一郎、S63小林靖、H24小林哲夫・竹内喜久夫、H29柏木景岳

【長野県スポーツ振興功績者表彰者】

《有功章》S 51 柏木讓、H 4 小林靖、H15 田島春男、H16 竹内喜久夫、H20 甲田保雄、H21 小林哲夫、H22 柏木景岳、H23 荻原謙一、H24 佐藤敏通、H25 小平学、H26 大池毅、H27 前田豊、H28 下平富士雄、H29 田沢久幸、H30 小沢治、R 1 中嶋則行、R 2 山浦利光



第74回茨城国体

《栄光章》S 54 曾根哲郎、S 58 中嶋則行、S 60 高橋成敏
H 8 平井進悟・吉澤克洋、H11 大井将憲、H13 森角裕介、H14 田守竹夫、H15 高橋龍太・前島信彦、H20 富岡直希、H30 小柳和也・塩川貫太、R 1 佐々木風雅
《勲功章》S 58 小林靖、S 60 小林哲夫、H11 中嶋則行、H22 井出真一、H30 井出優、R 1 平井進悟

【県体協記念表彰者】

40周年 S 63 柏木讓・油井孝一郎

50周年 H 9 竹内喜久夫 60周年 H19 小嶋国彦

【文部科学大臣表彰】

H18 小諸キッズレスリングクラブ

H21 佐久市レスリング教室クラブ

【特記事項】 全日本チームの支援役員としてレスリング世界大会に参加

柏木景岳 2016年リオデジャネイロオリンピック

世界選手権大会（2014・2015・2017・2018・2019）

【式典】 平成21年2月21日 長野県レスリング協会40周年式典（小諸グランドキャッスルホテル）40周年記念誌同時発行

平成28年2月20日長野県レスリング協会50周年式典（小諸グランドキャッスルホテル）50周年記念誌同時発行

【記録】

全日本選手権優勝者 H12 グレコ97kg 森角裕介、H13 フリー58kg 平井進悟・グレコ97kg 森角裕介、H16 グレコ55kg 平井進悟・グレコ96kg 森角裕介、H29 フリー61kg 小柳和也

全日本選抜選手権優勝者 H12 グレコ69kg 大井将憲、H13 グレコ97kg 森角裕介、H18 グレコ55kg 平井進悟、H23 フリー74kg 高橋龍太、H30 フリー61kg 小柳和也

国民体育大会優勝者 F（フリースタイル）G（グレコローマンスタイル）

【成年】 H11 熊本国体 G69kg 大井将憲、H18 兵庫国体 F74kg 桜井浩二・兵庫国体 G66kg 村瀬洗介、H22 千葉国体 F55kg 富岡直希

【少年】 S 53 長野国体 F87kg 曾根哲郎、S 54 宮崎国体 F87kg 曾根哲郎、H 6 愛知国体 F63kg 石田亮一 G58kg 竹花良二 G68kg 大井将憲、H 7 福島国体 F54kg 平井進悟、

H 8 広島国体F50kg高橋利典G54kg平井進悟、H 9 大阪国体G88kg丸山真太郎、H12富山国体G97kg前島信彦、H15静岡国体F50kg富岡直希、H17岡山国体G50kg富岡達也G55kg重松賢G74kg矢口護、H27和歌山国体G96kg白鳥慶樹、H30福井国体G51kg佐々木風雅

全国高校総体優勝者（インターハイ）

H 6 富山総体F58kg竹花良二、H 8 山梨総体F46kg吉澤克洋・F50kg高橋利典、H16岡山総体F84kg小林敏雄、H27京都総体F96kg白鳥慶樹、R 1 熊本総体F51kg佐々木風雅

全国高校選抜大会優勝者（新潟市）

H 8 ・ F46kg吉澤克洋、H16 ・ F84kg小林敏雄

長野県ウエイトリフティング協会

<沿革>

長野県ウエイトリフティング協会は、昭和53年長野国体を契機に1966年（S41年）に設立され、約半世紀が過ぎた。これまでの関係者のご尽力により県内での競技の普及が進み、全国大会での活躍も増えてきた。これからは普及と強化にさらに拍車をかけ、来る2028年2巡目の長野国体に向け、さらに少年・成年・女子選手の強化を進め、天皇杯皇后杯の獲得に向け邁進していきたい。

また、少数精鋭の協会であるが、今後は審判等競技役員の育成にも注力し組織力の強化も図っていきたい。

<年次別概況>

1980年（S55年）～1988年（S63年）

成年は江波博司（松商学園・中京大）ベテラン市川秀俊（佐久消防署）・大輪嘉孝（松本市役所）を中心に、少年は松商学園高校が中心に強化が進められた。江波は奈良国体で5位、続く鳥取国体は6位と2年連続で入賞、さらに60年度全日本学生選手権大会で210kgを挙げ優勝し、ソウルオリンピックの有力候補選手にのし上がった。大輪も全日本社会人で3位入賞を果たした。

松商学園高校は、それまでは陸上部が兼任していたが、1985年（S60年）に正式にウエイトリフティング部として独立した。1984年（S59年）篠ノ井高校で陸上部顧問中沢次生先生の指導により投擲の和田直がインターハイへ出場し篠ノ井高校のウエイトリフティングの歴史がスタートした。1986年（S61年）には、山梨県で競技を学んだ土屋嘉裕先生が岡谷工業高校にクラブを作り、松商学園、篠ノ井、岡谷工業の3校が切磋琢磨するようになり、選手のレベルが向上した。

1989年（H元年）～1993年（H5年）

1989年（H元年）永田真樹（篠ノ井）清沢英彦（松商学園）が北信越大会で優勝した。全国高校選抜大会で清沢が6位、全国高校総体では、平成元年に永田が3位、平成3年に清沢が7位、国体では、清沢がS4位T7位入賞をした。永田、清沢はその後中央大学へ進学し活躍した。

このような先輩達に刺激され、その後内山正（篠ノ井）、伊藤賢一・深澤悟（松商学園）が北信越大会を優勝し、

松商学園は田中宏樹・籠田浩明・倉科勝啓などが入賞し、初めて北信越学校対抗で準優勝をした。

また、1992年（H4年）からは北信越大会に女子が参加するようになり、篠ノ井高校・松本松南高校の選手が参加した。

1994年（H6年）～1998年（H10年）

1994年北信越総体で岩井純徳（篠ノ井）が優勝し、塚田和弘・竹田哲章・寺沢哲也らも入賞し、学校対抗3位となった。国体記念杯では、河合咲子（篠ノ井）が3位入賞をした。この頃、女子選手の活躍が見られ、松澤美保子、宮澤瞳、大須賀樹里、山越美鈴（篠ノ井）が北信越総体で優勝している。

男子では、村田卓弥、久保田浩、丸山純和（松商学園）が国体で入賞している。滝沢健太（篠ノ井）も2年生の3月、膝の怪我により長期リハビリを強いられたが、国体で復活し7位入賞を果たした。

1999年（H11年）～2004年（H16年）

清沢英彦は全日本社会人で2度の3位と優勝を経験している。1999年日本人初のプロリフターとして、ドイツブンデスリーグで活躍しその後、自営でTraumSportを立ち上げ、ウエイトリフティングの競技用品の開発・販売などを手掛け、北京オリンピック、リオデジャネイロオリンピック、2020東京オリンピックでは公式用具として採用されている。

2001年には、古賀弘が世界マスターズで殿堂入りを果たした。同年、滝沢祥太（松商学園）が2年で北信越大会優勝、全国高校選抜大会3位、翌年北信越大会2連覇、全国高校総体6位、国体S6J3T4位と好成績を収めた。滝沢兄弟は中京大学へ進学し、成年でも国体で入賞し長野県に貢献した。

2005年（H17年）～2010年（H22年）

2005年岡谷工業高校で長年顧問を務めた田中寛人先生が転出、中沢先生が2006年長野西を定年退職され、松商学園が1校となった。

2006年から松商学園女子選手の活躍が目立った。特に松山洋香、手塚香奈は北信越選抜大会2連覇、北信越高校総体でも優勝、松山は、国体記念杯で入賞しアジアジュニア選手権大会に参加した。また、高校生で全日本選手権

6位入賞し、その後早稲田大学へ進学し、全日本女子選手権大会で3位、全日本学生選手権大会準優勝と活躍した。2011年（H23年）～2015年（H27年）（以降全て松商学園の選手）

2013年には、松商学園総合トレーニングセンターが設立され、練習環境が格段に良くなり、部員数が増加、また、合宿を頻繁に行い、県外から強豪校、強豪県が年間を通して合宿に訪れ、本県の競技力も向上した。

2014年には、河尻隆之介・小松幸佑が2年生で初めて国体入賞をし、小松は全国高校選抜大会で、長野県初の優勝という快挙を成し遂げた。また、河西勇介4位、河尻8位となった。翌年の全国高校総体では、小松が準優勝、河尻6位、河西7位と3名同時入賞し、学校対抗で5位入賞をした。国体でも3名同時入賞を果たした。

2016年（平成28年）～現在

2015年協会設立50周年記念式典を多くの参加者のもと盛大に開催され、前年の高校生の活躍も式典に華を添える形となった。

2017年全国高校選抜大会で太田至が6位入賞、全国高



校総体では、原圭史郎が7位入賞、国体では、原がS6J6T7位、太田がS7位入賞を果たした。2018年国体では、安保充樹J8位、稗田琉玖S8位、河尻隆之介（法政大学）J8位と3名入賞を果たした。

2019年全国高校女子選手権大会を松本市総合体育館で開催し、松商学園から5名が出場し、長野県開催を盛り上げた。大会運営も一丸となって臨み、200名を超える選手を迎える中無事大会を終えることができた。当協会にとって全国大会を運営できたことは大きな財産となった。また、全国高校総体で、稗田琉玖7位入賞、国体では、稗田琉玖S5J8T7位、横山幸次郎S4J7T4位、良波快陸S7位と少年3名が入賞をした。

2020年は新型コロナウイルス感染症により、各種大会が中止となる中、高校総体の代替大会TraumCUPを開催し、高校生の舞台を協会一丸となって盛り上げた。

2021年全国高校選抜に女子選手5名、男子選手2名の選手が出場、出場選手数は全国2番目であり、今溝龍生4位、竹内悠姫3位となった。全国高校総体へ出場すると、松商学園は40年連続41回目の出場を果たす事となる。

審判活動においては、牛山成剛が国際審判となり、2016年リオデジャネイロオリンピックや各種国際大会へ派遣され活躍の場を広げている、東京オリンピックでも審判としての活躍が期待される。

歴代会長

初代 吉田末男（昭和41年～）、2代 村上裕史（平成3年～）、3代 榊原進哉（平成22年～）、4代 飯島久雄（平成28年～）、5代 牛山成剛（令和2年～）

長野県ハンドボール協会

1 平成の時代に入り

この30年間、「競技力向上」と「普及」を中心に取り組みをしてきている。競技力は長野教員（男子）が、1988年（昭63）全日本教職員大会において準優勝、同年の全日本総合選手権大会初出場を果たした。国体に関しては、長野教員を中心とした成年男子が1987年（昭62）沖縄国体でベスト16、1989年（平成元）北海道国体ベスト8（二部）、1991年（平3）石川国体ベスト16という戦績を残したが、その後本国体出場は1993年（平5）東四国国体の成年男子二部、2012年（平24）岐阜国体の成年女子（後述）のみとなっている。

2 競技力向上に向けて

県全体の競技力の向上に向け長期計画を立案し、ジュニア層（中学）からの強化をスタートさせた。1999年（平11）の全国中学校総合体育大会ハンドボール競技（以下

全中）の開催に向け、運営と競技力の向上を両輪と位置づけ、全国のトップ指導者や日本中体連の皆様にご協力をいただき、男子屋代中学校（監督：鳥谷越洋）、女子茅野東部中学校（監督：宮澤好一）ともにベスト8という成果を示した。高校生においても翌2001年（平13）度、屋代高校男子が初めて北信越選抜予選を勝ち抜き、全国高等学校ハンドボール選抜大会への出場を果たし、2004年（平16）度には屋代高校男子（監督：佐藤純也）が、北信越予選において、本県の最高成績の2位となり、同大会へ出場した。

中学生のJOCジュニアオリンピックカップ（以下JOC）強化では、中沢徹（故人）・清水健太郎（故人）・宮澤好一・行田潤らの中学の指導者と協会が連携し長期的な計画で競技力の向上を図ってきた。2000年（平12）には、男子（監督：中沢徹）が北信越ブロックで優勝し、全国大会出場を果たした。

普及と県全体の競技力向上を目的に、県協会オリジナルの「NTS長野」を2004年（平16）より現在まで継続している。「NTS長野」は底辺拡大の役割を果たすとともに、茅野東部中女子（監督：行田潤）が2008年（平20）度の「春の全国中学生ハンドボール大会」ベスト8の成果をみせた。この「JOC・NTS世代」から橋本寛子（東京女子体育大～シャトレゼ～三重バイオレットアイリス）が日本代表に、また高野一樹（北陸高校：U-19日本代表）、村山絵理奈（早稲田大～広島メイプルレッズ）、朝倉由貴（東海大：U19日本代表）など多くの選手がトップチームでプレーしてきた。

現在の成年男女県代表の大半が「JOC・NTS長野」を経験しており、北信越ブロックにおいて本国体出場を争えるレベルに達し、成果として現れたのが、2012年（平24）岐阜清流国体である。成年女子（キャプテン：清水浩子、太田彩・小林美早紀・多田仁美・重信あかね・朝倉由貴・濱恵利香・田中雪葉他）が初めて北信越国体を勝ち抜いて出場し、36年ぶりの勝利を挙げた。メンバー12人の内、10人が「JOC・NTS世代」である。

また、「JOC・NTS世代」の選手が関東・東海や関西の学生リーグで活躍するようになり、須坂啓佑（中部大～北陸電力）、多田仁美（日本体育大～三重バイオレット）、牛山悠衣（国土館大～アランマーレ2019引退）は、日本ハンドボールリーグ（以下日本リーグ）で活躍している。須坂は2013年（平25）に第1回U-22東アジア選手権の日本代表に選ばれ、その後日本リーグ北陸電力でキャプテンを務めている。多田は2019年女子世界選手権日本代表として活躍し、「2020東京オリンピック」日本代表候補として、日本を代表する選手となっている。また、笠井千香子（大阪体育大学～ソニー）は2018年（平30）クロアチアで行われた世界学生選手権大会の日本初優勝のメンバーであり、インカレ4連覇にも貢献した。

ジュニアに目を転じると、日本ハンドボール協会が主催するNTS（ナショナル チームまでの一貫指導強化システム）セントラートレーニングに県内選手も数多く推薦され、その中より、2019年（令2）U-16のメンバーに緑川智也（戸倉上山田中～北陸高校）、六川歩美（屋代高校附属中学校～屋代高校）が選出され、今後の活躍が期待されている。

3 普及面での活動

身近でトッププレーを観て、ハンドボールの魅力を味わってもらおうと2007年（平19）より日本リーグの開催を実施している。毎回700人超の観客動員があり、一般の方々にもハンドボールの魅力に触れてもらう機会となっている。また、本協会の最大事業の1つである「長野県総合選手権大会」は2011年（平23）で第50回の記念大会を迎え、男女あわせ50チームを超える出場があり、県内や県出身者の愛好者の交流の場ともなっている。

高校生への普及とみると、全国的に生徒数の減少、価値観の多様化による運動部活動離れが進むなか、ここ10年間登録チーム数は、同等数を維持している（北信越ブロックの



2012年岐阜清流国体成年女子

最多チーム登録数）。ひとえにハンドボールの魅力を伝え、情熱をもち指導してこられた先生方のご尽力、それをバックアップしている協会の取り組みが実を結んでいる結果である。

4 指導者の育成

指導者育成に目を向けると、この10年間で高体連・中体連を中心に指導者が増加しており、協会として上級指導者資格取得の支援を積極的に行っている。その中、日本協会NTS指導者として山本臣也（U16担当）、朝倉由貴（U13担当）が選出され、上級指導者の育成の成果と言える。協会として指導者育成の環境作りに、今後も尽力していきたい。一方、小学生年代への普及・強化も教育現場からも取り組んでいる。日本ハンドボール協会主催で、2010年（平22）に小岩井浩明が第13回ハンドボール研究集会（佐久市立中佐都小学校）、翌2011年に山崎由美が第14回ハンドボール研究集会（千曲市立埴生小学校）での実践発表を行い、全国から小学校教員を中心に多くの教育関係者に参加いただき、ハンドボールの教材化や指導体系の構築を目指した授業提供、文部科学省教科調査官による講演、日本協会からの派遣講師による実技指導が行われた。

近年の取り組みとして、2021年（令3）3月、長野県教育委員会より依頼を受け、千曲市教育委員会主催で信州チャレンジスポーツDAY2020 地域イベント「ハンドボール体験教室」を企画した。地域分散型、地域のスポーツ団体が協力するイベントのモデル事業としての先駆けとなる取り組みとなった。

5 審判員の育成

強化と審判は、自動車の車輪と例えられている。理事長・会長を歴任した加藤雅之（故人）が日本ハンドボール協会審判審査員長として、全国だけでなく県内の審判員育成に尽力し、その成果として1999年（平11）の全国中学校総合体育大会ハンドボール選手権の女子決勝を塩川亮広・服部博幸の長野県ペアが担当し、地元開催の大会を締めくくった。その後、服部が県審判長任期中に2013年（平25）土橋邦彦・清水啓佑ペアが日本リーグ新人賞を受賞し、全日本総合選手権大会をはじめ、中学校・高校の全国大会決勝を担当し、トップレフェリーとして

活躍した。さらに、清水が審判長を引き継ぎ、2016年（平28）の全国小学生大会決勝を担当する上原一人・高村一を育成し、また、高橋ひかりが県女性審判員として初めて2019年（令2）より日本リーグの試合を担当するなど、後進育成の努力を続けている。

6 表彰者

長野県ハンドボール協会へ2000年（平12）文部省より社会体育優良団体表彰

柳沢民弥氏（故人）が2007年（平19）に旭日双光章を受章

青木崇氏が2016年（平28）に旭日双光章を受章

7 長野県ハンドボール協会の沿革

会長

平元4.1～平11.3.31	井出 正一
平11.4.1～平15.3.31	柳沢 民弥
平15.4.1～平21.3.31	加藤 雅之
平21.4.1～平29.3.31	青木 崇
平29.4.1～現在	竹内 佳明

理事長

昭60.4.1～平3.3.31	加藤 雅之
平3.4.1～平7.3.31	青木 崇
平7.4.1～平15.3.31	岩下 道範
平15.4.1～平25.3.31	竹内 佳明
平25.4.1～現在	行田 潤

長野県自転車競技連盟

長野県自転車競技連盟は、昭和25年10月に現在の傘下団体『松本自転車競技連盟』を発展させ、県内組織の競技団体として発足しました。当時は、松本市宮田に1周400mの競輪場が造成されおり、多くの人々が競輪選手へ志望していきました。

昭和53年の長野国体が決定すると、昭和51年に県営として『松本自転車競技場』（周長333.33m）が松本市美須々に新設され、同年には全国高等学校体育大会、昭和52年には都道府県対抗自転車競技大会が開催される等、全国規模の大会が多く開催されました。

昭和62年には、松本市美須々一帯の体育施設に県文化施設の建設候補地になったことから、松本市が単独事業として松本市惣社に『松本市かりがね自転車競技場』（周長333.33m）が建設され、中野浩一をはじめ多くの競輪選手がお披露目に参加しました。



閉場前の松本市かりがね自転車競技場（平成25年9月撮影）

この競技場は、日本有数の『高速バンク』として、平成17年公益財団法人日本自転車競技連盟主催の『全日本自転車競技選手権トラックレース』をはじめ、一般社団法人

全日本実業団自転車競技連盟主催の『全日本実業団自転車競技選手権大会トラックレース』、日本学生自転車競技連盟主催の『全日本大学対抗自転車競技選手権大会トラックレース』等各種大会が開催され、日本新記録・大会新記録を更新する『トラックレース』のメッカとなりました。

平成14年頃からは上水内郡小川村をはじめ、県内各地で一般社団法人全日本実業団自転車競技連盟が主催するロードレースが開催され、全国各地のロードレースファンが自慢の脚力を競い合いました。その中でも、経済産業大臣旗をかけた全日本実業団自転車競技選手権大会ロードレースは大いに盛り上がりました。現在では、飯山市長峰スポーツ公園周回のクリテリウムレースや木曾郡木祖村味噌川ダム湖周回のロードレース、大町市美麻地区周回のロードレース等で日本学生自転車競技連盟主催のレースが開催されています。



大町市美麻地区で開催のロードレース

平成27年には、『松本市かりがね自転車競技場』の老朽化と松本山雅FCの練習場確保もあり、スケートの聖

地であった松本市三才山の旧浅間国際スケートセンターの地に、日本一標高の高い場所にある自転車競技場『天空のバンク・松本市美鈴湖自転車競技場』(周長333.33m)が移転建設されました。

スケート場も高速リンクとして有名であったこともあり、開場早々に開催された全日本学生選手権トラックレースでは、数々の大学新記録・大会新記録が生まれ、その後は、JOCジュニアオリンピックカップ自転車トラックをはじめ、2019年には寛仁親王記念ワールドグランプリ国際自転車競技大会を開催し、来賓として彬子殿下がおおいでになりました。



移転した松本市美鈴湖自転車競技場

日本サイクルスポーツセンターにあるベロドローム(室内競技場：周長250m)に匹敵する好記録が生まれる競技場として、当連盟がゴールデンウィーク中に開催している『松本サイクルトラックレース』では、毎回150名を超える選手が全国各地から来場される様な大会に成長してきております。



開催中の松本サイクルトラックレース

又、本年は東京2020パラリンピック参加のフランスチームが事前合宿を松本市美鈴湖自転車競技場と松本市四賀地区で行い、トラック競技で金2個・銀1個・銅3個、ロー



パラリンピックフランスチームの練習風景

ド競技で金3個・銀3個・銅6個を獲得致しました。

そんな大会を誘致することで、自転車競技に興味を持った方々が、実際に競技を始める良い機会になっていることもあって、昭和63年以降の国民体育大会(以下国体)では優勝5回、準優勝5回、3位7回を含め37回入賞を実現しています。

しかし、近年ではスポーツ志向の変化や自転車競技がマイナー競技であることもあり、競技人口が横ばい(県内競技登録者が約200人)で推移しており、選手層の年齢が上がって来ています。又一時期では高校生の選手が殆どいない状況もあり、入賞も数年間遠ざかっていたため、昨年からは2028年国スポの長野県開催も視野に男女問わず小学生から自転車競技場に親しんで貰える機会(自転車教室やベロクラブ設立)を増やす試みを開始し、将来の国体(国スポ)の選手育成にも力を注ぎ始めたところです。これを継続的に実施して競技人口を増やしていきたいと考えております。



自転車教室に参加する子供たち

長野県ソフトテニス連盟

沿革

昭和61年、前年急逝された塩島会長の後を受けて村井仁代議士が新会長に就任。全日本社会人で菅田・曲淵組(長野庭協)は3位、第41回国体でも成年女子が久しぶりのベスト8となる。

昭和62年はおよそ10年前に第一線から退かれた丸山まき美先生のご芳志などにより一般女子振興策の一環として、第1回長野県高等学校OG大会を開催し長期的視野で振興に力を入れる。第42回国体で成年女子が3位入賞。

昭和63年は木島平村軟式庭球協会の加入承認により加

盟支部数が31支部となり組織の一層の強化のため四地区連絡協議会を結成発足。全国中学校大会で林・依田組（塩田）が3位入賞、町田・塚原組（塩尻西部）が5位入賞。また全日本レディース大会で長野県チームが準優勝、第43回国体成年2部が3位入賞。平成となり2年に全国的傾向としてミックス大会が開催されるようになり、本県でも諏訪庭協主催の諏訪湖ミックス大会を県連盟大会とすることを承認。

また高齢化社会の進行に伴い壮年男子の選手数も増加、クラブ・実業団対抗リーグ戦大会の壮年男子を1部、2部の2種別とし参加選手の促進を図る。全日本社会人壮年男子3部で林・麻和組（長野・塩尻）が3位、第45回国体で成年2部が2位入賞。平成3年は朝日村軟式庭球協会の加入承認、加盟支部が32支部となる。全国中学校大会で塩田中が団体女子1位、上沢・田中組（塩田）が2位。

平成4年には、日庭連は世界軟式庭球選手権大会が国際的規模の大会となってきたことにより、さらに国際化を進め近い将来にオリンピック競技種目にとの思いから軟式庭球の名称を「ソフトテニス」と改め、この決定により昭和22年より発足した長野県軟式庭球連盟も平成5年より「長野県ソフトテニス連盟」とすることを決定。都道府県対抗全日本中学生大会個人男子で弓田・仲平組（高森）が1位、全国中学校大会個人男子でも1位。また全日本小学生大会個人男子で藤原・来野組（穂高西小）が3位となりジュニアの活躍が目立つ。

平成5年は上庭球クラブの会長として尽力されてきた若林正五県連副会長が逝去。明科町ソフトテニス協会が加入承認され33支部となる。第48回国体で成年2部が4位入賞。平成6年は塩田中学女子が全国中学校大会団体女子で1位。平成7年は県連盟理事長、総務委員長、副会長などの要職を歴任された小林和夫県連副会長（長野市）が逝去。都道府県対抗全日本中学生大会団体女子で塩田中単独の長野県チームが優勝し全国中学校大会団体女子でも塩田中は2連覇という偉業を成し遂げる。また個人女子でも成沢・松沢組が2位、竹内・望月組が3位となり塩田中の活躍が際立つ。

平成8年は都道府県対抗全日本中学生大会団体男子で1位。第51回国体で少年男子がベスト8となる。平成9年は全国的傾向として「壮年」を「シニア」と改め大会を行う。また昭和57年、60年に「法人化」を検討し課題となっていたが当面見送ることとなった。第52回国体少年女子で上田西単独チームが3位と健闘。平成10年は松田謙治理事長が文部大臣スポーツ功労賞を受賞。ハイスクールジャパンカップ個人女子で成沢・竹内組が2位、全国高校総体で団体女子1位、第53回国体で上田西女子単独チームが1位となり上田西高が素晴らしい結果を残す。

平成11年は小学校団体を小学校体育連盟支部として承認。34支部となる。また長野県ソフトテニス連盟史の発刊を承認。全日本高等学校選抜インドアで上田西が1位。



第42回北信越国体（長野県）

ハイスクールジャパンカップ個人女子で松田・関組（上田西）が2位。全国高校総体団体女子で上田西が2位、個人女子で若林・寺本組（上田西）が3位、第54回国体少年女子で上田西単独チームが2位と上田西高が活躍。全日本シニア選手権シニア女子70で深沢・太田組（松本）が見事1位。

平成12年は、ハイスクールジャパンカップ個人女子で、寺崎・山本組（上田西）が1位。全国高校総体団体女子で上田西がベスト8。全日本シニア選手権シニア女子70で深沢・太田組（松本）が2連覇と素晴らしい結果を残す。平成13年は全日本シニア選手権シニア女子70で堀・清水組（長野）が3位。

平成14年は全日本シニア選手権シニア女子75で深沢・太田組（松本）が1位。第57回国体で成年男子が6位入賞。平成15年より長年ご尽力いただいた松田理事長（松本）が副会長となり宮澤新理事長（岡谷）の新体制となる。全日本シニア選手権シニア女子75で深沢・太田組（松本）が1位と2連覇。平成16年は前年の市町合併により戸上支部と更埴支部を併せて千曲支部となり33支部となり、東部支部が東御支部となる。全日本シニア選手権シニア女子75で深沢・太田組（松本）が1位と見事3連覇。平成17年は、全日本シニア選手権シニア女子75で深沢・太田組（松本）が1位。第60回国体で少年男子が7位入賞。平成18年は前年の市町村合併にともない豊科・穂高・三郷・明科支部が合併し安曇野支部となり30支部となる。中学選手権大会が中体連主催となる。日本ソフトテニス連盟の競技者育成プログラムを県でも推進委員会を設置し進める。全日本シニア選手権シニア女子75で深沢・太田組（松本）、シニア男子75で大川・小口組（千葉・岡谷）がそれぞれ1位。全国小学生大会4年生以下で吉沢・山口組（長野）が1位。平成19年より堀内理事長（松本）が就任。競技者育成プログラム委員会を立ち上げ、育成プログラムをこの年より推進。平成20年は全日本クラブ選手権で飯田市ソフトテニス協会Aチームが2位、全国市町村職員大会で松本市役所が3位となる。平成21年は全国市町村職員大会で松本市役所が2位。平成23年は県連盟が一丸となって天皇賜杯・皇后賜杯全日本選手権を松本で無事開催。全日本シニア選手権シニア女子45で皆瀬・宮寺組（上田・埼玉）が2位。平成25年より吉田博

美参議院議員が会長となる。平成26年は全日本シニア選手権シニア女子45で太田・池上組（飯田・伊那）が3位。平成27年は太田・池上組（飯田・伊那）が全日本シニア選手権シニア女子45で2位、全日本レディース大会ばらブロックで1位。平成29年は原雅幸理事長の新体制がスタート。富士見・小布施・木島平支部がなくなり新たにみのわソフトテニス協会が加入承認され28支部となる。全日本クラブ選手権の男子の部でHIN-HIN（御代田）が1位、全日本シニア選手権混合50で片桐・依田組（佐久・長野）が3位。平成30年は長野国体に向けて準備・運営・強化を目的として準備委員会を設立。全日本シニア選手権混合50で片桐・依田組（佐久・長野）が1位シニア女子45で太田・芦部組（飯田）が2位。令和元年は吉田博美連盟会長が逝去。全日本シニア選手権ミックス50で太田・堀越組（飯田・東京）が2位、全国高等専門学校体育大会男子個人で赤羽・宮嶋組（長野高専）が1位。令和2年は新型コロナウイルスにより全国大会ははじめ多くの大会が中止となる中どうしても県選手権だけは

開きたいという理事長の思いを汲み延期をして万全なコロナ対策を行い開催する運びとなる。また国スポに向け戦略チームが発足される。

課題と展望

令和10年に延期となった長野県開催の国民スポーツ大会に向け平成30年に準備委員会が立上げられ開催準備に入ってきているが最近の国スポの結果が出されない現状を打破するため計画的な強化を行い結果につなげていきたい。またソフトテニス人口が多い中学から高校、社会人とソフトテニス人口が極端に減少してしまっている。生涯スポーツとしてとなり得るソフトテニスという種目の特性を生かし各地区で門戸を広く経験者を集め活動できるような体制作りを行う必要がある。そして昭和57年に法人化に向けて検討委員会を立上げ動き出したのだが、その後同意を得られず一度は立ち消えとなっていたが連盟の公益性を求められる昨今、再度法人化を進めていく事が必要であると考え。

長野県卓球連盟

1 連盟の設立

「長野懸卓球聯盟」は、大正15年（1926年）11月1日に、長野市懸町の懸農會内に設立された。

初代会長は柏原厚平氏、初代理事長は宮崎吉則氏であった。（長野県卓球連盟創立70周年記念誌より）

2 公益財団法人日本卓球協会への加盟

昭和6年（1931年）7月12日「日本卓球会」誕生と同時に加盟した。（財団法人日本卓球協会創立八十周年記念誌より）

3 中国との国際交流

日中国交正常化を記念して、中国卓球代表団が示した「友好第一、試合第二」の精神により、昭和47年（1972年）11月13日に長野県営体育館（松本市）において「日中交歓卓球大会長野県大会」が開催された。

中国選手団は莊則棟団長（1961・1963・1965年世界チャンピオン）以下28名、日本側は野本登（長野県卓球連盟副会長）以下23名で行われた。

試合は、21本、3ゲームスマッチによる9シングルスによる団体戦を4試合行った。

男子（第一団体）日本 5－4 中国

（第二団体）日本 2－7 中国

女子（第一団体）日本 6－3 中国

（第二団体）日本 5－4 中国

（長野県卓球連盟創立70周年記念誌より）

日中国交正常化10周年を記念して、昭和57年（1982年）

9月25日に中国友好都市卓球代表団が来県し、友好試合を行った。

以降、平成10年（1998年）9月、平成15年（2003年）11月、平成20年（2008年）10月、平成30年（2018年）8月と日中友好都市中国卓球選手団が来県し、友好試合を行った。

平成2年（1990年）11月26日～12月3日まで北京市で行われた、「日中友好卓球カーニバル」に長野県選手団が参加した。

以降、平成4年（1992年）11月、平成9年（1997年）8月、平成14年（2002年）8月、平成19年（2007年）7月、平成24年（2012年）8月、平成29年（2017年）8月と、日中友好都市長野県選手団を、北京市に派遣した。（長野県日中友好の歩みIVより）

4 全日本クラブ卓球選手権大会

第1回の大会を、昭和57年（1982年）戸倉町総合体育館で開催したのを皮切りに、昭和61年（1986年）まで5年連続、そして、平成2年（1990年）、平成3年（1991年）、平成10年（1998年）～平成13年（2001年）と、計11回を長野県内で開催した。

特に、平成10年～13年の大会は、長野市のオリンピック記念アリーナ「エムウェーブ」において、卓球台約80台、約2,000人を超える選手により開催された。（財団法人日本卓球協会創立八十周年記念誌より）

5 IOC会長杯第2回国際卓球大会

平成3年(1991年)8月31日～9月2日まで、新装の松本市総合体育館において、10ヶ国の世界トップ選手男女各8名による個人戦が行われた。

昭和63年(1988年)のソウルオリンピックから卓球が、オリンピック種目に採用されたのを契機に、平成元年(1989年)に第1回大会が、ソウルで開催された。

荻村伊智朗・国際卓球連盟(ITTF)会長(当時)が開催に尽力をつくり、IOCサマランチ会長(当時)が臨席のもと、開催された。

(財団法人日本卓球協会創立八十周年記念誌および長野県卓球連盟創立70周年記念誌より)



平成27年(2015年)4月11日に長野県卓球連盟定期理事会において、瀧澤いくみ氏デザインによる。連盟旗が披露された。

6 榑川荻村杯卓球大会

平成7年(1995年)11月23日に、榑川村(現在の塩尻市)にある「榑川インターナショナル テーブルテニストレーニングセンター」において、第1回大会が開催された。

荻村伊智朗ITTF会長が、生前「榑川トレーニングセンター」を利用して何か企画してほしいという話があり、実現できない内に亡くされました。

長野県卓球連盟は彼の功績を讃え、その遺志を実現するために、彼の名を冠とした大会を開催した。

卓球の普及と健康を増進するためのラージボール卓球と、競技力の向上を目指した小学生(ホープス・カブ・バンビの部)の競技会を、現在まで開催している。

特に、2020東京オリンピック代表選手の、伊藤美誠選手・平野美宇選手は、小学生時代に出場し優勝を飾っている。

令和2年(2020年)は、新型コロナウイルス感染症対策のため、開催以来初めて、中止になった。(長野県卓球連盟創立70周年記念誌より)

7 映画『温泉卓球』

山川元監督、松坂慶子主演の映画『温泉卓球』は、上田市別所温泉を中心にロケが行われた。上小・佐久地方の高校・中学の卓球部員、協会会員や上田市民など、約300人以上がエキストラとしてロケに協力した。

平成10年(1998年)5月16日から全国東宝系で上映された。(長野県卓球連盟創立70周年記念誌より)

8 記念誌の発行

昭和63年(1988年)2月に「長野県卓球連盟60年史」を発行した。

平成12年(2000年)4月に「創立70周年記念誌『長野県卓球20世紀』」を発行した。

9 ホームページの開設

平成21年(2009年)長野県卓球連盟のホームページを開設した。平成29年(2017年)5月にリニューアルした。

10 連盟旗作成

11 加盟団体

支部名	会長	理事長
長野市卓球協会	峯村 威男	小林 健一
松本卓球連盟	齋藤 豊美	小松 浩
上小卓球協会	塩川 正樹	召田 祐治
岡谷卓球連盟	松浦 盛明	山田 和男
飯伊卓球連盟	小椋 吉範	竹村 信之
諏訪市卓球協会	塩原 晴彦	牛山 正
須坂市卓球協会	市村 忠彦	石月 英夫
小諸市体育協会卓球部	田中 常夫	三井 利幸
上伊那卓球連盟	阿部 凱人	下平 諭
高社卓球連盟	田中 昭	森山 直明
大北卓球連盟	百瀬 清	平林 俊彦
茅野市卓球協会	横内 秀光	原 吉彦
塩尻卓球連盟	上平 昇	百瀬 章広
佐久市卓球協会	柳沢 光男	大工原真一
木曾郡体育協会卓球部	渡辺 孝	横山 久男
安曇野卓球連盟	小野 樹佳	古川 節雄
千曲坂城卓球連盟	嘉生 正司	小林 英樹
南佐久郡卓球連盟	黒澤 信夫	友野 宣夫
東御市卓球連盟	西貝 茂夫	花岡 高
長野県高等学校体育連盟卓球専門部	高嶋 邦夫	井出 史憲
長野県教職員卓球連盟	齋藤 豊美	倉田 慎司
長野県中学校体育連盟卓球専門部	小林 真	小松原 拓
長野県レディース卓球連盟	増澤 広子	-
長野県学生卓球連盟	五十嵐健二	百瀬 雄哉

12 歴代会長

柏原 厚平	大正15年(1926年)11月～(不明)
伊藤 淑太	昭和21年(1946年)3月～昭和22年2月
増沢 武	昭和22年(1947年)3月～昭和24年3月
三沢卓三郎	昭和24年(1949年)4月～昭和32年4月
山田 正彦	昭和32年(1957年)5月～昭和35年2月
牛山治三郎	昭和35年(1960年)3月～昭和37年2月
原 茂	昭和37年(1962年)3月～昭和63年3月
宮澤 宏昌	昭和63年(1988年)4月～平成4年1月
岩崎 忠三	平成4年(1992年)2月～平成10年3月
石田治一郎	平成10年(1998年)4月～平成26年10月
峯村 威男	平成26年(2014年)11月～平成28年3月
小松 裕	平成28年(2016年)4月～令和2年3月
今井 竜五	令和2年(2020年)4月～

13 歴代理事長

宮崎 吉則	大正15年（1926年）6月～昭和9年
尾崎 盛信	（不明）
前田 亀次	昭和9年（1934年）3月～昭和18年
前田 亀次	昭和21年（1946年）3月～昭和24年3月
田島 一良	昭和24年（1949年）3月～昭和37年2月
矢島 修造	昭和37年（1962年）3月～昭和40年2月
村田 良造	昭和40年（1965年）3月～昭和51年2月
野本 道夫	昭和52年（1977年）3月～平成4年1月
峯村 威男	平成4年（1992年）2月～平成14年3月
鈴木 精一	平成14年（2002年）2月～平成16年3月
小泉 隆信	平成16年（2004年）4月～平成18年3月
大沢 正行	平成18年（2006年）4月～平成22年3月
武井富美男	平成22年（2010年）4月～平成30年3月
小原 秀元	平成30年（2018年）4月～

14 登録人数の推移

単位：人

和暦	西暦	社会人 (教職員)	大学生	高校生	中学生	小学生	役員 (役員)	計
昭和54年	1979	1,703	11	188	102			2,004
昭和55年	1980	1,876	28	1,696	27			3,627
昭和60年	1985	2,012		797		210		3,019
平成2年	1990	1,600		2,069	1,019	141		4,829
平成7年	1995	1,341	47	1,783	1,951	198		5,320
平成12年	2000	1,560	48	1,440	3,582	266		6,896
平成17年	2005	1,532	81	1,739	3,975	253		7,580
平成22年	2010	1,599	72	1,647	3,875	277		7,470
平成27年	2015	1,414	100	1,491	3,937	257	404	7,603
令和2年	2020	1,128	81	1,221	3,147	275	342	6,194

15 審判員・コーチ人数の推移

単位：人

和暦	西暦	公認審判員	上級公認審判員	公認レフェリー	国際審判員	コーチ3	コーチ4
		(3級審判員)	(2級審判員)	(1級審判員)		(公認コーチ)	(上級公認コーチ)
平成22年	2010	265	32	19	5	7	1
平成27年	2015	377	31	16	3	19	3
令和2年	2020	378	39	17	3	28	2

長野県軟式野球連盟

長野県軟式野球連盟は、昭和21年9月に長野県体育協会（現長野県スポーツ協会）に加盟し、同じく75周年を迎える事になりました。

常に体育、スポーツの発展の為活動を続けて参りました。

前回昭和63年に「長野県体育協会史」を発刊されており、今回は63年以降について、我々長野県軟式野球連盟のあゆみについて記述を致します。

長野県スポーツ協会にとっての基本方針は、スポーツに対する意欲の高揚とスポーツ活動の普及・振興に好ましい影響をもたらすと共に、明るく活力ある社会の形成に寄与するものであり、生涯スポーツの振興を図る上で大きな影響を及ぼすものであります。

少子化、競技の多様化、分散化、野球離れとの影響等により競技人口が年々減少しておりチームの存続が危ぶまれている現状です。

対策とし、当時の県体育協会が音頭をとり長野県青少年野球協議会を発足させましたが、今後は、令和4年4月に設立予定の県内野球団体を統括する長野県野球協会へと引き継がれます。

小学生・中学生・高校生・大学生・一般・生涯野球・女子野球等の競技力向上、指導者の資質向上、審判技術向上、医科学サポート等各野球団体との緊密な連携を図り運営の円滑化や相互理解をすすめていくうえで、今後野球協会が重要な役割を果たすものと思います。

競技力向上は、長野県スポーツ協会の最重要課題である事から、一層の創意・工夫と努力を重ね盤石の強化体制を確立し、広く県民の期待に応える競技者の発掘・育成、そして国民体育大会等において成果を上げるものと考えます。

- ・国民体育大会の位置づけを徹底し、選手強化の一層の充実を図るとともに、（獲得得点・順位）を設定し、その目標を達成するための強化計画に基づき、トップレベルの選手を厳選し、徹底した強化を図る。
- ・指導者と審判員の高齢化を打破すべき、指導者養成と審判養成事業の強化を図る。

2028年、長野県開催の第82回国民スポーツ大会に向け、万全な体制で臨みたい。

《国民体育大会軟式野球競技成績》

国体2巡目となり国体改革で「少年の部」の種別が無くなり、代わりに「成年2部一般」の種別が追加され「成年1部一般」・「成年2部一般」の2種別となり全国大会は、16枠となる。

昭和63年京都国体

成年1部一般	佐久総合病院	2回戦敗退
成年2部一般	信英通信工業	1回戦敗退

国体改革により「成年1部壮年」の種別が追加3種別となり、「成年1部一般・成年2部一般」16枠「成年1部壮年」12枠

平成元年北海道国体

成年1部一般	佐久総合病院	ブロック敗退
成年1部壮年	全諏訪	4位入賞
成年2部一般	エプソン諏訪	2回戦敗退

平成2年福岡国体

成年1部一般	エプソン諏訪	ブロック敗退
成年1部壮年	坂城町体協	ブロック敗退
成年2部一般	エプソン松本	ブロック敗退

平成3年石川国体

成年1部一般	ルビコン(株)	8位入賞
成年1部壮年	全諏訪	2位入賞
成年2部一般	岡谷市役所	7位入賞

平成4年山形国体

成年1部一般	ルビコン(株)	1回戦敗退
成年1部壮年	全駒ヶ根	1位入賞
成年2部一般	セイコーエプソン松本	1回戦敗退

平成5年徳島・香川国体

成年1部一般	佐久総合病院	1回戦敗退
成年1部壮年	全長野	ブロック敗退
成年2部一般	セイコーエプソン塩尻	ブロック敗退

平成6年愛知国体

成年1部一般	佐久総合病院	5位入賞
成年1部壮年	全長野	ブロック敗退
成年2部一般	帝国通信赤穂工場	ブロック敗退

平成7年福島国体

成年1部一般	ルビコン(株)	ブロック敗退
成年1部壮年	東信クラブ	ブロック敗退
成年2部一般	帝国通信赤穂工場	ブロック敗退

平成8年広島国体

成年1部一般	ルビコン	4位入賞
成年1部壮年	オール長野	ブロック敗退
成年2部一般	小諸厚生病院	5位入賞

平成9年大阪国体

成年1部一般	セイコーエプソン松本	1回戦敗退
成年1部壮年	東信クラブ	ブロック敗退
成年2部一般	隼クラブ	8位入賞

平成10年神奈川国体

成年1部一般	セイコーエプソン松本	ブロック敗退
成年1部壮年	オール諏訪	8位入賞
成年2部一般	クリエート中央ホーム	1回戦敗退

国体改革により種別が「一般A」「一般B」「成年」に変更

平成11年熊本国体

一般A	岡谷市役所	1回戦敗退
成年	オール諏訪	ブロック敗退
一般B	北信総合病院	1回戦敗退

平成12年富山国体

一般A	ルビコン(株)	1回戦敗退
成年	オール松本	7位入賞
一般B	帝国通信赤穂工場	ブロック敗退

平成13年宮城国体

一般A	佐久総合病院	1回戦敗退
成年	オール長野	ブロック敗退
一般B	帝国通信赤穂工場	8位入賞

平成14年高知国体

一般A	セイコーエプソン松本	1回戦敗退
成年	オール諏訪	ブロック敗退
一般B	長野松代総合病院	7位入賞

平成15年静岡国体

一般A	セイコーエプソン松本	ブロック敗退
成年	オール長野	ブロック敗退
一般B	MBCカザ	ブロック敗退

平成16年埼玉国体

一般A	セイコーエプソン松本	ブロック敗退
成年	オール諏訪	7位入賞
一般B	MBCカザ	ブロック敗退

平成17年岡山国体

一般A	佐久総合病院	ブロック敗退
成年	オール諏訪	ブロック敗退
一般B	MBCカザ	ブロック敗退

平成18年兵庫国体

一般A	セイコーエプソン	ブロック敗退
成年	東信クラブ	ブロック敗退
一般B	佐久市役所	ブロック敗退

平成19年秋田国体

一般A	佐久総合病院	ブロック敗退
成年	中信選抜	ブロック敗退
一般B	佐久市役所	7位入賞

国体改革により「一般A」1種別 32枠

平成20年大分国体

一般A	佐久総合病院	ブロック敗退
-----	--------	--------

平成21年新潟国体

一般A	佐久総合病院	ブロック敗退
-----	--------	--------

平成22年千葉国体

一般A	セイコーエプソン	ブロック敗退
-----	----------	--------

※連盟対策として「一般A」が8年連続ブロック大会で敗れており、このような結果を重く受け止め、国体県大会を「国民体育大会選手選考大会」に改め8チームから選手選考をし「チームながの」を結成することとする。

平成23年山口国体 1回戦 神奈川県 0-3

平成24年岐阜国体 1回戦 山口県 0-2

平成25年東京国体 1回戦 東京都 1-2 (延長12回)

平成26年長崎国体 1回戦 栃木県 3-2

	2回戦	宮崎県	0 - 1
平成27年和歌山国体	1回戦	三重県	2 - 1
	2回戦	京都府	0 - 1 (延長22回)
平成28年岩手国体	ブロック敗退		
平成29年愛媛国体	ブロック敗退		
平成30年福井国体	1回戦	鹿児島県	2 - 4
令和元年茨城国体	1回戦	京都府	5 - 1
	2回戦	山口県	1 - 0
	3回戦	愛知県	1 - 2
	5～8位決定戦	東京都	5 - 1
	5・6位決定戦	大阪府	1 - 4

6位人賞

令和2年鹿児島国体 新型コロナウイルス感染症拡大防止の為に中止

令和3年三重国体 新型コロナウイルス感染症拡大防止の為に中止

《連盟主催各種全国大会主な成績》

平成3年第35回高松宮賜杯軟式野球大会 (第1部) 準優勝	セイコーエプソン塩尻
平成4年第36回高松宮賜杯軟式野球大会 (第2部) 優勝	キッセイ薬品工業(株)
平成5年第37回高松宮賜杯軟式野球大会 (第2部) 優勝	帝国通信赤穂工場
平成7年第39回高松宮賜杯軟式野球大会 (第1部) 優勝	厚生連北信総合病院
平成8年第40回高松宮賜杯軟式野球大会 (第1部) 優勝	隼クラブ
平成15年第47回高松宮賜杯軟式野球大会 (第1部) 優勝	MBCカザ
平成19年第51回高松宮賜杯軟式野球大会 (第1部) 準優勝	宮後工業(株)
平成26年第69回天皇賜杯軟式野球選手権大会 3位	厚生連佐久総合病院
平成26年第58回高松宮賜杯軟式野球大会 (第2部) 準優勝	チロリンズ

《連盟主催各種中央大会主な成績》

平成元年第11回東日本軟式野球大会 (第2部) 優勝	フジゲン(株)
平成3年第13回東日本軟式野球大会 (第1部) 優勝	長野県社会保険支払基金
平成8年第18回東日本軟式野球大会 (第2部) 優勝	いずみ荘クラブ
平成9年第19回東日本軟式野球大会 (第2部) 優勝	クリエート中央ホーム
平成10年第20回東日本軟式野球大会 (第1部) 準優勝	テルウエル信越
平成11年第21回東日本軟式野球大会 (第2部) 準優勝	白樺クラブ
平成13年第23回東日本軟式野球大会 (第1部) 優勝	帝国通信赤穂工場



茨城国体での競技風景

平成13年第23回東日本軟式野球大会 (第2部) 優勝	JA長野篠ノ井総合病院
平成17年第27回東日本軟式野球大会 (第1部) 優勝	佐久市役所
平成23年第33回東日本軟式野球大会 (第1部) 優勝	松本市役所
平成23年第33回東日本軟式野球大会 (第2部) 優勝	新光電気工業(株)
平成26年第36回東日本軟式野球大会 (第1部) 準優勝	飯山深雪クラブ
平成28年第38回東日本軟式野球大会 (第1部) 準優勝	MBC
平成28年第38回東日本軟式野球大会 (第2部) 準優勝	松田南信(株)
平成29年第39回東日本軟式野球大会 (第2部) 優勝	松本広域消防局
平成30年第41回東日本軟式野球大会 (第2部) 準優勝	赤羽アイシンクラブ

《長野県で開催された連盟主催全国大会》

・天皇賜杯第74回全日本軟式野球大会ENEOSトーナメント

令和元年9月13日～18日 6日間

全日本軟式野球連盟名誉総裁高円宮憲仁親王妃久子殿下のご臨席を賜り、松本市・塩尻市・岡谷市・諏訪市・茅野市・伊那市・駒ヶ根市・飯田市の8会場で開催される。

長野県をはじめ松本市・塩尻市・岡谷市・諏訪市・茅野市・伊那市・駒ヶ根市・飯田市の各市より補助金をいただき無事終了することが出来た。

長野県相撲連盟

○沿革

- ・昭和21年11月 第1回国民体育大会参加
- ・昭和22年2月 長野県相撲連盟創立
- ・歴代会長、理事長

会長	平沢 光久	昭和21年
	中野源三郎	昭和38年～40年
	小林 庄司	昭和40年～63年
	平野 茂	平成元年～5年
	石田治一郎	平成6年～26年10.11
	村上 淳	平成27年2.15～令和元
	水野 雅義	令和2年～現在
理事長	飯島 勝雄	昭和22年～35年
	小岩井昌彦	昭和36年～40年
	西沢 茂	昭和41年～48年
	成沢 文雄	昭和49年～59年
	竹花 繁典	昭和60年～平成4年
	植原 延夫	平成5年～18年
	横山 元佳	平成19年～20年
	町田 明彦	平成21年～令和元年
	安藤 均	令和2年～現在

・組織

現在、本県相撲連盟は、木曾、長野、松本、塩尻、東信、飯田、駒ヶ根、赤穂の8支部で組織し、木曾、大桑、長野、塩尻、松尾、駒ヶ根、佐久の7ジュニアクラブがあり、成人から小学生まで約280名の会員と約90団体の協賛会員（平成19年～）である。

○あゆみ

第1回国民体育大会に参加以来、第33回やまびこ国体でも団体入賞を果たすことができなかった。しかし、やまびこ国体を契機として、木曾相撲連盟が中心となり、相撲の普及及び青少年の育成と選手強化の取組を進め、その取組を全県に広め、国体での優勝・入賞をはじめ、各年代において、全国・北信越で優勝・入賞を果たせるようになった。大会での結果を中心に歩みとして、記すこととする。

1 国民体育大会（入賞）

平成8・9年	田島大助	成年B 優勝	2連覇
平成10年	尾羽林英樹	成年B 第5位	
平成11年	成年B団体（滝澤誠・田島・尾羽林）	第4位初入賞	総合 第8位
平成12年	田島大助	成年B 第5位	
平成14年	尾羽林英樹	成年B 第5位	
平成18年	田島大助	成年B 第5位	
	鈴木章広	成年A 第5位	
平成21年	成年団体（鈴木・中田・横山）	第4位	
	大道久司	少年 第5位	総合 第8位



少年の部初入賞 木曾から全県に広げた成果

平成22年	大道久司	少年 第3位
平成23年	大道久司	成年 第5位
平成24年	北村直樹	少年 第5位
平成25年	少年団体（松原康・市川・高木二・渡辺亮・芝田好）	第5位初入賞
	渡辺 亮	少年 第5位
平成28年	渡辺 拓・山内裕太	少年 第3・4位

2 社会人（準優勝以上）

平成15年	第42回全国教職員相撲選手権大会	団体（田島・植原・尾羽林・上村）準優勝
平成21年	第2回全日本青年相撲選手権大会	横山雄大 優勝 ※第5・7・8回優勝
平成25年	第6回全日本青年相撲選手権大会	団体（杉浦・横山・花邑・藤森）準優勝

3 大学生（優勝）

平成26年	第92回全国学生選手権大会	天皇杯第63回全日本相撲選手権大会	日本代表として、第11回アジア相撲選手権大会	重量級	第19回世界相撲選手権大会	団体 優勝
	大道久司	個人15タイトル獲得（上記含H23～）				
平成29年	第52回全日本大学選抜十和田大会	渡辺 亮	優勝			
平成30年	第43回全国学生個人体重別選手権大会	高木飛翔	65kg未満級	優勝		



4 高校生（団体準優勝、個人第3位以上）

平成14年	第54回全国高等学校相撲新人選手権大会	木曾山林高等学校（鈴木・起・中田・北原）	準優勝
-------	---------------------	----------------------	-----

平成21年 第61回全国高等学校相撲選抜大会
木曾青峰高等学校（大道・花邑・百瀬・高木翔）
準優勝

平成22年 第94回高等学校相撲金沢大会
石坂拓矢 第3位・北信越最優秀選手

平成22年 第53回選抜高等学校相撲宇佐大会
大道久司 優勝

平成25年 第62回選抜高等学校十和田大会
渡辺 亮 第3位

平成27年 第10回全日本ジュニア体重別相撲選手権大会
芝田好佑 80kg未満級 準優勝

5 中学生（準優勝以上 但し全国都道府大会第3位）

昭和55年 第2回中部日本選抜中学生相撲大会
原 智之 優勝

昭和58年 第5回中部日本選抜中学生相撲大会
奈良靖司 優勝

昭和63年 第10回中部日本選抜中学生相撲大会
福島中学校（赤羽・田島・尾羽林・小坂）準優勝

平成6年 第24回全国中学校相撲選手権大会
福島中学校（下原・平昌・生駒・滝澤雅）準優勝

平成12年 第11回全国都道府県中学生相撲選手権大会
鈴木章広 第3位

平成12年 第22回中部日本選抜中学生相撲大会
福島中学校（起・鈴木・中田・針間）優勝

平成12年 第30回全国中学校相撲選手権大会
福島中学校（起・鈴木・中田・針間・奥田）優勝



官民一体となった取組で全国制覇

平成18年 第17回全国都道府県中学生相撲選手権大会
団体（大道・山崎・石坂・井出）第3位

平成19年 第29回中部日本選抜中学生相撲大会
福島中学校（大道・百瀬・花邑・中畑）準優勝
石坂拓矢 優勝 大道久司 準優勝

平成22年 第21回全国都道府県中学生相撲選手権大会

山本正克 準優勝

平成23年 第33回中部日本選抜中学生相撲大会
山本正克 優勝 松原康太 準優勝

平成25年 第35回中部日本選抜中学生相撲大会
山内裕太 準優勝

令和元年 第41回中部日本選抜中学生相撲大会
木曾町中学校（林玲・林琉・佐々木・中田）準優勝

令和3年 第51回全国中学校相撲選手権大会
木曾町中学校（林玲・林琉・中谷・藤谷）準優勝

6 小学生（優勝）

平成18・19年 第19・20回全日本小学生相撲優勝大会
山本正克 4・5年生の部 優勝

平成30年 第31回全日本小学生相撲優勝大会
林 玲 6年生の部 優勝

7 女子（優勝）

平成26年 第5回全日本女子相撲郡上大会
福澤明莉 小学校4年40kg未満級 優勝

平成26年 第17回全日本小学生女子相撲大会
古瀬愛恵 小学校6年50kg未満級 優勝

平成28年 第7回全日本女子相撲郡上大会
福澤明莉 小学校6年50kg未満級 優勝

※全国規模大会のみ記載（中部日本選抜中学生相撲大会を除く）

8 その他

(1) 全国大会開催と県内での大会創設

昭和54年 中部日本選抜中学生相撲大会創設

平成9年 長野県小学生相撲選手権大会創設

平成11年 第29回全国中学校相撲選手権大会開催

平成15年 小・中学生相撲木曾大会創設

” 長野県中学生相撲選手権大会創設

平成24年 第90回全国高等学校相撲選手権大会開催

平成26年 長野県中学生女子相撲選手権大会創設

平成29年 長野県女子相撲選手権大会創設

(2) その他

平成4年 東京農大合宿誘致（木曾福島町と連携）

平成16年 県ジュニア強化事業開始

平成19年 連盟会報誌『相撲ながの』発刊

令和元年 出羽海部屋木曾合宿開催（他団体と連携）

令和2年 コロナ禍による大会中止に伴い「高校3年生中学生3年生を称え励ます会」開催

長野県馬術連盟

<低迷期からの脱出>

馬術関係者の長年の尽力で国民体育大会における馬術競技の地位の向上を目指してきたこと、つまり、昭和63年「京都国体」まで行われてきた国体天皇杯得点のシス

テムが平成元年より変更になり、それまでは各種目の入賞者の総合得点の入賞県しか天皇杯得点が与えられていなかったものが、平成元年の「北海道国体」では種目数も増え、各種目の入賞得点があるまま天皇杯得点に反映

されるようになりました。そのため今までは一つの拠点を持ってそこに数頭良質馬を持っている県が有利でしたが、以降は種目も多様化したことを受け、幸い長野県は昭和53年の「やまびこ国体」に出場した選手のほとんどが長野県の地元で散らばり乗馬クラブを設立し、それぞれが特徴を活かし、(例えば「クロスカントリー競技」を得意とする乗馬クラブあるいは「馬場馬術競技」を得意とするクラブ) 国体の新しいシステム変更によく対応できたわけです。

その結果、「北海道国体」では篠原真一選手の優勝を含む、3種目の入賞、さらに翌年(平成2年)の福岡国体では大久保寿幸選手の優勝を含む4種目に入賞を果たしました。とりわけ前年度から新設された「クロスカントリー競技」の少年の部は平成元年と2年連続優勝という快挙でした。その後、地形的にも施設の的にも長野県の得意種目となります。(平成3年からは「ダービー競技」に変更され、若干地形的有利は薄れたものの、長野県にとっては有力種目でありました。)

<国民体育大会、全員入賞を掲げて>

それ以後、数年の低迷期がありました。その対策として外部からの指導者を招へいし、実践的なトレーニング(国体で勝てる)の実施と成年だけではなく、少年も(実際には少年の保護者)良質な馬匹を取得し、かつ、昭和53年の「やまびこ国体」優勝者、及びその関係者が、自らの二世、またはその年代の選手を育て、先の外部からの招へい指導者とともに切磋琢磨し合い、長野県の国体予選会自体が非常に高いレベルで行われるようになった画期的な時期でもありました。つまり今までは1人、もしくは2人が入賞することが精一杯でしたが、国体に出場する選手全員が入賞を争えるレベルになってきました。



国体優勝14回の佐藤 泰選手

その成果が出始めたのは、平成7年の広島国体でした。(天皇杯得点で13位までに躍進しました。) 更なる実践的な強化策として、当時「馬強県」であった山梨県と定期戦を申し入れました。当初は全く「胸を借りる」という

状況でしたが、山梨県の馬術競技場の施設のにも良質であることが相まって、長野県の選手は山梨県の優秀選手からも学ぶべきことを吸収し著しい成長を遂げました。(この競技会は「甲信馬術大会」として20年以上現在も継続し、当時2県で始めたこの競技会が、現在では関東甲信越の有力選手が集結し時には200頭以上参加する大会にまで発展しました。)

平成9年の「大阪国体」以降天皇杯得点では常に、入賞を果たし、平成12年「富山国体」においてはついに少年種目で2名の優勝者(佐藤賢希、中村陽平)も輩出することになり、その後、平成13年「宮城国体」の佐藤賢希、平成14年「高知国体」の佐藤英賢、平成15年「静岡国体」佐藤英賢の連覇と続きました。

一年置いて平成17年「岡山国体」での佐藤 泰(2種目優勝)、有吉 隆、その後佐藤 泰選手は平成21年の新潟国体までの五年間で8度の優勝で「馬術の長野県」に大きく貢献しました。

それ以外の選手でも、平成20年「大分国体」の佐藤英賢、金子哲之、小野苑果そして平成21年の「新潟国体」の小林義彦の優勝(小林は平成27年「和歌山国体」でも優勝)もありました。そして増田真七海は平成23年「山口国体」、平成26年「長崎国体」に優勝を遂げました。その後、佐藤 泰は平成29年「愛媛国体」、平成30年「福井国体」でも優勝し国体優勝は14回に達し、現在記録保持者、静岡県川口選手の18回の前人未達の記録に迫ろうとしています。

<念願のオリンピック選手の輩出>

2008年(平成20年)ついに念願の長野県出身のオリンピック馬術選手が生まれました。「2008年北京オリンピック」の馬術競技は香港で行われ佐藤英賢選手が「障害飛越競技」に出場しました。愛馬の「カヤックDH号」は彼が低いレベルの競技会から世界を転戦しオリンピック馬までに仕上げました。



2008年北京オリンピック
佐藤英賢選手とカヤックDH

2012年の「ロンドンオリンピック」には佐藤賢希選手、大岩義明選手がともに総合馬術の選手として出場し、特に大岩選手は初日トップ通過で今後に期待を持たせてくれました。

そして「Tokyo 2020 オリンピック、パラリンピック」においても上記3選手は日本代表の有力候補選手になっておりメダルが期待されます。

<掲げてきた方針と今後>

長野県馬術連盟は平成12年頃より強化方針を下記のように掲げてきました。

1) 全国の高いレベルの競技会への積極的参加

全国の高いレベルの競技会に参加するには、施設使用料、エントリー費、馬匹の輸送費、その他宿泊、交通費等の個人または乗馬クラブの負担は大きく、県からの補助金を活用しながら、かつ保護者への理解もお願いしております。

2) 県内および県外での県馬連主催の高いレベルの競技会の開催

競技会をオーガナイズするにあたって、審判員、スチュワート、コースデザイナー、装蹄師、獣医師等のオフィシャルが必要です。そのためにこれらの資格取得を県馬連は積極的に進めてきました。馬術に関わった人たち全てが騎手（アスリート）として成功するわけではありません。様々な分野で学習し、かつその能力を発揮して、高いレベルの競技会開催

の一翼を担っていただきたいと思います。

3) 優秀選手の海外派遣及び海外からの優秀指導者の招へい

コロナ禍で非常に厳しい状況ですが、かつて県が行った事業「オリンピック育成事業」を復活していただき、長野県選手が参加するオリンピックにおける「スポーツの力」に長野県民の感動を呼び起こしたいと願っています。

<2028年「長野」国民スポーツ大会に向けて>

2028年の国民スポーツ大会では、ぜひ総合優勝を勝ち取りたいと思っております。選手育成のためのプログラムと、そのための組織作り（法人化を含めて）をこれまでの方針の更なる発展的変革を行い「馬術長野」を目指していきます。

長野県フェンシング協会

●沿革

当協会は、昭和53年やまびこ国体にむけて昭和48年6月13日に設立、同6月25日に長野県体育協会に加盟した。フェンシングを通じてスポーツを振興し、その健全なる発展とスポーツ精神の向上を図ることを主目的に、①普及及び技術の向上に関する事、②各種競技会、講習会等の開催に関する事、③国民体育大会等全国的大会に選手、役員等を派遣すること等、各種事業を行ってきた。

●昭和63年～令和3年のあゆみ

(下線部は、現在継続中)

(1) 会長

- ・清水重幸（箕輪町長：昭和48年～53年、県議会議員：昭和53年～平成11年1月）
- ・井沢通治（平成11年5月～15年11月）
- ・平澤豊満（平成15年12月～26年11月）
- ・白鳥政徳（平成26年12月～現在）

会長職は、歴代箕輪町長が務めており、事務局も町教育委員会内に設置されるなど、箕輪町の協力のもと、競技の県内普及及び強化に努めている。

(2) 活動団体

- ・小中学生の活動先
NAGANO.Jr.フェンシングクラブ（平成8年～現在）
南箕輪わくわくクラブフェンシング（平成20年～現在）
- ・中学生の部活動
 箕輪中学校のクラブ活動（昭和56年～平成5年）⇒
フェンシング部（平成6年～現在）
- ・高校生の部活動
 箕輪工業高校（昭和49年～平成19年）
 箕輪進修高校（平成22年～現在）

伊那北高校（昭和59年～現在）

赤穂高校（平成12年～28年）

上伊那農業高校（平成20年～26年）

- ・その他、大学・高校生の所属先として、信州大学、伊那弥生が丘高校、つくば開成高校、長野工業高等専門学校、辰野高校などがある。

平成5年頃までは、箕輪中学校での週1回活動と2つの高校の部活動及びその卒業生らによる社会人の活動であり、県内で競技を始める年齢は15歳過ぎが中心であった。

平成6年に箕輪中学校のクラブが部活動となり、中学生（13歳から）の本格的な普及と強化が始まった。さらに平成8年には、小中学生の活動の場として、NAGANO.Jr.フェンシングクラブを箕輪町に立ち上げ、小学生（6歳から）の普及も始まった。底辺を拡大すべく、平成20年に南箕輪村地域総合型スポーツクラブへフェンシング教室を追加した。

現在は、保育園児（概ね5歳）から機会の提供を行っている。

(3) この間の国民体育大会について

○成年男子

平成12年富山エペ8位、平成14年高知サーブル4位、平成15年静岡エペ4位、平成21年新潟エペ6位、平成23年山口エペ6位、平成29年愛媛フルーレ8位、平成30年福井フルーレ8位

成年男子は、昭和63年京都国体から令和元年茨城国体まで、32回ストレート出場し、7回入賞を果たした。

○少年男子（種目フルーレのみ）

平成8年広島3位、平成26年長崎7位、平成27年和



第74回茨城国体

歌山 4 位

出場：平成元年、平成3年、平成20年、平成24年、平成28年、平成30年

○少年女子（種目フルーレのみ）

平成16年埼玉 4 位

出場：平成12年、平成17年、平成20年、平成28年、平成30年

○成年女子（この間、本国体未出場）

少年男女と成年女子は、北信越国体にて上位1位か2位でなければ本国体に進めないが、少年男子は9回突破し、3回入賞を果たした。少年女子は6回突破し、1回入賞を果たした。

(4) 国体以外の主要全国大会3位以上、世界大会日本代表としての個人戦績(一部、団体戦績を波下線部で記載)

平成3年度：高校総体男子サーブル2位

平成11年度：高校総体男子エペ2位

・世界カデ女子エペ日本代表輩出

○全日本男子エペ優勝【三澤（県出身者）】

平成12年度：全日本男子エペ3位

平成14年度：全日本男子エペ2位

平成15年度：全国高校選抜女子フルーレ団体優勝

【赤穂高】・全国中学生男子フルーレ団体2位、女子フルーレ団体2位

○全日本男子エペ優勝【三澤：長野クラブ】

平成19年度：全国小学生男子フルーレ団体優勝

【NAGANO Jr.】・JOCジュニア男子エペ2位・世界ジュニア女子サーブル日本代表輩出

平成20年度：全国小学生男子フルーレ団体3位

・全国中学生男子エペ団体2位・全日本学生

女子サーブル優勝【唐澤（県出身者）】

・世界ジュニア男子エペ日本代表輩出

平成22年度：全国中学生男子フルーレ団体2位

・世界カデ男子サーブル、女子エペ日本代表輩出

・JOCカデ女子エペ優勝【今井：上伊那農業高】

平成23年度：高校総体男子サーブル3位・世界カデ女子エペ日本代表輩出・世界ジュニア女子サーブル日本代表輩出

平成24年度：全国中学生男子サーブル3位・世界カデ女子エペ日本代表輩出

○世界カデ男子フルーレ第3位【西藤（県出身者）】
平成25年度：高校総体男子サーブル優勝【清水（県出身者）】、男子サーブル2位、女子エペ2位

○世界ジュニア男子フルーレ3位【西藤】

平成26年度：高校総体女子エペ2位・全日本女子サーブル3位

平成27年度：高校総体男子サーブル優勝【清水】・JOCジュニア男子フルーレ優勝、全日本男子フルーレ2位【西藤】

平成28年度：JOCジュニア男子フルーレ2位・全日本男子フルーレ3位

平成29年度：◎全日本男子フルーレ優勝、世界選手権男子フルーレ2位【西藤】

平成30年度：全国小学生男子フルーレ3位・全日本男子サーブル3位

令和元年度：全国小学生女子フルーレ3位・JOCカデ男子フルーレ2位

令和2年度：COVID-19の世界的流行により、殆どの全国大会が中止、オリンピック延期

令和3年度：☆西藤俊哉選手が東京2020オリンピック男子フルーレ日本代表【県内初】

昭和47年頃まで県内経験者不在だったが、49年間当協会が中心となり、普及及び強化を行ってきた。競技者は徐々に増え、県協会の会員最大値は平成26年の88人であった。ここ数年は75人前後の登録数推移であり、中学生以下の比重が高い。県外大学・高校等へ進学して競技継続する者、さらに卒業後には地元に戻り、自身の競技継続と後進の指導にあたる者もいる。また、親が元競技者の2世フェンサーも誕生している。

競技者の個人成績としては、高校総体で4位以内に11名入賞、年代別の日本代表30名を輩出し、国内最高峰の全日本選手権大会では2名が優勝を果たした。最近では、中高校生段階から将来の可能性を高めて世界で戦うため、県外に活動拠点を移す選手も生じている。2017世界選手権で準優勝を果たし、長野県初のオリンピックとなった西藤俊哉選手もその1人である。

団体戦の最高成績としては、全国小学生男子フルーレ優勝、全国高校選抜女子フルーレ優勝などを残し、県内在住メンバーで勝ち取った。

●今後に向けての取り組み

1巡の国体が終了し、女子への普及と定着が課題である。競技力が高い県では、成年女子の存在が大きい。国体で上位入賞成績を収める以外にも、幼少期指導での活躍や孫・子供の良き理解者かつ応援者となり、グッドフェンサーが育つ好循環が見受けられる。2028年には長野国民スポーツ大会が予定されているので、前述の課題解消に努めながら、やまびこ国体の再現（奇跡の少年男子優勝と称された）を目指し、地元で優勝を狙うチーム作りに取り組む所存である。

長野県柔道連盟

長野県柔道連盟は、大正11年に結成された長野県柔道有段者会を昭和23年に発展的に解消し、長野県柔道会を結成、昭和26年から長野県柔道連盟と改称して現在に至っております。

大会の開催では、実施回数が70回を数える「長野県四地区対抗柔道大会」を始め、全国屈指の少年大会である「醍醐敏郎杯全国少年柔道練成大会」の開催も26回を数えております。

平成に入ってから、平成14年（2002年）厚生労働大臣杯争奪「第52回全日本実業団体対抗大会」、令和3年（2021年）には「全国高等学校総合体育大会柔道競技（インターハイ）」を長野市ホワイトリングにて開催いたしました。特にインターハイにおいては前年度新型コロナウイルス感染症拡大のため中止（兵庫インターハイ）となった翌年度ということもあり、全国から注目を集めた大会でありましたが、高体連専門部を中心に、当柔道連盟が一丸となって成功を収める大会となりました。

国体の成績では、常勝とはいきませんが、昭和53年の「やまびこ国体」での総合4位を皮切りに、女子総合優勝、成年男子では4位入賞をしております。

最近の活躍では、令和元年の世界柔道選手権大会で出口クリスタ選手（松商学園高等学校出身）が優勝し金メダルを獲得。また堀川（津金）恵選手（松商学園高等学校出身）が講道館杯優勝、手塚（村山）明日香選手（松商学園高等学校出身）茂木才跡選手（松本第一高等学校出身）が全日本ジュニア柔道選手権大会で優勝。他にも各種全国大会で優勝・入賞者を多数輩出しているとともに、全日本柔道強化指定選手にも指名され、更なる活躍を期待しているところです。全国柔道形競技大会でも優勝者が多数誕生しています。このように少年から一般までが切磋琢磨し素晴らしい環境が出来つつあります。

2028年に迎える長野国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会に向けてはプロジェクトチームを立ち上げ強化をスタートしました。長野県の天皇杯獲得に貢献できるよう取り組んでおります。

昨今のスポーツの多様化、少子化などによる児童生徒の激減、苦勞を嫌う風潮も手伝ってか中学・高校柔道部員が極端に少なくなり、競技人口が減少しています。この国民スポーツ大会での活躍を目指すことにより、県内での柔道競技者また支持者拡大に努め、青少年健全育成・地域貢献にも寄与したいと思います。そのために会員一人一人がそれぞれの立場で、個々の指導力の向上、「精力善用・自他共栄」の柔道精神で今後とも努力していきたいと思っております。

全国大会以上優勝の記録（平成元年以降）

【全国中学校総合体育大会】

平成9年	徳久 瞳・下諏訪中学
平成13年	山岸絵美・丘中学
平成13年	清水千晶・旭町中学
平成25年	木崎光輝・丘中学校
平成27年	唯野己哲・東御東部中学

【全国高等学校総合体育大会】

平成16年	清水千晶・松本松南
平成23/25年	出口クリスタ・松商学園
平成24/25年	津金 恵・松商学園
平成26年	鳥羽 潤・松本第一

【全国高等学校柔道選手権大会】

令和3年	白金宏都・佐久長聖
------	-----------

【全日本柔道形競技大会 優勝者】

平成9年	柔の形	大森千草（大森接骨院）
平成11年	投の形	原山伸樹（長野県警察） 中澤真樹（長野県警察）
	極の形	菊地宗昭（長野県警察） 久保山正秋（長野県警察）
平成14年	護身術	依田正三（日置電機） 春日啓孝（上田染谷丘高校教）
平成16年	投の形	内山貴之（内山接骨院） 松井孝文（敬老園）
平成17年	柔の形 古式の形	大森千草（大森接骨院） 小野澤健次郎（榊明和） 春日啓孝（上田染谷丘高校教）
平成18年	投の形	高橋俊充（長野県警） 依田文和（長野県警）
	護身術	武井弘美（武井接骨院） 平林友一（セイコーエプソン株式会社）
平成20年	投の形	内山貴之（内山接骨院） 松井孝文（敬老園）

【※内山・松井ペアはワールドカップ日本代表選出】

平成21年	護身術	武井弘美（武井接骨院） 平林友一（セイコーエプソン株式会社）
	五の形	丸尾 泉（長野県教育委員会） 勝見藤一（丸子中学校教頭）
平成22年	投の形	内山貴之（内山接骨院） 松井孝文（敬老園）
	護身術	勝見藤一（丸子中学校教頭） 春日啓孝（上田染谷丘高校）
平成23年	五の形	丸尾 泉（長野県教育委員会） 勝見藤一（丸子中学校教頭）
平成24年	五の形	丸尾 泉（長野県教育委員会） 勝見藤一（丸子中学校教頭）
	柔の形	大森千草（大森接骨院）



平成25年 古式の形 瀧澤義人（瀧澤接骨院）
小林 修（湯田中温泉接骨院）
平成26年 柔の形 大森千草（大森接骨院）

組織（役員）体制（平成元年以降）

◇平成元年～3年度

会 長 井出友則
副会長 滝沢 汎 原 幸宜 森島久利
上松正巳
理事長 宮原三治

◇平成4年～5年度

会 長 井出友則
副会長 清水 浩 原 幸宜 岡本祭八郎
森島久利 山田耕司 島岡一蔵
理事長 宮原三治

◇平成6年～7年度

会 長 岡本祭八郎
副会長 金子保利 儀藤建治 清水 浩
石田和増 岩井信人 小宮山修
理事長 笹井計知

◇平成8年～9年

会 長 岡本祭八郎
副会長 金子保利 儀藤建治 清水 浩
石田和増 小笠原良孝 斎藤金司
理事長 笹井計知

◇平成10年～11年

会 長 岡本祭八郎
副会長 笹井計知 竹鼻 要 渡辺展猛
大森素久 三澤四郎 藤森 弘
理事長 笹井計知

◇平成12年～15年

会 長 笹井計知
副会長 春原和昭 竹鼻 要 渡辺展猛
大森素久 竹内 聡 宮崎重昭
理事長 塚田修三

◇平成16年～17年

会 長 笹井計知
副会長 塚田修三 竹鼻 要 渡辺展猛
小口久人 大森素久

理事長 木内義雄
◇平成18年～19年
会 長 竹鼻 要
副会長 塚田修三 小池権衛 米山 廣
小口久人

理事長 木内義雄
◇平成20年～21年
会 長 竹鼻 要
副会長 塚田修三 小池権衛 村山良治
小口久人

理事長 木内義雄
◇平成22年～23年
会 長 村山良治
副会長 内山 清 生島常吉 猪又正雄
小林昭平 木内義雄（兼 理事長）

◇平成24年～25年
会 長 村山良治
副会長 内山 清 井出英孝 猪又正雄
小林昭平 木内義雄（兼 理事長）

◇平成26年～27年
会 長 村山良治
副会長 内山 清 井出英孝 津金武寿
小林昭平 木内義雄（兼 理事長）

◇平成28年～29年
会 長 木内義雄
副会長 宮原一治 岩下富夫 津金武寿
宮坂健一
理事長 久保山正秋

◇平成30年～令和元年
会 長 木内義雄
副会長 宮原一治 岩下富夫 津金武寿
宮坂健一
理事長 久保山正秋

◇令和2年～令和3年（現体制）
名誉会長 村山良治
相 談 役 木内義雄
会 長 岩下富夫
副 会 長 宮原一治 勝見藤一 津金武寿
宮坂健一
理 事 長 中澤俊明
事務局長 丸尾 泉
事務局次長 北村和幸 下島正信 高村和男

長野県ソフトボール協会

1 発足から現在の姿

長野県ソフトボール協会は、昭和24年日本ソフトボール協会の発足とともに県高体連内に併設された。その後、伊那弥生ヶ丘高等学校女子ソフトボール部の



国体6年連続出場の活躍により、「ソフトボールのまち伊那市」として熱意が盛り上がり、学校の地元の伊那市へ事務局を移転し独立する事となった。伊那市に協会を独立設置するにあたり、伊那市の温かいご理解を経て、昭和32年、伊那市教育委員会内に移された。同時に事務局内の組織の整備も行われ、現在の運営の形が築き上げられた。

当協会では、毎年全国大会を初めとし、リーグ戦など多くの大会の誘致に取り組んでいる。主な大会として、昭和63年には、日本女子1部リーグが初めて伊那市で開催され、平成13年に誘致した日本女子1部リーグ第1節では、上野由岐子選手が北九州高校を卒業し、日立高崎チームに入団してのデビュー戦となった。観衆は2日間で4,114名となり、当時大変な話題となった。その後も、幾度と開催され、北京オリンピックで金メダルを取った斉藤春香監督、2020東京オリンピックの日本代表宇津木麗華監督などが当時の選手として来ている。近年では、平成29年、平成30年と2年連続で日本女子1部リーグを誘致し、東京オリンピック代表候補選手が多数出場している。

また、日本ソフトボール協会主催の各種大会にも毎年出場しており、長野県内の各種別のチームが、全国大会において好成績を収めている。主な活躍は、平成13年日本女子3部イースタンリーグで「大和電機工業株式会社」が優勝し、その後もリーグ戦等で活躍が目立ち、平成27年第55回全日本実業団女子選手権大会で優勝した。現在も、長野県内のソフトボールの発展に寄与している。また、平成20年第48回全日本実業団男子ソフトボール大会では、「KOA株式会社」が準優勝、その後も同大会で2年連続3位の活躍、平成16年には第1回全日本一般男子大会で「オール伊那ソフトボールクラブ」が初代の優勝チームとなった。その他にも、全日本エルデスト大会で「リリーズ松本」が3位、令和元年第18回全日本エルデスト大会では「AVACHAN's」が優勝している。全日本一般男子大会で「ミノワオールスター」が3位、全日本実年大会で「ミノワ実年クラブ」が3位、全日本シニア大会で「伊那シニア」が準優勝3回と3位2回、同じく「南信州SSC」が3位、全日本ハイシニア大会で「イ〜ナちゃんハイシニア」が準優勝している。中学

生種別では、全国中学校女子大会で「篠ノ井西中学校」が3位、平成26年度都道府県対抗中学生女子大会で「長野県中学生選抜」が優勝、小学生チームも北信越大会で好成績を収めている。平成に入り全国大会を毎年の様に開催しており、全国から大勢のトップレベルのチームや選手を招くことは、交流とともに、選手の競技力向上や普及にも繋がっている。

令和元年には、創立70周年を迎え、記念式典・祝賀会を盛大に開催し、80周年に向けて新たな一歩を踏み出した。



第10回都道府県対抗中学生女子大会
優勝：長野選抜チーム



第55回全日本実業団女子選手権大会
優勝：大和電機工業



第1回全日本一般男子大会
優勝：オール伊那

2 組織：役員

(組織)

当協会は、現在、一般、大学、高校、中学、小学生の加盟団体をもって構成し、南信、中信、東信、北信に支部をおいている。役員は、顧問若干、参与若干、名誉会長1名、会長1名、副会長若干、理事長1名、副理事長若干、常任理事若干、事務局長1名、監事3名にて構成され、会は、会長以下の組織にて運営されている。

また、各支部から選出された役員より、総務、審判、記録、放送、財務、広報、指導者、技術、強化、普及、小学生、中体連、高体連、大学連、実業団、クラブ、一般男子、壮年、実年、シニア、ハイシニア、レディース、エルダー、エルデスト、国体対策プロジェクト、審判員普及育成、記録員普及育成委員の委員会を組織し、具体的な活動の推進を図っている。

(役員)

- 顧問 向山文人(昭和48年～平成13年)
 向山一人(昭和54年～平成9年)
 三沢功博(昭和61年～平成9年)
 原久夫(平成7年～平成15年)
 唐沢清海(平成16年～平成23年)
 野溝和男(平成20年～令和3年)
 小牧文敏(平成24年～現在)
 小林丈夫(令和2年～現在)
- 理事長 向山一人(昭和32年～昭和53年)
 唐沢清海(昭和54年～昭和58年)
 野溝和男(昭和59年～平成13年)
 小牧文敏(平成14年～平成19年)
 小林丈夫(平成20年～平成23年)
 矢島宏(平成24年～令和1年)
 唐澤稔(令和2年～現在)
- 会長 原賢一(昭和33年4月～昭和40年)
 田畑五郎司(昭和41年～昭和45年4月)
 三沢功博(昭和46年～昭和60年)
 原久夫(昭和61年～平成5年)
 唐沢茂人(平成6年)
 小坂樫男(平成6年～平成21年)
 白鳥孝(平成22年～現在)
- 事務局長 拓殖晃(昭和63年)
 植田光夫(平成1年)
 橋爪英峯(平成2年～平成5年)
 酒井一(平成8年)
 唐沢学(平成9年)
 宮下武(平成10年～平成13年)
 深沢逸雄(平成14年～平成17年)
 小林丈夫(平成18年～平成19年)
 矢島宏(平成20年～平成21年)
 深沢逸雄(平成22年～平成23年)
 吉川充彦(平成24年～平成29年)
 小林栄一郎(平成30年～現在)



平成24年11月25日 長野県ソフトボール協会創立70周年記念 長野県庁体育館(長野県庁)

3 国体

(出場歴)

- 昭和63年京都国体…成年女子(大和電機工業株式会社主体) 監督:新山監督
- 平成1年北海道国体…成年女子(大和電機工業株式会社主体) 監督:新山監督
 少年女子(長野選抜) 監督:多田監督
- 平成2年福岡県国体…成年男子2部(長野県選抜) 監督:矢島監督
- 平成3年石川県国体…成年女子(大和電機工業株式会社) 監督:新山監督
 少年男子(伊那弥生ヶ丘高等学校) 監督:山本監督
 少年女子(長野選抜) 監督:多田監督
- 平成4年山形県国体…成年女子(大和電機工業株式会社) 監督:荒井監督
- 平成5年香川県国体…成年女子(長野県選抜) 監督:原壮内監督
- 平成6年愛知県国体…出場なし
- 平成7年福島県国体…成年男子2部(長野県選抜) 監督:吉沢監督
- 平成8年広島県国体…成年男子1部(長野県選抜) 監督:笠原監督
- 平成9年大阪府国体…成年男子1部(長野県選抜) 監督:渋谷監督
 成年女子(大和電機工業株式会社) 監督:佐野監督
- 平成10年神奈川県国体…成年男子1部(長野県選抜) 監督:大沢監督 3位入賞
- 平成11年熊本県国体…成年男子(KOA株式会社)
- 平成12年富山県国体…成年女子(大和電機工業株式会社) 監督:佐野監督 5位入賞

2010年～2020年 チーム登録数

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
実業団男子	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
実業団女子	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
クラブ男子	9	7	8	9	8	6	6	5	5	4	
クラブ女子	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	
大学男子	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	
大学女子	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
一般男子	10	12	12	9	11	12	11	11	9	10	
レディース	17	16	17	17	15	13	10	9	7	7	
エルダー	8	9	8	9	8	7	7	5	6	5	
エルDEST	4	5	5	5	5	5	4	5	6	6	
社年	33	39	40	38	39	36	35	33	35	33	
実年	20	19	19	19	18	19	21	23	21	24	
シニア	28	28	26	25	26	24	22	20	20	18	
ハイシニア	12	13	11	13	11	13	12	12	13	12	
高校男子	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
高校女子	25	25	25	23	24	24	23	23	21	21	
中学生女子	15	18	18	18	16	16	14	16	16	15	

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、試合が中止となったため、登録無し。

第61回国民体育大会ソフトボール競技(成年女子)・のじぎく兵庫国体



のじぎく兵庫国体5位入賞 平成18年10月1日～4日 於豊岡市

平成13年宮城県国体…成年男子（長野県選抜）
平成14年高知県国体…成年男子（長野県選抜）
成年女子（大和電機工業株式会社）
平成15年静岡県国体…成年男子（長野県選抜） 監督：飯沼監督 5位入賞



静岡県国体 成年男子 5位入賞

平成16年埼玉県国体…成年男子（長野県選抜）
成年女子（大和電機工業株式会社）
平成17年岡山県国体…成年男子（長野県代表）
平成18年兵庫県国体…成年女子（大和電機工業株式会社）
監督：深沢監督 5位入賞



第55回国民体育大会秋季大会ソフトボール競技

富山県国体 成年女子 5位入賞

長野県バドミントン協会

1. 協会のあゆみ

(1) 長野県バドミントン協会は、長野県内バドミントン競技者及び愛好者の統括中枢機関として、1948年6月10日（昭和23年）設立された。創成期には、経費面・施設設備面で多くの苦労を重ねてきた。当時日本バドミントン協会が発行された「初版バドミントン」では、16都道府県が掲載されているが、長野県もその一つに明示されている。本年2021年、創立73年を迎えることになる。

昭和52年、当時本協会の顧問をされていた西田実氏が信州大学教育学部紀要第38号に発表された「長野県におけるバドミンントンの歩み」の中で将来の方策として本協会に寄せた提言がある。

- ① 役員組織の拡充
- ② 児童生徒によるスポーツ教室の開設
- ③ 中学校におけるクラブ活動の促進
- ④ 県下中学校大会の開催の促進
- ⑤ 日本バドミントン協会の利用
- ⑥ 指導者の育成強化
- ⑦ 優秀選手の強化

以上抜粋である。現在実践している内容もあるが、更に努めなければならない内容も含んでいる。

長野県バドミントン協会では、バドミントン競技の普及振興・体位の向上を目標に掲げ、スポーツの健全な普及・競技力の向上を図り、ガバナンスの強化・充実及びコンプライアンスを徹底し、スポーツ・

インテグリティの向上を図ってきている。

(2) 本協会では、目標を達成するため、以下の事業を行っている。

- ① バドミンントンの普及及び指導：バドミンントン教室の開催、審判員の育成分野で実施。
- ② 本会主催バドミンントン競技会及び（公財）日本バドミンントン協会主催バドミンントン競技会の開催：大町市でのS/Jリーグ、長野市での全国教職員バドミンントン選手権大会、全日本ジュニアバドミンントン選手権大会、中部日本バドミンントン選手権大会を開催している。今後も、計画を立案していきたいと考えている。
- ③ （公財）日本バドミンントン協会主催競技会への選手派遣：長野県の代表としてまた北信越の代表として参加する。
- ④ （公財）日本バドミンントン協会との緊密な連携
- ⑤ バドミンントンに関する調査研究
- ⑥ バドミンントンの競技力の向上：②・③・④・⑤と連動させ、実施。

上記のとおり実施しているが、北信越・全国との壁は厚く、更なる方策を検討していきたいと考えている。

(3) 創成期の組織から、現在の情勢に対応した組織編成を行った。現在、本協会には4地区バドミンントン協会・長野県実業団バドミンントン連盟・長野県教職

員連盟・長野県レディースバドミントン連盟・長野県バドミントンリーグ・長野県学生バドミントン連盟・長野県高体連バドミントン専門部・長野県中体連バドミントン専門部・長野県小学生バドミントン連盟・長野県社会人クラブバドミントン連盟の13団体が加盟しており、会員数は合わせて約6,000名を数える。理事会の構成は、会長・副会長（4地区会長）・理事長・副理事長・事務局長・理事（各委員会：総務委員会、競技委員会、審判委員会、指導委員会、広報委員会、競技力向上委員会の委員長及び協会加盟団体の代表者）とし、総会は理事会のメンバーに各加盟団体から2名の代議員を加え開催している。目標に掲げているガバナンスの強化・充実及びコンプライアンス、スポーツ・インテグリティの向上の観点から協会規約・同会計規程・同専門委員会規程・同加盟団体細則・同倫理規程を検討し、2020年（令和2年）7月1日から施行している。また、諸般の事項に対応するため、会長が招集し、特別委員会の設置ができることとした。

2. 競技力の向上

競技力の向上では、各競技力向上委員が熱心に尽力しているが、北信越ブロックの高い壁があり、勝ち抜くことが難しい状況が続いている。今後は、更に指導者の育成、選手の競技力の向上が課題となっている。厳しい状況の中ではあるが、本県仁科台中学出身の奥原希望選手が、リオオリンピック女子シングルスで銅メダルを獲得し、注目されている。現在、女子シングルス世界ランキング3位で東京オリンピックを目指して頑張っている。

また、近年、本国体ベスト8・16、全日本小学生バドミントン選手権大会ではベスト4、全日本ジュニアバドミントン選手権大会ではベスト8と着実に競技力が向上してきている。日本バドミントン協会U13のナショナルチームに所属し、練習に励んでいる選手もいる。一方、普及の面では会員登録者数が約6,000名と着実に増加し、多くの方が大会に参加している。更なる競技力の向上と普及に努めていきたいと考えている。一方、日本の一線級の競技を見て自己研鑽に励んでもらいたいという思いから、全国大会及び準全国大会の招聘を行っている。大町市でS/Jリーグ（平成30,1）、長野市で全国教職員バドミントン選手権大会（平成24,8）・全日本ジュニアバドミントン選手権大会（平成30,9）、上田市・佐久市で中部日本バドミントン選手権大会（平成29,11）ある。長野県選手にとって良い刺激となったと考えている。各大会は無事終了することができた。開催にあたり、ご尽力・ご協力いただいた関係市町村の皆様、関係団体の皆様、ご支援いただいた企業の皆様、住民の皆様にご場をお借りし、御礼申し上げます。今後も、全国大会を招聘し、長野県選手の競技力の向上と普及に努めていきたいと考えている。



3. 歴代会長・理事長

① 会長

笠原 英一（松本市、S 25～27）
 宇都宮 宿（長野市、S 28～29）
 笠原 英一（長野市、S 30～39）
 中村 篤衛（松本市、S 40～42）
 上条 密門（松本市、S 43～46）
 中村 伝（塩尻市、S 47～H 5）
 長浦 音吉（千曲市、H 5～11）
 金子 忍（諏訪市、H 12～19）
 山田 一六（諏訪市、H 20～24）
 平林 良治（安曇野市、H 25～30）
 山浦 和男（上田市、R 元～2年）
 荒井 和人（長野市、R 3～）

② 理事長

伊藤 活次（岡谷市、S 25～27）
 清水 武（長野市、S 28～29）
 伊藤 活次（長野市、S 30～37）
 丸山 修弘（松本市、S 38～39）
 中村 欣也（松本市、S 40～41）
 小出沢 悟（松本市、S 41～53）
 桑沢 英晴（塩尻市、S 54～58）
 長浦 音吉（千曲市、S 59～H 4）
 金子 忍（諏訪市、H 5～11）
 平林 良治（安曇野市、H 12～23）
 荒井 和人（長野市、H 24～）

4. 今後の発展に向けて

西田実氏からの提言を踏まえ、選手強化の見直しを行った。本年（2021年）から次世代を担うジュニア層の競技力の向上を図るため、「選手強化プロジェクト」を立ち上げ、活動を始めている。2028年の長野国体や将来の競技力の向上に繋がるものと考えている。

長野県弓道連盟

昭和22年に全日本弓道連盟が発足し、その5月に長野県弓道連盟も設立され、現在まで75年間、先輩各位、会員の努力により、時代が激しく変化する中で弓道長野の伝統を守りながら充実、発展してきた。

「長野県弓道連盟の現状」

平成元年全日本弓道連盟会員として登録した一般会員は、1,411名。現在は、減少してきてはいるものの1,285名。これに学生登録者、大学生約200名、高校生約2,700名、中学生約70名を加えると4,250名ほどの弓道人口となっている。少子化、高齢化が進む中で、それぞれの競技団体が会員確保に苦勞しているが、弓道も苦勞はしつつも一般では、女性会員が増加し、また、高校生人口も減少する中でありながら弓道部員数は、横ばいで推移している。

平成24年から中学校での武道必修化が始まり、下伊那郡泰阜中学校では弓道を選択して現在も継続。また、下伊那郡喬木中学校では、選択授業で弓道が取り入れられ武道必修化以前から続けられている。また、全県下、中学での部活動、また各地域での弓道教室への中学生の参加も多く、長野県弓道連盟が主催する中学生大会も年々参加者が増加しジュニアへの普及も進んでいる。

指導者も長野県は、弓界の最高指導者である範士の数が全国でもっとも多い時期もあり、まさに全国弓道界をリードしてきた。時間の経過とともに、その先生方も他界された方、一線を退かれた方もいますが、平成に入り、平成11年に山川茂樹範士（平成28年逝去）が誕生、平成23年には土川俊市先生が八段に昇段。平成27年に杉田博範士が誕生。現在でも指導陣は、充実している。

「広報誌・連盟誌の発行」

平成14年に広報誌「弓道ながの」が発行された。全国では、広報誌を発行している県連も多くあり、当時の故古澤博会長が長野県でも何とか発行したいと努力され、



新しく広報部がつけられた。当時のことを関係者に聞くと、始めてのことで大変な苦勞があったということであるが、年4回発行の目標が計画

どおり進められ、会員への情報提供、記録保持など貴重な情報源となっている。令和3年4月発行で77号を数えている。

平成17年には、長野県弓道連盟史も発行された。285ページという立派な連盟史で、長野県弓道の歴史が詳細

に記録されている。12名の編纂委員会が組織されたが、すでに編集委員でも他界された方もいて、それだけ時間は経過しているが、読み直してみると、多くの資料を集め、弓道長野の歴史がよく分かり改めてその努力に敬意を表するものである。



「県営弓道場の建設」

長野県内には、公営、私営を合わせ85ほどの弓道場がある。古くからの道場も多く長野県の弓道が盛んな証明でもあるが「やまびこ国体」が松本の護国神社境内で実施されたように、数多く道場があっても遠的、近的合わせた全国大会ができる道場はなく、その建設が弓道関係者にとって悲願であった。

昭和53年「やまびこ国体」弓道少年女子の遠、近両種目制覇（選手3人は、飯田女子高校）を含め、飯田女子高校の全国大会での活躍、合わせ弓道の盛んな地域である飯田市の運動公園内に平成4年長野県営弓道場が総事業費約5億円で建設された。その規模、施設内容とも全国屈指の道場であり、長野県弓道連盟にとっても、弓道関係者にとっても大変な喜びであった。その後も遠的射場の安土屋根、近的射場の観覧席屋根などの整備も行われ、この道場を拠点に全国大会で活躍する選手を輩出してきている。

2028年に予定されている長野国体は、この県営弓道場で開催されることがすでに決定している。



「全国大会での活躍」

多くの全国規模の大会が実施されている。ここでは全日本弓道連盟が主催し、全国の弓士が目指す最高峰の大会である「全日本男子弓道選手権大会」「全日本女子弓道選手権大会」、日本スポーツ協会が主催の国民体育大会の中での弓道競技、高校生のインターハイでの優勝を

紹介したい。なお、大学生も信州大学を中心に、北信越での活躍はもとより、全国大会で優勝、入賞する個人選手もいる。卒業後、長野県に残り、社会人として活躍する弓士も多い。現在、長野県弓道連盟の中では、大学弓道との関わりが薄くなっており、今後改善していかなければならない課題である。

「全日本男子選手権大会」

平成26年 第65回全日本男子弓道選手権大会

平澤敏弘 錬士六段 優勝

多くの指導者、選手が育った長野県であるが、男子選手権での入賞はあったものの優勝（天皇杯）に手が届かず、天皇杯を長野県に、これが積年の夢であった。平澤選手は、33歳の若さで、長野県に初の天皇杯を持ち帰り、新たな歴史を刻んだ。平澤選手は、現在「教士」に昇格している。



「全日本女子選手権大会」

平成4年9月 全日本女子選手権大会

今村康子 教士七段 優勝

平成21年9月 全日本女子選手権大会

降旗奉子 教士七段 優勝

平成の時代に2回皇后杯を長野県で獲得している。長野県女子の活躍は目覚ましい。

「国民体育大会」

平成4年 山形国体 少年男子遠的 優勝

平成7年 福島国体 成年女子（2部）優勝

平成18年 兵庫国体 少年女子近的 優勝

平成22年 千葉国体 成年男子遠的 優勝

平成27年 和歌山国体 成年男子近的 優勝

平成28年 岩手国体 成年男子近的 優勝

平成30年 福井国体 少年遠的、成年女子遠的、
成年男子遠的 優勝

「全国高校総合体育大会」

平成元年 女子個人 長野吉田高校
伊藤三枝選手 優勝

平成3年 女子団体 飯田女子高高校 優勝

「全国高校選抜大会」

平成14年 女子個人 飯田女子高校
平澤京子選手 優勝

平成28年 男子団体 長野吉田高校 優勝

なお、優勝者を紹介したが、二位以下の数多くの入賞もある。特に、国体では、毎年のように入賞しているがその活躍は、飯田県営弓道場に賞状が掲げられておりぜひご覧いただきたい。

「今後の課題」

全日本弓道連盟も平成23年公益財団法人となり、また、日本スポーツ協会傘下の弓道の中央競技団体となっている。スポーツ競技団体としてのガバナンスも求められ、弓道連盟も競技団体としての役割と伝統武道を守り育てる双方の役割を果たしていかなければならない。

競技団体としては、まず人口減少の中でいかに弓道人口を拡大していくか、青少年の健全育成という視点、また高齢者の生きがい、健康増進という視点からも幅広い年代層が興味を持てる武道であることを広めていかなければならない。一方、古来から弓は神器として崇められ、いまでも神社の祭典で奉納射会が開かれている。会員でなくても弓を引かれる方もおり、弓を引くという姿に憧れる人もいいる。そういった人たちも弓道の仲間と考えていく多様性が求められている。

令和という新しい時代に、動かぬと対峙し、自己を見つめるこの弓道が多くの人に注目されるものと期待している。

長野県ライフル射撃協会

我々が愛して止まないライフル射撃競技が国体正式種目であると説明するも、残念ながら、それを知る人は少ない。中・高校生となると、国体の正式種目であることはおろかライフル射撃競技種目の存在さえも知らないことが多い。マイナースポーツゆえ、本協会にとって、その認知・啓蒙は今もって永遠の課題である。

他の「的」射の競技にも通ずると思うが、ライフル射撃競技において、射座に立つ折の精緻且つ崇高な境地は格別のものがある。更に、競技の性質上、法遵守は絶対的であり、その心得をもって練習・競技に臨むことは、

自ずと人格形成が培われると信ずるところである。これは、本協会に所属する中・高校生や同伴の保護者にも、折に触れ伝えている。

本協会は、北信越国体予選突破、国民体育大会出場を目標に掲げ、日々運営推進に努力している。毎年巡ってくる国民体育大会だが、我がライフル射撃協会は1巡目長野国体開催（昭53）に発足後、漠然とした組織・体制のまま2巡目の京都国体（昭63）まで至った。国体が戦後の混乱期、国民の“元気付け”とした国のお祭として開催されたことを創始とみると、意識高揚が薄かったこと



令和2年「長野県スポーツ栄誉賞」受賞 砥石真衣

もあながち否めない。

しかし、2巡目京都国体あたりから、銃をはじめ施設設備等の高性能・メカニカル化が進んだこともあり、本協会内に天皇杯皇后杯を意識する気運が漸く高まり始めた。明確な目標をもつことが功を奏し、福岡国体（平2）から静岡国体（平15）まで、しばしば優勝及び上位入賞を達成してきたが長続きはしなかった。要因は、選手層を成年だけに頼っていたためである。年数と共に選手の高齢化、減少の限界がいよいよ現実のものとなり、低迷が続いた。打開策を講ずることは必至であった。

検討の結果、入賞者を輩出する持続可能な対策として、少年少女（ジュニア）の発掘と育成に比重を置き、ジュニア募集広告や「チームライフル体験教室」等の開催を粘り強く続けたところ、僅か2名であるがジュニアを獲得することができた。その内の一名、西野入麗香（高3）が、わずか2年間のコーチングを経て大阪国体（平9）で優勝し先鞭を切った。まさに椿事であった。この快挙がジュニア活躍の発火点となり後輩たちは互いに刺激され意識向上につながり、その効果として今日まで優勝、

入賞が続いている。後に続く後輩たちの栄光を挙げれば、徳武（高3）／富山国体（平12）、山本（高3）砥石（高1）／兵庫国体（平18）、金本（高1）／大分国体（平20）、三沢（高3）／千葉国体（平22）、小井戸瑠音（高1）／和歌山国体（平成27）、滝澤（高3）／岩手国体（平28）、小井戸瑠音（高3）／愛媛国体（平成29）、柳沢（高3）／茨城国体（令1）等、入賞、優勝、出場を果たした。特筆すべきは、砥石真衣（現成年）である。兵庫国体ジュニア初出場で4位入賞を皮切りに優勝、入賞を繰り返し、現在国体3姿勢種目5連覇中である。またオリンピック候補選手として日々精進に怠らない。ライフル射撃競技の真価と可能性を信じて、中長期的に対策を講じ、ジュニアに焦点を当て活躍の流れをつくってきた我が協会の誇りであり矜持である。

そして、今現在もライフル射撃競技が「スポーツ・ライフル」として広く理解が得られるべく、最善の方策をもって邁進中である。



令和3年度「第59回全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会」エアライフル立射60発競技 第3位入賞 柳沢充 長野工業高校3年

一般財団法人 長野県剣道連盟

1 連盟組織の改革（新たな時代のスタート）

(1) 昭和から平成へ

本連盟結成時（昭和27年6月1日）に副会長兼理事長であった古村幸一郎氏が第2代会長に就任したのが昭和29年4月のことである。それ以降、51年にわたり古村体制による本連盟の運営は続いた。昭和53年長野国体を成功させ、現在、当時の高校生強化選手が指導者として活躍している。

平成17年2月18日に古村幸一郎氏の逝去により、連盟の運営は新たな時代を迎えた。古村体制において長く副会長職にあった百瀬寛氏が会長代行として暫定的に連盟運営に努めたが、連盟役員の高齢化が顕著だったこともあり、連盟運営の活性化と若返りを望む声が多く出された。そのためには会長を剣道関係者や県内関係機関、中央団体等からも人望が厚い人物を据えたい

という考えが出された。

平成19年4月、第3代会長に衆議院議員であった小坂憲次氏を迎えた。小坂氏は長野市出身であり、平成17年（2005年）第3次小泉内閣では文部科学大臣を務め、中学校の武道必修化を推進した実績があり、人望も厚いことから本連盟会長に適任であった。理事長には加瀬浩明氏（46歳）が就任し、役員若返りも図った。小坂会長は、県内で開催される大会や予選会には公務多忙であっても必ず会場に駆けつけ、出場選手に激励の言葉をかけた。また、講習会の折には、受講生と同じ目線の高さで講師の指導を仰いだ。その姿を目の当たりにして、多くの剣士が感銘を受けたことは言うまでもなく、県内剣道は活性化し、新たな時代がスタートした。

(2) 一般財団法人化に向けて

小坂体制では、剣道の普及発展、競技力向上を目指して、段位審査会、講習会、大会等新たな事業を実施した。その結果、少年から一般まで剣道有段者数の増加、全国規模の大会における代表選手の活躍、県内で全国規模の行事開催など徐々に成果が見られるようになった。

平成24年には連盟結成60周年を迎え、さらなる発展を目指して連盟の法人化に着手し、平成26年6月17日、一般財団法人長野県剣道連盟が発足した。会長は引き続き小坂憲次氏、専務理事には加瀬浩明氏が就任した。法人化後は全日本女子剣道選手権大会を長野県開催にするなど活動がさらに活発になっている。

しかし、平成28年10月21日、病氣療養中であった小坂会長が急逝し、小坂体制は幕を閉じることとなった。連盟組織の改革と全日本女子選手権の開催を見届けての逝去であった。

(3) 平成から令和へ

平成29年6月、小坂体制で専務理事を務めた加瀬浩明氏が第4代会長に就任、専務理事には塩崎正昭氏が就任し、小坂氏の遺志を受け継ぎ連盟運営にあっている。平成から令和へ時代が移り、コロナ禍の中これまで経験したことのない状況ではあるが、今だからこその剣道は何かを考え、各種ガイドラインを設定し、新たな取り組みに着手している。

令和3年4月現在、役員は会長、副会長4名、専務理事、常務理事、常任理事4名、理事24名、評議員16名、監事2名、参与4名で構成されている。県下各地に17支部、居合道部、杖道部を含め7加盟団体によって組織して事業を実施している。今後、本県で2回目の開催となる第82回国民体育大会成功を目標に、剣道連盟一丸となって準備を進めていく考えである。

2 現在の事業内容

(1) 大会・予選会

強化・審判委員会、普及委員会を中心に大会、予選会を開催している。主催大会には以下のようなものがある。

- 長野県剣道居合杖道薙刀演武大会
- 小坂憲次杯長野県剣道大会
- 長野県剣道選手権大会（兼全日本予選）
- 長野県女子剣道選手権大会（兼全日本予選）
- 長野県小学生剣道錬成大会
- 長野県小・中学生剣道選手権大会
- 長野県女子剣道年代別選手権大会
- 長野県支部対抗剣道大会
- 全日本都道府県対抗剣道優勝大会予選会
- 全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会予選会
- 国民体育大会剣道競技予選会
- 全国高等学校剣道選抜大会予選会
- 中でも、「長野県剣道居合杖道薙刀演武大会」は今



令和2年度全日本男女選手権プロ表紙

年度で69回目を迎え、本連盟結成時から続く歴史ある大会である。第65回大会までは「長野県剣道居合杖道薙刀大会」として開催、居合道、杖道、なぎなたの部は公開演武、剣道の部は県下各地からオープン参加できる団体戦として人気を博していたが、第66回大会からはすべての部が演武中心となった。オープン参加の剣道団体戦は、「小坂憲次杯長野県剣道大会」として平成30年より開催され、今年度で4回目を迎える。

(2) 審査会

審査委員会を中心に、初段から三段は年4回、四・五段は年2回の審査会を開催している。全日本剣道連盟並びに本連盟の審査規則、各段位の審査会実施要領等に則り、公正かつ公平な審査会運営に努めている。

なお、六段から八段及び称号（錬士・教士・範士）審査会は、全日本剣道連盟主催となる。

(3) 講習会・研修会・稽古会

会員の技能向上に主眼をおき、段位審査会受審者や合格者を対象とした講習会を開催、強化事業の一環として各種大会や審査会終了後に自由参加の稽古会（憲友錬成会）や強化錬成会等を開催している。その成果もあり、近年は高段位の会員が増え、全国規模の大会での活躍も多く見られるようになった。

(4) 居合道部・杖道部

各部において大会、審査会、講習会、研修会を開催し、県内における普及発展に努めている。また、県外開催の大会や講習会にも意欲的に参加し、近年、高段位の会員が増えており、中でも杖道部では平成29年に2名が八段に合格している。

3 全日本剣道連盟主催行事の運営

(1) 剣道六・七段審査会

全国各地より受審者が集まる審査会が、全日本剣道連盟の依頼を受け、本連盟主管により本県において隔年で開催（主に8月）されるようになった。準備を含め3日間、本連盟会員が運営にあたっている。また、地元開催ということで受審者数も多い傾向にある。

(2) 全日本女子剣道選手権大会

日本剣道界最高峰の大会が、平成28年の第55回大会より5年間、本県拠点開催となった。本県が主管となり、本連盟会員が運営に携わった。開催県は代表選手2名が大会に出場することができるため、女子選手の

強化につながった。地元開催ということで毎回多くの会員が会場に足を運び、全国レベルの試合を観戦した。

拠点開催最終年度の令和2年度第59回大会はコロナ禍により例年9月開催が延期となった。一時は開催自体が危ぶまれたが、こちらも延期となっていた第68回全日本剣道選手権大会とともに令和3年3月に本県（ホワイトリング）で開催した。全日本男女選手権同時開催は史上初のことであった。本県選手も健闘し、優秀選手賞を受賞するなど、過去最高の成績を収めた。

一般社団法人 長野県ラグビーフットボール協会

ガバナンス強化を目的とした組織体制整備の一環として、2017年2月17日より、「長野県ラグビーフットボール協会」は一般社団法人となり、「一般社団法人長野県ラグビーフットボール協会」（以下長野県協会）となり、体制も一新致しました。

1. インターネットを用いた広報活動

インターネットを用いた広報活動が今後のスタンダードになると考え、2004年5月にnrfu.orgドメイン取得し、長野県協会HPの運用を開始。2013年には、Facebookページの設立、2018年には、公式Twitterの運用を開始。

2020年4月～2021年3月における、協会HPのページビュー数は、約15,000件/月。Facebookページのリーチ数は、約8,000件/月。Twitterのインプレッション数では、約66,000件/月と一定の成果をあげています。

今後は、さらに幅広い年代層に向けて、10代、20代の年齢層をターゲットとしたInstagramの運用を検討しています。

2. ラグビーワールドカップ開催前の気運醸成活動

2019年9月20日～11月2日まで開催された、ラグビーワールドカップに向け、2017年9月10日に長野市ラグビーフットボール協会を中心に、他競技のサッカーJ3の長野パルセイロと「長野市ラグビー・サッカーコラボレーション2017」と題し、J3リーグ戦の開催日に地元のフットボールの聖地でもあり、長野パルセイロのホームグラウンドである、長野Uスタジアムにて、長野市少年少女ラグビースクールの公開練習や、リコーブラックラムズの松橋周平選手による始球式イベント、ラグビースクールによるエスコートなどのコラボイベントを行い、ラグビーを知らない多くの方へ周知することが出来ました。

また、ラグビー合宿のメッカで夏の聖地と呼ばれる菅平高原に、イタリアへ事前合宿をアプローチし、2018年には、イタリア代表チームが菅平高原に合宿に来訪、その事前合宿の中で、ヤマハ発動機ジュビロとの国際親善試合を実施し、多くの観客が両チームにプレーに魅了



され、ワールドカップへの気運が一気に高まるきっかけとなりました。

そして、ラグビーワールドカップ直前となる、2019年8月31日、9月1日の2日間に向け、関東ラグビーフットボール協会の全面協力を得て、全8チームによる関東大学ラグビー菅平開幕戦を開催し、県内外より多くの方が訪れました。



3. ラグビーワールドカップ開催後の活動

ワールドカップ効果による、ラグビー人口の拡大を目指し、2020年2月23日に元日本代表主将の菊谷崇氏をゲストに招き、「ラグビーボールで遊ぼうin上田」を開催。市内保育園・幼稚園・認定こども園に通っている小学生未満児を対象にラグビーボールを触わるきっかけ作りを



行いました。

2021年は、コロナ禍の中、感染拡大防止対策を十分実施した上で、3月14日に駒ヶ根市おもしろかっぱ館芝生広場にて、開催することが出来ました。

中学生においては、高体連が主体となり、部員募集チラシを作成、県内の各中学校へ配布。協会としては、広報媒体の製作時のサポートなどを行いました。

一生しかない人生だ。
世界で一番楽しもう!

ラグビー部員募集中!

- ・未経験者でも大丈夫! 高校からラグビーを始める人が多く大会に出場しています。
- ・ラグビーってどんなスポーツ? 合い言葉は「All for one One for all」大きい人から小さい人まで! 力の強い人から足の速い人まで1チーム15人で戦い、いろいろな人の個性や特徴が活かせるスポーツです!

長野高校 長野工業高校 東京都市大塩尻高校
 松本国際高校 岡谷工業高校 伊那北高校
 飯田高校 飯田HOIDE長姫高校 下伊那農業高校

(長野西高校 長野吉田高校 丸ヶ丘学園高校 特用高校も合同チームで参加しています)

女子部員も募集しています。気軽にお問い合わせ下さい。

長野県 ラグビー 球部

長野県ラグビーフットボール協会



4. 今後

長野県では、7年後の2028年に第82回国民スポーツ大会・第27回全国障害者スポーツ大会開催を控えています。

ラグビーフットボール競技は少年(男子15人制)成年・女子(7人制)の3種目を上田市菅平高原、サニヤパーク菅平にて開催予定です。ラグビーフットボールはここ何年も本国体に出場しておらず、各種別の強化が急務となります。2028年前には段階的な強化策を講じ国スポ出場、女子初出場を目指します。また、合わせて、レフリー(審判)の育成強化、大会運営の経験値増加、ノウハウ蓄積、競技者人口の増加なども合わせて行っていきたくと考えています。

現在コロナ禍の中ではありますが、「ウィズ・コロナ」「アフターコロナ」を見据え、臨機応援に十分な感染防止対策を行いつつ、今後も、各年齢層へ、各種イベント・SNSによる広報活動など多方面に渡り、きっかけ作りの取り組みを進め、底辺拡大を目指していきます。



(文/一般社団法人長野県ラグビーフットボール協会
 広報記録委員会 宮下栄一)

長野県山岳協会

沿革

長野県山岳協会(以下長山協)は、長野県体協史に創立当初からの25年間を記述した。昭和36年4月発足、加盟は24団体だった。

時々によって増減があるが、令和2年には、30団体、

761名が登録している。なお、平成12年からは個人加盟も可能になっている。

長山協規約は、登山の推進、交流、文化向上をうたい、技術向上、遭難防止、自然保護、登山、海外登山、情報提供、山岳総合センターの運営など登山に関する全面的

な活動を掲げている。これに沿って60年間活動してきた。

歴代会長は次の通り。

古原和美、小澤利一郎、光島督、町田和信、武田武、田村宣紀、百瀬尚幸、松田美宏、柳沢昭夫、宮本義彦、唐木真澄、杉田浩康

歩み

活動歴の詳細については、次の資料を参考にしていきたい。

- ・長野県体育協会史（昭和63年）
- ・長山協創立50周年記念誌（平成23年）
- ・同誌付録のCD「国際登山史・機関誌」
- ・長山協ホームページの機関誌「やまなみ」

ここでは、昭和61年からの35年間の中心的な課題について、その「歩み」を記す。

◆国体山岳競技の取り組み◆

毎年県大会で選手を選抜し、北信越国体で本大会代表が決まり、本大会を迎える。昭和53年長野国体での完全制覇（4種別、3種目）後も、強豪県の位置を保ち続けてきた。

平成20年から競技がクライミングのみとなり、レベルが急速に上がったが活躍は続いている。とりわけ平成21年に少年男子の優勝、24年から26年の成年男子の3連覇という偉業は輝いている。令和10年の二巡目長野国体に向けて、すでに準備が考えられている。

◆海外登山界との交流事業◆

(1) 中国との友好登山交流事業

昭和41年、中国は諸外国に高峰登山の開放を発表した。当時の長山協のリーダーは「登山はいつでもできる。今重要なことは、中国との本当の交流を始めることだ」と説き、直ちに訪中し、合同の登山技術研修会を提案した。中国登山協会は諸手をあげて歓迎し、昭和56年から10年計画の日中合同登山技術研修会が実行された。第1回目は長野で、2回目は中国でと交互に訪問し合いながら行われた。

交流を一本の樹に例えると、10回計画の相互研修会という幹から、何本もの枝や葉が出た形となり、それが成長したイメージである。その枝や葉とは、高校生訪中交流登山、チベット登山協会との友好兄弟協定締結、北京市の訓練用人工岩場の寄贈、各種クライミング大会の支援、日中合同登山隊による高峰登山等で、それぞれ元気に茂り、結実している。

(2) ネパール山岳協会との友好協定締結

平成15年末、長野市でネパール山岳協会から、松本市とカトマンズ、駒ヶ根市とポカラの姉妹都市の好関係をみて、山国の長山協との友好協定を結びたいという申し出があった。平成17年にカトマンズで調印された。長野県のヒマラヤ登山隊への支援、ヒマラヤ環境調査支援、双方の行事への参加等の交流が続いている。

登山界の変化はあるだろうが、今後ともこれらの精神が続いてゆくことを願っている。

◆自然保護の取り組み◆

昭和50年代、長山協はビーナスライン問題で自然保護を訴えた。県自然保護連盟設立にも参画、寄与した。平成10年代には山のトイレ問題、ライチョウ保護や高山に進出した日本鹿問題などのフィールドワークを行った。

また、平成21年にはネパールのイムジャ湖に環境トレック隊を派遣し、地球温暖化による氷河湖崩壊の危機を、現地訪問で実体験した。平成24年には、ネパールへ植林活動の支援隊を派遣した。

自然愛護の気持ちを広めてゆくことの重要性は、今後さらに増すであろう。

◆主な海外登山◆

協会員の夢の一つに海外登山がある。この間の長山協主催の主な登山を挙げてみる。

昭和61年	チャンツェ峰 (7553m)
63年	大姑娘山 (5025m) 高校生隊
平成2年	ザンセルカンリ峰 (6460m) 初登頂
3年	シジャパンマ峰 (8012m) 雪崩事故
3年	ムスターグアタ峰 (7546m)
5年	シシャルデン峰 (2869m)
5年	ダウラギリ I 峰 (8167m)
8年	チョモラリ峰 (7326m)
9年	キズ峰 (6079m) 初登頂
18年	紅旗峰 (7011m)
23年	ヤズィックアグル峰 (6770m) 初登頂
30年	シュエラプカンリ峰 (6310m) 初登頂

なお、加盟団体やグループ、個人による海外登山は毎年行われており、枚挙にいとまがない。

◆長野県山岳総合センターとの関係◆

山岳総合センターの設立は昭和44年で、50年の歴史を超えた。当時日本隊のマナスル峰初登頂を機に登山ブームが起き、遭難の多発、自然破壊、登山マナーの低下等が社会問題化した。長山協は、登山課題全般に対応しリードするセンターの設立を県に提案し、設立をみた。そして、運営審議会の一員として専門的な意見を具申し、年間を通じて多数の実技講師をセンターの研修講座に派遣してきた。

平成24年度から、長山協はセンターの指定管理者となり、直接運営に携わり現在3期目に入っている。センター創立の原点を忘れず運営していくことが責務と言えるだろう。

◆長山協創立50周年記念事業◆

平成23年、長山協は創立50周年を迎えた。一年間かけて、活動の歴史を総まとめするとともに、今後の展望を開くため、次のような多様な記念事業を総力をあげて行った。

- ・県内50山の加盟団体による一斉登山と報告
- ・50年記念誌の発行（A4版、233ページ）
- ・海外トレッキング隊の派遣（チベット、四川省、ブータンの3地区へ 合計41名参加）
- ・崑崙山脈へ登山隊を派遣（ヤズィックアグル峰6770m）

に初登頂)

- ・海外友好団体との交流（訪中友好・長白山登山、ネパール山岳協会・西藏登山協会招待）
- ・50周年記念クライミング大会の主催（J F A日本選手権、視覚障害者日本選手権）
- ・山岳図書資料館の建設（大町市と協力して）
- ・安全登山体験集の発行（『失敗、アクシデント事例集』）
- ・長山協Tシャツの作成と販売
- ・記念祝賀会の開催（11月12日長野市内のホテルで、各界200名の出席）

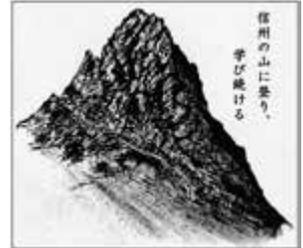
◆技術向上、会員交流などの事業◆

長山協の毎年の恒例事業として、次のようなことを企画し行っている。夏山登山教室、小川山キャンプ、ウィンターミーティング、ジュニア登山教室、指導者研修会等を企画・募集。

今後に向けて

創立以来60年を迎え、組織の強化、活動の活性化、各種事業の取り組み強化、加盟団体及び協会員のコミュニケーション強化等々の問題が顕在化してきている。令和2年からワーキンググループを作り、①情報発信の強化、②協会活動の洗い直しと新会員獲得推進、③二巡目の長野国体対応等を、集中的に検討している。

また、全国組織に合わせたクライミングを入れた団体名の変更や法人化移行問題も、検討課題に挙がっている。『信州の山に登り、学び続ける』をモットーに、がんばっていききたい。



長山協創立50周年
記念式典案内書から

長野県アーチェリー協会

当協会は県内に幾つか有った同好会やクラブの有志が話し合いを持ち長野県を代表する競技団体として昭和47年4月22日に発足しました。

翌昭和48年10月に長野県体育協会に加盟が認められ現在に至ります。

競技会については昭和48年11月4日に松本市梓運動公園で第一回長野県選手権大会が開催されました。それ以降現在では信州スカイパーク陸上競技場を中心に4月から10月の毎月一回の月例県大会と年一回の選手権大会、坂城町の体育館を中心に11月から2月まで月一回の室内県大会、中野市の牧の入フィールドアーチェリーコースを使用し年5回のフィールドアーチェリー記録会を実施しています。



アウトドア月例県大会



フィールド記録会



室内県大会

国民体育大会については昭和53年の長野国体では南箕輪村大芝高原多目的広場で初めてアーチェリーが公開競技として開催され、昭和55年の栃木国体からアーチェリーが正式競技として開催されるようになりました。

その後の国民体育大会において当協会の成績は必ずしも良いとは言えませんが、今世紀に入ると長年にわたる普及や強化活動の成果が出てきたのか上位入賞で

きるようになってきました。

これは選手の頑張りはもちろんですが、練習できる専用の場所が皆無だった協会発足当時と比べ、現在数か所にある専用練習場の開設にかかわった個人やクラブの先輩方のご尽力の賜物といっても過言ではないと思います。



やまびこ国体での記念写真



国体での上位入賞

長野県銃剣道連盟

昭和55年国民体育大会正式競技に採用された銃剣道、長野県銃剣道少年チーム北信越国体初優勝、第44回国民体育大会（北海道倶知安町）初参加を果たす。

平成元年北信越国民体育大会 銃剣道少年男子優勝

監督 井口 喜八 6段
 先鋒 手塚 佳徳 2段
 中堅 百瀬 典昭 2段
 大将 熊谷 敦徳 2段

創立40周年記念 第4回全日本銃剣道選手権大会

平成8年8月9日 日本武道館

長野県代表選手教士7段 松田千真男 第3位入賞



2000年国民体育大会銃剣道競技に参加し、連盟の悲願である入賞を果たす。

第55回国民体育大会銃剣道競技が10月14日～16日の間、富山県山田村に227名の総勢が集結。

成年男子優勝 富山県、第3位 石川県、第7位 長野県と北信越選手飛躍の大会となった。

平成12年富山国体銃剣道競技 第7位入賞



監督 望月 尊 教士7段
 先鋒 田中 正樹 5段
 中堅 松田千真男 教士7段
 大将 長谷川三男 教士7段



(主催：一般財団法人全国老人福祉助成会)

全日本高齢者武道大会（銃剣道の部）が平成17年7月6日、日本武道館で行われ塩尻の井口喜八教士8段が2度目の総合優勝に輝いた。

- 平成13年 B組 総合優勝 平成14年 準優勝
- 平成16年 第3位 平成19年 第3位
- 平成21年 準優勝 平成22年 第3位
- 平成23年 第3位 平成23年 準優勝
- 平成26年 A組 優勝

第14回全日本短剣道大会が平成27年2月21日、日本武道館で開催、長野県から短剣道教士7段松田千真男選手と短剣道3段林田信仁選手二名が参加。

個人戦C組に松田選手 第3位入賞

短剣道は全日本銃剣道連盟主催事業で長野県選手の大会参加は久しぶりとなりました。



令和元年全日本少年少女錬成大会が7月31日、日本武道館で開催、小学生の長野県選手が挑戦し、僅かの差で決勝トーナメント進出を逃しましたが大健闘。

- 監督 林田信仁 6段 西田知恵子 酒井みゆき
- 選手 飯島小学校 4年 林田啓汰 酒井柚輝
- 飯島小学校 2年 林田茉桜 酒井陽稀
- 西山 樹



わが国固有の伝統と文化により一層触れることを目的に中学校における武道授業必修化が平成24年から開始されました。中学校における銃剣道授業は現代武道の一員として重要視しています。

2020年度武道等指導充実・資質向上支援事業（多様な武道）を支援しました。



令和2年11月17日中野市立南宮中学校武道（銃剣道）指導



令和2年11月18、19日 松本市立開成中学校武道（銃剣道）指導

特定非営利活動法人 長野県クレール射撃協会

1. 協会概要

昭和21年の発足以来、第6回大会（昭和26年・広島）での入賞を皮切りに、第33回長野国体（昭和53年）での健闘から40年余り、第74回大会（令和元年・茨城）においてクレール射撃競技総合1位を獲得するに至った。

長い道のりではあったものの常に上位入賞を目指し、一貫して競技力の向上に心血を注いだ選手と指導者の功績もさることながら、長年にわたりクレール射撃競技の普及促進活動も並行して実施し、協会発足当初から長野県選手権を毎年開催して一般シューターにも射撃競技の魅力や技術指導等、情報発信と体験の場を提供してきた。

平成23年には法人化してNPOの認可を取得し、組織の透明化と指導体制の整備、誰もが安心して競技に参加できる組織運営を通じて、地域社会に貢献できるスポーツ団体として新たなスタートを切った。

平成29年からは一般シューターからの国体参加への門戸を広げ、同時に次世代を担う有望な潜在選手発掘の場として長野県国体予選会を開催し、女子選手も含め多くの選手が新たに加わり実績を積み重ねている。

こうした取り組みを踏まえ、二巡目長野国体に向けて分厚い選手層を構築し、選手各々のブラッシュアップと分析、より細分化した指導体制の確立と、指導員・審判員等の支援体制の拡充も併せて実施し、継続して上位入賞可能なチーム作りに邁進していく。

2. 国民体育大会競技成績

平成2年第45回大会・福岡

スキート競技 団体3位

平成3年第46回大会・石川

トラップ競技 団体3位

スキート競技 個人2位 布野兼一

平成6年第49回大会・愛知

トラップ競技 個人8位

平成8年第51回大会・広島

トラップ競技 団体8位

平成14年第57回大会・高知

トラップ競技 団体3位

トラップ競技 個人2位

スキー地競技 団体5位

平成15年第58回大会・静岡

スキート競技 団体5位



平成16年第59回大会・埼玉

トラップ競技 個人3位

平成17年第60回大会・岡山

スキート競技 個人6位

平成18年第61回大会・兵庫

スキート競技 団体5位

スキート競技 個人5位 布野康介

平成20年第63回大会・大分

トラップ競技 団体7位

スキート競技 個人7位 布野兼一

平成21年第64回大会・新潟

スキート競技 団体5位

スキート競技 個人4位 塚田政光

平成22年第65回大会・千葉

トラップ競技 団体4位

トラップ競技 個人3位 大内智喜

トラップ競技 個人6位

スキート競技 個人8位 塚田政光

平成23年第66回大会・山口
 トラップ競技 個人8位 大内智喜

平成25年第68回大会・東京
 総合成績 2位 長野県
 トラップ競技 団体1位
 トラップ競技 個人1位
 スキー競技 個人8位 布野康介

平成26年第69回大会・長崎
 スキー競技 団体7位
 スキー競技 個人8位 布野康介

平成28年第71回大会・岩手
 トラップ競技 団体7位

令和元年第74回大会・茨城
 総合成績 1位 長野県
 トラップ競技 団体1位
 トラップ競技 個人4位 大内智喜
 スキー競技 団体6位
 スキー競技 個人5位 清水裕

長野県なぎなた連盟

昭和30年5月に全日本なぎなた連盟が設立されて以降、長野県内でもなぎなた講習会を開催するなどの取り組みが盛んになり、昭和44年4月に長野県なぎなた連盟が結成されました。令和元年には50周年を迎えました。

<沿革：昭和63年～令和3年3月>

昭和63年 国民体育大会成年女子2部制となり、北信越国体なぎなた競技始まる（平成7年まで続く）

平成元年 久保るい氏 長野県体育協会よりスポーツ功績者表彰 有功章受賞
 第44回はまなす国体（北海道）少年の部試合8位入賞（監督：丸山紋子 選手：西村英子・林祐子・丸山佳世）

平成2年 長野県なぎなた連盟第四代会長に神澤邦雄氏就任
 第1回長野県高校大会（坂城町村上小学校体育館）
 布施芳子氏 松本市体育協会特別功労賞受賞

平成5年 第48回四国国体（香川県）成年1部演技競技7位入賞（監督：森本美佐子 選手：滝沢千枝子・高野由紀）
 坂城町スポーツ少年団なぎなた部 日本武道協議会より少年少女武道優良団体賞受賞
 茅野教室開設（指導者：山本 政子先生）

平成6年 第35回リハーサル大会 演技競技6位入賞（監督：山本政子 選手：滝沢千枝子・高野由紀）
 第49回わかしゃち国体（愛知県）成年2部演技競技6位入賞（監督：森本美佐子 選手：西村英子・丸山佳世）
 長野県なぎなた連盟25周年大会（松本市西部体育館）
 布施芳子氏 長野県スポーツ少年団育成指

導表彰受賞

平成7年 第3回北信越中学生大会（三郷村文化公園体育館）
 ジュニアオリンピック全国中学生大会 4位入賞（選手：三村誓子・松本朋子・青木洋美）
 久保るい氏 勲七等宝冠章受賞
 久保るい氏、布施芳子氏、笠原房子氏 全日本設立40周年記念の功労賞受賞

平成8年 第1回北信越選手権大会（松本市運動公園体育館）演技競技優勝（滝沢千枝子・高野由紀）
 久保るい氏 文部大臣より功績賞受賞
 布施芳子氏 長野県体育協会よりスポーツ功績者表彰 有功章受賞

平成9年 県高体連へ加盟
 高校対抗大会出場（6校 大阪体育館）
 長野県剣道なぎなた大会 2位入賞

平成10年 インターハイ正式種目となる
 全日本と文部省主催による学校体育なぎなた指導者講習会（松本市総合体育館）
 長野冬季オリンピックイベントに田川教室が参加
 坂城スポーツ少年団なぎなた部 長野県体育協会より優良団体賞受賞

平成11年 長野県なぎなた連盟設立30周年記念大会（松本市本郷体育館）
 第54回熊本国体 成年演技競技6位入賞（監督：森本美佐子 選手：中村仁美・齋藤明理）

平成12年 第8回北信越中学生大会（松本市里山辺体育館）演技競技優勝（選手：竹内希・竹内秋奈）
 山内輝子氏 長野県体育協会よりスポーツ振興功績者表彰 有功章受賞

	第4回エンジョイなぎなた大会（兵庫県） 男子40歳以上の部2位（選手：沖山雄児）		田川教室 日本武道協議会より少年少女武道優良団体表彰受賞
平成13年	布施芳子氏 長野県教育委員会より社会体育功労賞受賞 布施芳子氏 日本体育協会よりスポーツ指導員普及振興貢献表彰受賞 第9回北信越高等学校体育大会（戸倉町総合体育館） 第6回北信越選手権大会（坂城町文化センター）男子個人優勝（木村隆一） 第14回ねりんピック大会（広島県）演技競技2位入賞（監督：笠原房子 選手：浅輪彰子・宮尾智香子）	平成19年	第12回北信越なぎなた大会 団体戦3位入賞（戸田千恵・二木美也子・飯森美江子） 第15回北信越高等学校体育大会（松本市総合体育館サブアリーナ） 浅輪彰子氏 長野県体育協会60周年記念表彰受賞
平成14年	長野県なぎなた連盟第五代会長に佐藤浩市氏就任 第10回全国中学生大会（宮城県）演技6位入賞（伊勢谷明奈・戸田千恵） 布施芳子氏 範土称号受称 笠原房子氏 長野県体育協会よりスポーツ振興功績者表彰 有功章受賞	平成20年	北信越中学生大会 男子個人3位（深澤広幸） 全国中学生大会 男子個人4位（中野亮太） 大町教室開設（指導者：浅輪彰子先生） 国民体育大会なぎなた少年女子試合の部、ブロック大会による出場権獲得制度始まる
平成15年	第16回ねりんピック大会（徳島県）演技競技2位入賞（監督：滝沢一子 選手：浅輪彰子・宮尾智香子） 日本体育協会主催 B級スポーツ指導員養成事業行う 笠原房子氏 長野県教育委員会より社会体育功労賞受賞	平成21年	長野県なぎなた連盟設立40周年記念大会（松本市立田川小学校体育館）
平成16年	第17回ねりんピック大会（群馬県）演技競技3位入賞（監督：滝沢一子 選手：浅輪彰子・宮尾智香子）	平成22年	佐藤浩市県連盟会長が全日本なぎなた連盟副会長に就任 第18回北信越中学生大会（松本市総合体育館サブアリーナ）
平成17年	第46回都道府県対抗大会 演技競技6位入賞（監督：浅輪彰子 選手：我山千枝子・滝沢幸子） 第13回北信越中学生大会（松本市里山辺体育館）団体戦2位入賞（山口慧子・野田愛美・古田奈穂） 滝沢幸子氏 高等学校体育連盟体育専門委員長就任	平成24年	佐藤浩市県連盟会長が全日本なぎなた連盟会長に就任 第20回北信越高等学校体育大会（松本市庄内体育館） 第52回東日本大会（松本市総合体育館） 選手強化3カ年計画開始 県連盟会長 佐藤浩市氏 長野県体育協会よりスポーツ振興功績者表彰 有功章受賞
平成17年	浅輪彰子氏 日本体育協会より日本スポーツ少年団指導員顕彰受賞	平成25年	北信越国体 少年女子試合2位入賞し、本国体出場権を獲得
平成18年	上田自由塾開設（指導者：柳澤喜美子先生） 布施芳子氏 文部科学省より生涯スポーツ功労者表彰受賞 第11回北信越選手権大会（松本市総合体育館サブアリーナ）演技競技女子3位（二木美也子・落合仁美）、演技競技男子3位（沖山雄児・五島翔太）、試合男子競技個人3位（木村隆一） 第19回ねりんピック大会（静岡県）演技競技3位入賞（監督：松田晴代 選手：浅輪彰子・原富子）	平成26年	北信越国体 少年女子試合2位入賞し、本国体出場権を獲得
		平成27年	第23回北信越中学生大会（安曇野市穂高総合体育館） 森本美佐子氏 長野県体育協会よりスポーツ振興功績者表彰 有功章受賞
		平成28年	幸村杯 全国女子なぎなた大会 全国高等学校男子なぎなた選手権大会始まる 柳澤喜美子氏 長野県体育協会よりスポーツ振興功績者表彰 有功章受賞
		平成29年	第25回北信越高等学校体育大会（松本市波田体育館） スポーツ指導員養成講習会開催 参加者10名
		平成30年	全日本なぎなた連盟第1種・第2種公認審判員養成講習会（松本市庄内体育館・松本市総合体育館）
		令和元年	長野県なぎなた連盟設立50周年記念大会（松本市庄内体育館）、祝賀会（ホテルモンターニュ松本）
		令和2年	授業協力者養成講習会（松本市庄内体育館）

歴代会長

初代	夏目録郎	昭和43年～昭和50年
2代	久保るい	昭和50年～昭和54年
3代	水口米雄	昭和56年～平成2年
4代	神澤邦雄	平成2年～平成14年
5代	佐藤浩市	平成14年～現在



長野県空手道連盟

このたび、長野県スポーツ協会が創立75周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

貴協会が設立以来75年の長きにわたり、長野県におけるスポーツ振興と健康増進にご尽力されてこられたことに、深く感謝申し上げます。

1. 沿革

- ・昭44年11月－県連結成に向けた話し合い
- ・昭45年2月－第1回準備会開催
満場一致で県連結成決定
- ・同年6月27日－全国36番目の県連として全空連より認可
- ・同年8月－第1回関東甲信越大会の出場
- ・昭46年7月－第1回長野県大会開催
- ・昭50～53年－長野県大会4年間中断
- ・昭50年4月－日本空手協会長野県本部の県連脱退
- ・昭56年3月－「長野県空手道連合」が誕生
正式に県体協加盟が認可
- ・昭57年－「長野県空手連合」は発展的解消
長野県空手道連盟再出発
競技力向上委員会が設置
事務局長…伊藤 仁 就任
「県高校空手道連絡会」結成
- ・昭58年－第1回県高等学校空手道選手権大会開催
- ・同年8月－第10回全国高校空手道選手権大会出場
- ・昭60年－審査指導委員会設置
長野県高体連に正式加盟承認
- ・昭61年－三村由紀選手(当時深志高校) 高校総体3位入賞
- ・昭62年－三村選手 高校総体準優勝、選抜大会優勝の快挙
- ・昭63年－三村選手 高校総体優勝
- ・同年10月－三村選手 世界大会(カイロ)で優勝
- ・平2年－県連分裂し、約半数が県連退会
- ・平5年－県体協主催国体予選が二度開催
- ・平7年－審判委員会設置
理事長…根橋 寛先生 就任

脱会協会会員の県連復帰

- ・平8年－「長野県中学校空手道連盟」結成
第1回県中学生空手道選手権大会開催
現在26回を数える
- ・平15年－医科学委員会設置
- ・平21年－稲葉会長 旭日双光章受賞
- ・平24年－広報普及委員会設置
武道必修化
- ・平31年－事業員会・倫理委員会設置
- ・令3年－名誉会長…稲葉恒幸 就任
新会長…根橋 寛 就任
新理事長…伊藤 仁 就任

2. あゆみ

■樋口大樹選手(現山梨日本航空学園高校教諭)

平成12年富山国体成年男子組手中量級優勝

平成14年全日本空手道選手権大会男子組手準優勝

三村由紀選手が形で長野県を牽引してきたのに対し、組手において長野県を牽引したのが樋口選手である。日本体育大学に入学後、メキメキと頭角を現し、全日本3位入賞2回、準優勝1回、国体中量級優勝と、輝かしい成績を残した他、アジア大会オープンでも準優勝、メキシコ世界大会に出場も果たした。現在は、山梨航空学園高校空手道部の監督として全国優勝を果たす名監督であると同時にナショナルチームのコーチとしても活躍中である。

■平成20年度全国高等学校空手道選抜大会開催

大会実行委員長根橋寛、審判長新井悟(現松本第一高校)、競技委員長中澤健一(当時屋代東高校)の県高体連空手道専門部が中心となって長野市ホワイトリンクで開催された。長野冬季五輪のフィギュアスケート競技の会場での開催とあって全国から注目を集め、高校生の熱戦が繰り広げられる中、男子団体形に出場した松商学園高校が見事に3位入賞を果たし、長野開催に花を添えた。

■杉野拓海選手(飯田長姫高校出身)

パリ世界空手道選手権大会団体形優勝(平成24年)

全日本空手道選手権大会第3位6回、準優勝1回

パリで開催された世界大会団体形決勝戦では、前回王者イタリアを相手とした。演武が始まると場内は静まりかえり、大技が決まると割れんばかりの拍手と歓声に湧き、圧倒的な力の差を見せつけて優勝を果たした。

■平成25年度第21回全国中学生空手道選抜大会開催

根橋寛大会実行委員長、伊藤仁大会準備委員長を中心に長野市ビッグハットにて開催された全中大会は、これまでの大会の常識を覆すような過去に例をみない大会であった。選手たちの活躍の様子はオーロラビジョンに映し出され、世界大会に出場しているかと思わせるような、選手一人ひとりの記憶に残る大会となった。また、この大会では女子個人形で宇海水稀選手（当時大町市立第一中）、また、女子個人組手で林風花選手（当時塩尻市立広陵中）、この2人がダブル優勝を果たし、大会成功をより感動的なものとした。さらに、宇海選手は山梨日本航空高校に進学した後、女子個人形でインターハイ3連覇、国体2連覇を果たし、帝京大学進学後は、全日本学生空手道選手権大会、世界ジュニア&カデットU21でも優勝を果たしている。

■石原優選手（当時松本第一高校）

第69回長崎国体少年女子形優勝（平成26年）

全国の強豪選手を破って迎えた決勝戦では、地元長野県の選手との戦いであった。単に選手との戦いだけではなく、地元選手を応援する観客との戦いでもあったが、落ち着いた演武で相手選手を圧倒しての完勝であった。

■田中美佐稀選手（池田町出身）

第10回世界大学空手道選手権大会個人女子形優勝

平成29年愛媛国体成年女子形優勝

2016年、ポルトガルのプラガで開催された世界大学空手道選手権大会女子個人形で優勝した田中選手は、小学校1年生の時に全日本少年少女空手道選手権大会に出場して以来、努力を重ね続けた結果での優勝であった。また、社会人として出場した愛媛国体でも見事優勝を飾り、日本を代表する選手の一人に成長した。

■第13回彩の国全国中学生選抜大会女子総合優勝

2019年3月埼玉県立武道館で開催された全中選抜大会女子個人組手に出場した金森奈央選手（当時松本市立清水中）・加瀬玲選手（当時長野日大中）・江尻ふみ選手（当時茅野市立北部中）の3名が1・2・3位を独占すると

いう快挙を成し遂げた。県の強化練習でともに汗を流してきた3名が表彰台に並ぶ姿は圧巻であった。また、女子個人形では相川流璃選手（当時大町市立仁科台中）が5位入賞を果たしており、長野県女子中学生が一丸となってつかみ取った総合優勝といえる。

■第15回彩の国全国中学生選抜大会長野県開催

令和3年2月、埼玉県から彩の国杯開催キャンセルの電話からこの代替大会は動き出した。開催まで1ヶ月ほどしかないこの大会を、主管は埼玉県連が、会場の提供・設営とコート係を含む一部のお手伝いを長野県連が行う共同開催となった。3月28日～30日の3日間の大会の舞台となった長野県立武道館（令和2年3月竣工）は、現理事長の伊藤仁が県立武道館建設アドバイザーとして就任し、様々なアイデアが詰め込まれ他県には見られない素晴らしい施設である。大会中は施設の機能をフルに活用して、4コートすべてに2台のモニターを配置し得点を表示。また、全試合YouTube配信を行った。Wi-Fi環境が整っていたからこそ問題なく実現できたことにほかならない。しかし、忘れてはならないのはマンパワーである。1ヶ月という短期間のなかで準備を整え開催にいたることができたのも、長野県連の先生方をはじめ保護者の方々、そして埼玉県連の先生方のすべての力が結集したからこそである。そして何より嬉しかったのは、中止になってもおかしくなかったこの大会に出場することができた選手の笑顔が見られたことであった。この大会の経験を生かして令和9年の国体では、最高の大会ができるよう、気持ちを新たにすることは言うまでもない。（文責 鈴木達三事務局長）



2021/3/30 第15回全国中学生空手道選抜代替大会
長野県立武道館（佐久市）

長野県ボウリング連盟

長野県ボウリング連盟は、昭和41年県内のボウリング愛好者により、スポーツボウリングを目標として、長野県ボウリング連盟の前身である「長野県ボウリング協会」（通称NBA）が組織され、松本市に事務局を置き、初代会長には衆議院議員増田甲子七が就任した。昭和50年、組織の再編成を行ない、名称も「長野県ボウリング連盟」

とし、県内スポーツボウリングの統括団体として正式に設立、松本、長野、大町、塩尻、諏訪の5支部、会員は約400名であった。

その後、ボウリング場が増加するにつれ会員数も急激に増えたが、ボウリング熱が冷め全国的にボウリング離れが始まりボウリング場が閉鎖・縮小されたことにより

会員数も減少し、昭和55年には、ついに会員数も50名を割り、県連としての活動が困難になった。

昭和58年、全日本ボウリング協会（JBC）が日本体育協会に加盟承認され、スポーツとしてのボウリングの定着と大衆スポーツとしての評価が高まり、レジャーボウリングからスポーツとしての位置付けが明確になったことにより、県内のボウリング界も新しい時代へと入った。

昭和59年、長野県体育協会へ加盟申請、昭和60年3月26日、県体協昭和59年度第3回評議員会で加盟承認された。長野支部、佐久支部が4月に、駒ヶ根支部が8月に結成され、松本支部、諏訪支部と合わせて5支部となり、会員数200余名に増加した。

平成5年、新飯田オークラブボウルがJBC公認競技場となり、飯田支部が結成したが、駒ヶ根支部が、駒ヶ根グランドボウルが公認競技場を見送ったことや会員数の減少により解散した。平成9年5月に諏訪市の高島パークレーンが閉鎖されたが、7月12日に軽井沢プリンスボウルがショッピングプラザ内に、9月26日にスポーツ岡谷が岡谷市のイルファミュージメントプラザ内に開場、平成10年に軽井沢支部が、翌年の平成11年に岡谷支部が結成された。飯田支部は、新飯田オークラブボウルが公認協の更新を見送ったため、支部活動を平成9年頃から休止していたが、会員数の減少もあり平成12年に解散、軽井沢支部も会員数の減少により同年解散している。

平成23年、上田市の東信ボウリングセンターが閉鎖となり、上田支部は、佐久プラザボウルに活動の拠点を移し、平成27年、佐久支部と合併して東信支部を結成、その傘下に佐久クラブと上田クラブが組織し現在に至っている。平成26年には全国規模の大会が開催可能な60レーンを有するヤングファラオが公認協更新を見送り、長野県での全国大会開催が困難となった。平成27年、長野支部の活動拠点をスポーツピカデリーに移す。平成28年2月28日、諏訪市のニューハイボウリング諏訪が突然閉鎖となり、第27回北信越国体ボウリング競技の会場を松本市のアピナボウル松本城山店に変更した。また、諏訪支部は、活動拠点をスポーツ岡谷に移し、平成29年、支部を解散して岡谷支部に統合した。同年4月、ラウンドワ



ンスタジアム長野店が公認協に、8月にヤングファラオが営業を再開、スポーツピカデリーが建物耐震化困難で閉鎖と、目まぐるしい年となった。

令和元年8月1日、ニューハイボウリング諏訪がリニューアルし、COCOLON諏訪店として営業開始となり、令和2年、COCOLON諏訪クラブが発足、令和3年より諏訪支部が再結成し現在に至っている。令和3年4月1日現在のJBC公認競技場は、アピナボウル松本城山店、ヤングファラオ、佐久プラザボウル、軽井沢プリンスボウル、スポーツ岡谷、ラウンドワンスタジアム長野店、COCOLON諏訪店の7センター246レーンである。

長野県での全国大会は、長野オリンピック期間中の平成10年2月11日、IOCファミリーボウリングトーナメントが長野市のヤングファラオで開催され、サマランチIOC会長ら委員60名が参加、ボウリング競技のオリンピック参加を大いにアピールした。平成12年には、第20回東日本シニア選手権大会が、平成13年、第34回全日本シニア選手権大会が全国各地からシニアボウラーが500名を超える人数で参加し、長野市のヤングファラオで開催した。令和元年10月25日～27日、第52回全日本新人選手権大会は、東日本豪雨により千曲川が氾濫し浸水被害が発生する中、会場のヤングファラオ様始め関係各位のご尽力により開催、大会期間中、災害義援金の募集を行った。

ジュニア育成は、平成15年、長野県体育協会の指導のもと、「長野ジュニアクラブ」を創設、ジュニア選手の発掘・育成・強化を行なっている。平成22年には、第1回長野県小学生指導会、競技大会を諏訪市のニューハイボウリング諏訪で開催し、ジュニア層の充実・強化を図ってきている。また、平成24年に、長野県ボウリング連盟強化選手制度を創設した。平成30年12月15日、アピナボウル松本城山店でNAGANOスポーツ☆キラキラっ子育成プロジェクト「ボウリング」が、令和2年11月27日、COCOLON諏訪店で同プロジェクト「ボウリング体験会」が（公財）長野県スポーツ協会主催で開催されている。

国体では、公開競技として初参加した第42回沖縄国体では、全種別がブロック大会を勝ち抜き2種目で入賞、正式競技となった第43回京都国体では、成年男子が3種目で入賞、第44回北海道国体から第69回長崎国体までブロック大会で出場権を獲得し、各種別・種目で優勝2回、準優勝8回など全39回の入賞を果たしている。全国大会においても、個人種目・団体種目・男女を問わず多くの優勝者を輩出してきている。

組織と役員

(1) 組織

長野県ボウリング連盟は、松本、諏訪、岡谷、長野、東信の5支部6クラブにより組織されており、役員組織は、会長に上條義光、副会長に中村隆文と片倉光子、理事長（事務局長兼務）に川上秀樹、副理事長に小林克、両角英樹、加藤勇雄、ほか理事15名、監事2名、顧問・相談役3名からなっている。

本連盟の専門委員会に、総務委員会・競技委員会・競技力向上委員会・女性委員会・組織強化対策委員会・資格審査委員会の6委員会を設置、連盟運営を行なっている。

組織のガバナンス確保として、平成13年、連盟規約から長野県ボウリング連盟定款と会員登録規程を制定、役員等の倫理規程など組織運営に必要な規程・内規の整備を進めてきている。

令和3年4月1日現在の会員数は、松本支部33名、諏訪支部30名、岡谷支部32名、長野支部10名、東信支部19名計128名となっている。

(2) 役員

○会長

増田甲子七 昭和41年～昭和51年3月
 島津 昭 昭和58年9月～昭和62年3月
 小林 武文 昭和62年4月～平成3年3月
 小川 元 平成3年4月～平成13年3月
 桑原 宣彦 平成13年4月～平成15年3月

三木 敏 平成15年4月～平成18年3月
 高木 昭好 平成18年4月～平成25年3月
 上條 義光 平成26年4月～現在

○副会長

藤森 弘一 昭和58年9月～昭和62年3月
 川上一太郎 昭和62年4月～平成3年3月
 藤森 弘敏 平成3年4月～平成13年3月
 桑原 宣彦 平成10年4月～平成13年3月
 高木 昭好 平成13年4月～平成18年3月
 中村 隆文 平成14年4月～現在
 池田 正幸 平成25年4月～2019年3月
 三浦 靖 平成29年4月～平成30年1月(逝去)
 片倉 光子 2019年4月～現在

○理事長

竹内 義行 昭和52年9月～昭和58年3月
 早出 祥幸 昭和58年4月～昭和60年3月
 小林 武文 昭和60年4月～昭和62年3月
 川島 誠一 昭和62年4月～平成5年3月
 佐藤 茂雄 平成5年4月～平成10年3月
 三木 敏 平成10年4月～平成15年3月
 川上 秀樹 平成15年4月～現在

○事務局長

藤森 弘敏 昭和54年4月～昭和58年8月
 五味 茂 昭和58年9月～昭和60年3月
 川上 秀樹 昭和60年4月～現在

長野県少林寺拳法連盟

1 少林寺拳法とは

少林寺拳法は1947（昭和22）年、日本において宗道臣（そうどうしん）が創始した“人づくりの行”である。自分の身体（からだ）と心を養いながら、他人と共に助け合い、幸せに生きることを説く「教え」と、自身の成長を実感し、パートナーと共に上達を楽しむ「技法」、そして、その教えと技法を遊離させず、相乗的なスパイラルとして機能させる「教育システム」が一体となっている。

少林寺拳法は、自分の可能性を信じて自分を高め続けられる人、周囲の人々と協力して物心両面にわたって豊かな社会を築くために行動できる人を育てている。

2 少林寺拳法の創始の動機と目的

少林寺拳法の創始者である宗道臣は、戦後の混乱のさなか、自身の体験から、リーダーの質によって、集団や社会の方向性が大きく変わるという真理を悟った。そし



て、リーダーシップとは、自信と勇気と正義感、行動力に根ざすものであると定義付けた。人が平和で豊かに生きてゆくために、正しいリーダーシップを發揮できる人間を一人でも多く育てようという“人づくり”の志を抱いた宗道臣は、敗戦直後の混乱で自己を見失いような若者たちに、人として豊かに生きるべき道を説くとともに、身体を鍛え自信を得るのに有効な技法を教え始めました。



修練の中で、道を説いて誇りや信念を引き出し、人が生まれながらに持つ成長の可能性を実感させ、自信と勇気と行動力を併せ持つ、社会に役立つ人を育てようと少林寺拳法を創始した。

3 少林寺拳法の沿革

1947年（昭和22年）10月、日本の香川県多度津町の自宅で、宗道臣は教えと技法と教育システムを兼ね備えた「人づくりの行」として、少林寺拳法を創始した。

1952年（昭和27年）、後の学校法人禅林学園の前身となる禅林学院が、少林寺拳法指導者の養成機関として、開設される。

1963年（昭和38年）、香川県認可の社団法人日本少林寺拳法連盟を設立。

1991年（平成3年）、社団法人日本少林寺拳法連盟（現・一般財団法人少林寺拳法連盟）を発展的に解散し、全国法人の財団法人少林寺拳法連盟を設立。

2011年（平成23年）、一般財団法人に移行して、学校・職域などで少林寺拳法のクラブ活動を展開している。

2020年（令和2年）1月現在、世界39か国に少林寺拳法が普及している。

4 長野県における少林寺拳法の歴史

(1) 伊那道院設立

長野県で初めて少林寺拳法の道場が誕生したのは、1969年（昭和44年）、小池靖彦が設立した伊那道院・支部が第一号である。柔道出身の小池は大学で少林寺拳法に出逢い、その後、銀座道院でも修業したのち、郷里の伊那市で道場を開いた。当初は材木店の倉庫を借り、わずか6人のスタートではあったが、小池の「長野県に少林寺拳法の明かりを灯もしたい」との熱い志により門下生を増やし、県内の拠点に次々と道場を設立していった。

(2) 県都長野市へ

小池は伊那道院設立の後、1975年（昭和50年）に県都長野市に長野中部道院を設立した。当時は少林寺拳法の知名度も無く、現在の少林寺拳法を取り巻く状況と比べると、地域に認められるまでの働き掛けは、想像し難い苦勞であった。また当時は伊那市～長野市間に高速道路が無く、片道4時間半を掛けて指導に通うなど、開祖の「長野県を頼むぞ」の一言が小池の少林寺拳法に対する情熱を駆り立てていた。

(3) 道院設立の活発化

この頃から、県外支部や大学支部等で修業した拳士が帰郷し、道場設立の動きが活発化した。長野中部道院設立の5ヶ月後、1975年（昭和50年）に、豊島道院出身の大須賀庸子（旧姓、細川）が日本初の女性道院長となり上田道院を設立、1976年（昭和51年）には宮本繁が長野更埴道院、1977年（昭和52年）村澤紀夫が須坂中部道院（廃止）、1980年（昭和55年）北原実が諏訪至誠館道院（休院）を相次いで設立している。また大学支部にあっては、1971年（昭和46年）信州大学、1973年（昭和48年）松本歯科大学（廃止）、がそれぞれ少林寺拳法部として活動が開始された。

(4) 長野県少林寺拳法連絡協議会の発足

長野県少林寺拳法連絡協議会は、伊那・長野中部・

上田・長野更埴・信州大学・松本歯科大学の6支部で1976年（昭和51年）頃に組織化された。当時は関東武専や各種行事が関東連合会に集中していたため、対外的な連絡窓口として設置された。また、県内にあっては支部相互の連絡を密にすることで、普及活動の活性化を図るねらいもあり、組織拡大のためにより多くの同志を募ろうと、全拳士の気迫がみなぎっていた。そしてこの時に、少林寺拳法の良き理解者である下条進一郎（参議院議員）を会長に迎え、強力な支援者になっていただいた。

(5) 長野県少林寺拳法連盟の発足

長野県少林寺拳法連絡協議会を5年経過したところで、連盟への移行の機運が高まり、1981年（昭和56年）4月に（社）日本少林寺拳法連盟（当時）所属の支部により、長野県少林寺拳法連盟が正式に発足した。

その後、1987年（昭和62年）に長野県少林寺拳法連盟として（財）長野県体育協会（当時）に加盟した。

(6) 県内全域への発展とブロックの設置

北信、東信、中信、南信の4つに分かれる長野県の地区において、1箇所ずつ支部が設立されていたが、徐々に数が増え長野県全域に発展したため、各地区をブロックとしブロック長をおいた。

長野県少林寺拳法連盟の基盤を造ったのは、連絡協議会発足時から理事長職にあった小池靖彦（現顧問）であり、補佐役は宮本繁（現相談役）が副理事長を務め、事務の円滑化と財政健全化のため事務局と財務局を設け、佐々木祥二（現会長）が兼務した。

5 長野県少林寺拳法連盟の取組み

(1) 組織

現在の長野県少林寺拳法連盟の組織は、会長1名、副会長1名、顧問4名、と執行部では理事長1名、副理事長1名、事務局長1名、会計局長1名、理事4名で運営されている。この他に審判委員会、考試委員会、技術力強化委員会等、様々な角度から県内各支部の運営をサポートしている。

また、2021年（令和3年）には、長野県少林寺拳法連盟のホームページを一新し、新たな拳士獲得に取り組んでいる。

(2) 武専

武専とは、少林寺拳法の指導者を育てるための養成機関として開校された。月1回松本市に集まり、午前中学校講義、午後実技講義を行い、制度改正があり形態は変わったが、入学から卒業まで11年間を要する学校であった。

現在、正規の講義が終了後、「部活」と称して、錫杖や独鈷等の武器を扱う「法器」部や、整体師の先生による「圧法・整法」部が活動している。

(3) 各種講習会

長野県少林寺拳法連盟主催の圧法・整法技術講習会は、2008年（平成20年）から香川県より加藤義秋先生

をお招きして毎年行われた。国内第一人者である加藤先生の講習会は、県内外から多数の受講者を集め行われたが、加藤先生の逝去により、2020年からは長野県立武道館が竣工したため、日本武道館主催の指導者研修会に移行した。



(4) 強化拳士制度

長野県内の小学生から高校生を対象に、強化拳士の指定を行い、全国レベルの大会で活躍できる拳士の育成に取り組んでいる。

技術はもちろんであるが、少林寺拳法で一番大切な教えである、「半ばは自己の幸せを 半ばは他人の幸せを」を実践できる拳士を育てている。

近年徐々に技術レベルが向上し、赤穂高校2年の西出伊織拳士が、全国高校選抜大会男子単独演武の部で

全国優勝を飾る等、大きな大会で活躍できる拳士が育ってきた。

6 長野県少林寺拳法連盟のこれから

人口減少、少子高齢化から、拳士数の伸びは頭打ちで、全国各地で新規拳士獲得のための活動が開始されている。流派が無く世界で一つの少林寺拳法であるため、全国各地、長野県、そして近隣支部の絆をより一層深め、拳士一人一人が楽しく修行できる体制作りを行っている。

長野県少林寺拳法連盟は、県内支部相互の交友を図り、少林寺拳法の修行を通じて、自信と勇気と行動力を習得し、思いやりと正義感を養うことを目標とし、明日を担う少年拳士の育成に邁進する所存である。

◎歴代会長

- 初代 会長 下条進一郎（参議院議員）
- 二代目会長 吉田 博美（参議院議員）
- 三代目会長 佐々木祥二（県議会議員）

◎歴代理事長

- 初代 理事長 小池 靖彦（伊那市）
- 二代目理事長 北原 実（岡谷市）
- 三代目理事長 小池 靖彦（伊那市）
- 四代目理事長 佐治木光夫（長野市）
- 五代目理事長 宮本 繁（千曲市）
- 六代目理事長 鷹野 鉄也（茅野市）

長野県綱引連盟

私共長野県綱引連盟は昭和58年10月に発足致しまして、昭和62年4月に全国に先駆けて当時長野県体育協会（現在スポーツ協会）に加盟させて頂く事が出来ました。

綱引競技は手軽に誰にも出来るスポーツです。昔からスポーツの原点とも言われおり、古来から各地で五穀豊穡・大漁祈願・として取り上げておりました。

又県境で行われている国盗り綱引大会があります。長野県でも飯田市と静岡県浜松市での兵越峠の綱引大会が行われていて、この大会は監督主将は両市の市長さん。行司役には愛知県豊田市の副市長さんが努めています。勝者の市は1m県境が移動する楽しいお祭り行事となっております。又学校の運動会、地域公民館等の運動会には必ず綱引競技があります。誰しも綱を引いた経験はあると思います。これらは全てお祭り行事です。

競技スポーツとしては、近代オリンピック第2回フランスのパリ大会（1900）から第7回ベルギーのアントワープ大会（1920）まで陸上競技の正式種目にありました。これらは全てアウトドア競技であり、アウトドア競技は天候に右左

され競技が中止となったり、グラウンドが掘れてしまい引く度にコースを移動させなければならない。このような事でオリンピックから外れたのではないかと想像しています。そこで今回の2020東京オリンピックにインドア競技として100年ぶりの綱引競技復活を願い、日本綱引連盟も10万人の署名を集めJOCに提出致しました。1次予選は通過しましたが、大変残念ながら2次予選で落選となってしまいました。でも国際綱引連盟は2024年フランスパリ大会に向けて再度復



活を願い働き掛けているとの噂を聞いております。

長野県綱引連盟は発足に先立ち、日本綱引連盟に審判員の講師派遣依頼をお願いし、審判の資格取得を目的に、県内各地域のスポーツ指導員および各市町村の教育委員会をお願いし、県内で375人の審判員が誕生致しました。

そして昭和59年1月に長野県綱引連盟の第1回県選手権大会を開催し、59年2月の第2回全日本綱引選手権大会に初参加をしました。でも男女共予選敗退でした。当時は全日本綱引選手権大会、長野県綱引選手権大会には大手食品メーカーの冠大会で両大会はテレビ放映され助成金もあり、全国の都道府県連盟の事務局はほとんどが放送局又は新聞社に置かれていました。昭和60年11月に長野市の食品スーパー冠の第1回長野県スーパートーナメントオープン綱引大会を開催しました。此の大会もテレビ放映され、大勢の参加者がありました。第2回大会からは近県からも参加チームを募り150チームもの参加がありました。その後県選手権大会、全日本選手権大会も10回大会で冠が外れ、テレビ放映も無くなり、オープン大会も10回で冠が外れテレビ放映も無くなってしまいました。でも全国大会レベルは厚生労働省共催の全国勤労者綱引大会、文部科学省共催の全国スポーツレクリエーション祭綱引の部等が開催されていて、チームが存続されていました。

現在は上記2大会も終了してしまいましたが、2015年わかやま国民体育大会から公開競技として綱引を取り入れて頂きました。2019年茨城国体では北信越代表の長野県飯田OIDE長姫高等学校が少年男子の部で見事に優勝する事が出来ました。大変残念なのは昨年の鹿児島国体、今年の三重国体は、コロナ感染予防の為中止となってしまった事です。

また選手の強化に努め全日本綱引選手権大会の方は2005全日本綱引選手権大会で初参加から22年目で男子の部で岡



谷市の進友会チームが見事初優勝を果たしました。その後2006大会、2009大会、2010大会、2012大会、2013大会、2015大会で7回の全国優勝に輝きました。そして1995年2月スペイン・ビトリアで開催された大会では、世界綱引選手権大会に初出場致しましたが、惜しくも入賞は出来ませんでした。その後2006年2月にはアイルランド・キラニーで開催された世界綱引選手権大会に参加6位入賞。2010年2月イタリア・チェゼナティコで開催された世界綱引選手権大会では7位入賞を果たしました。そして2014年2月アイルランド・キラニーで開催された大会では9位、2016年2月オランダ・ファーレンダムで開催された大会では8位入賞致しました。又アジア綱引選手権大会では2006年栃木県大田原市で開催された大会で、見事優勝を果たしました。2012年韓国ギム・ジェ市大会では準優勝を果たし、男子の部はすばらしい成績を果たしましたが、残念ながら女子の部はここ10年程チームが解散してしまい大変辛い思いをしています。

ご存知の通り昨年からコロナ感染予防の為、県綱引選手権大会、全日本綱引選手権綱引が中止となり、選手の皆さんも練習が出来ず誠に困っている状況です。一日も早くの収束を願っています。私も現在日本綱引連盟の理事で、組織強化委員長を努めており、国体の正式種目にとお願いしていますが、非常にハードルが高く、苦しんでいます。条件は47都道府県連盟が日本綱引連盟に加入する事で、昨年までに41都道府県が加入しており、今年1県加入し、残るは5県となりました。又各都道府県の連盟は都道府県体育協会・スポーツ協会に加盟する事が必要で、現在は80%位の加盟となっています。何とか加盟率を上げるよう頑張っております。今後とも長野県綱引連盟を宜しくお願い致します。

長野県バイアスロン連盟

バイアスロンは、クロスカンリースキーと射撃を組み合わせた競技で、冬季オリンピックの正式種目であり、北欧、ヨーロッパ、旧ソビエト連邦の国々では盛んに行われ、ドイツでは1日中テレビ中継されるほどの競技で

すが、わが国では銃規制があるため、誰でも行えるスポーツではないことから、競技人口も限られています。長野県では、長野オリンピック以前は選手もある程度いたのですが、オリンピック以後徐々に減っているのが現状で

す。国内では、競技人口増加に向け、銃刀法の規制を受けない光線銃を使用する競技の普及が始まりつつあります。上部組織は設立当初は日本近代五種・バイアスロン連合でしたが、その後日本バイアスロン連盟となっています。

1 沿革

昭和63年

1998年の長野オリンピック冬季大会招致に向け長野県スキー連盟、松本自衛隊、長野県ライフル射撃協会、有識者等により長野県バイアスロン連盟発足。

会長には、瀧澤至氏が就任。

それ以前は、松本自衛隊が全日本選手権、冬季国体公開競技のバイアスロン、宮様大会等に部隊として参加していた。

発足以後、自衛隊装備銃は一般銃の部、それ以外は競技銃の部へ出場することとなった。

平成元年

冬季国体へ連盟として初参加。

以後一般銃（自衛隊）、競技銃（主としてライフル射撃協会員）が参加し、毎年入賞者を輩出する。

1997年

野沢温泉村でオリンピックのプレ大会としてワールドカップ野沢温泉大会が開催された。

竹節（旧姓）佐貴子選手（北野建設:当時）が出場。

開催前日、会長の瀧澤至氏が急逝。

1998年

会長に百瀬公基氏就任

長野オリンピック冬季大会バイアスロン競技が野沢温泉村で行われた。

2000年

スキー連盟がバイアスロン連盟から離脱。

2001年

飯山市森の家周辺で冬季国体実施。

運営にあたり、飯山市、飯山市スキークラブ、自衛隊等の協力を得た。

2009年

第64回トキメキ新潟国体が公開競技としては最後の大会となる。

2010年～

公式大会の全日本選手権、宮様大会についての出場資格制限が設けられ、以後自衛隊以外は、出場できる公式大会が東日本選手権、西日本選手権のみとなった。

2021年

新型コロナウイルスにより大会の中止、規模の縮小が相次ぐ。

2022年

新型コロナウイルスにより、長野県もまん延防止措置が発出され、この間大会参加を自粛した。

長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟

長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟は、前身を長野県ボブスレー・リュージュ連盟として、会長に北野次登北野建設社長を選任し、1987年1月14日、正式に発足した。以後、スパイラルが休止（2018年2月5日）されるまで、長野オリンピック競技運営、選手の発掘・育成・強化、国際大会・国内大会の開催、体験会等のそり競技普及発展に寄与する活動を経て、現在に至っている。

歴代会長は、前述の北野次登氏（1987-2012年度）から、小坂憲次氏（衆議院議員 元文部科学大臣 2013-2016年度）、現在の鷺澤幸一氏（炭平コーポレーション社長）の3氏である。

本連盟の目的は、長野県におけるボブスレー・リュージュ・スケルトンのそり競技を統括し、そり競技の普及発展及び競技力向上を図ることである。しかしながら、元々、そり競技が根付いていなかった長野に、そり競技を普及発展させることは非常に困難であった。その契機となったのが、長野オリンピック招致とそり競技場「スパイラル」の建設である。ここでは、選手発掘と強化、長野オリンピックを含めた国際大会の開催、普及のため

の活動の3つの側面から、歴史を追っていくことにする。

設立当時、長野県でオリンピック種目であるそり競技「ボブスレー」「リュージュ」がどのようなスポーツであるかを詳しく知るものは、ほとんど皆無といってよい。連盟を立ち上げる前後の時期は、そり競技を知ることから始まった。このことは、連盟以外の関連機関においても最大の関心事であった。そもそも長野でそり競技施設が建設できるのか、国際大会が開催できるのか。同時に世界に通用する選手養成をしていかなければならない。全てがゼロに近い状態から、連盟だけの問題ではなく、関連団体が連携して準備を進めていく必要があった。その中でも連盟の担う役割は、選手育成と国際大会競技運営の2つが中心となった。

選手育成については、長野オリンピック招致が決議された1985年前後から始まり、オリンピック開催が決定された1991年より本格的になった。指導者もほとんどいない中でのスタートではあったが、長野オリンピックへの出場を目標に選手希望者がたくさん集った。そり競技が盛んなヨーロッパへの遠征や研修を進め、1996年にオープンした「スパイラル」を拠点とし、地の利を活かした

強化により、少しずつ国際大会に参加できる実力を身につけた選手を育成していくことができたのである。地元開催での活躍を祈りつつ迎えた長野オリンピック大会ではあったが、競技成績は振るわず、人気と歴史のある中で育った海外選手との実力差は歴然としており、目標としていた国際舞台での活躍は、大きな壁となって立ちあがる結果となった。長野オリンピック以後、正式にオリンピック種目となったスケルトン競技を加えて、2012年、名称を長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟と改名。3競技での選手育成は、長野、ソルトレイク、トリノ、バンクーバー、ソチ、ピョンチャンの各オリンピックに毎回選手を輩出するなど、確実な成果を得ることができた。本連盟よりオリンピック出場を果たした選手は以下の通りである。

ボブスレー（竹脇直巳/清川卓/長岡千里/宮崎久/佐藤真太郎）リュージュ（高橋敬/山田映理子/柳澤しの/小口貴久/高橋敬/原田窓香/林部吾郎/小林誠也）スケルトン（越和宏/稲田勝/中山英子/田山真輔/高橋弘篤/笹原友希/小口貴子）

中でも、最も著しい活躍を見せたのが、スケルトンの先駆者越和宏である。スパイラルで開催された1999年、2000年のワールドカップでは2連続優勝を成し遂げている。ソルトレイク（2002）では8位とオリンピックでの入賞を果たした。

一方で、長野オリンピックを迎える準備として、競技



役員の養成も着々と進められた。オリンピックをはじめとした国際大会では、ぴりぴりとした雰囲気の中で、広大な敷地内で全ての競技役員が機能的に動かなければ大会は成り立たないのである。このために、本連盟から海外へ競技役員養成スタッフを派遣し、海外の競技運営を学び、ボブスレー・リュージュ合わせて、50名以上の国際審判員養成を果たした。1997年2月のプレ大会から始まり、長野オリンピックを含め、スパイラルで開催された国際大会は2014年まで、3競技で26回を数える。いずれも質の高い競技運営として、国際連盟からも高く評価されたのである。毎年開催される国内大会を含めると100回を超える競技運営に貢献してきた。

本連盟の目的の一つに、そり競技の普及がある。とりわけ、知名度の低いそり競技にあっては、いかに多くの人にそり競技を知ってもらうか、興味を持ってもらえるかが将来のそり競技の発展に大きな影響を及ぼす。そのために、毎年そり体験会を開催したり、夏フェスタと称しスパイラルでのイベントや周辺の美化活動も行ったりした。とりわけ、そり競技に理解を示し、本連盟を支えていただいた団体に、「浅川スパイラル友の会」がある。地元の住民がスパイラルを守り、そり競技を普及させるための支援をしていただいたことに、連盟として頭が下がる思いである。その他、上部組織である日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟、スパイラルを管理していただいた長野市、協賛企業、関連団体全ての皆様のおかげにより、ここまで連盟を維持することができたことに深く感謝し、結びとしたい。

長野県ゲートボール連盟

ゲートボールは、日本生まれのボールゲームで、ヨーロッパで行われていたクロッケーをヒントに昭和22年北海道の鈴木栄治氏（故人）によって創案されました。創案の動機は、終戦直後の混乱期に青少年の不良化を防止し、健全な育成を願い手軽に出来る軽スポーツを、との発想からでありました。しかし、こうして考案されたゲートボールでしたが、関係者による積極的な普及活動が行

われたにも関わらず、あまり青少年には受け入れられず、一方で高齢者の間には福祉団体等によって地道な普及活動が展開されていたおかげで、長い間忘れられることなく愛好され続けておりました。

当初県内ではあまり定着されておりましたが、昭和50年代に入り第33回国民体育大会が本県にて開催（昭和53年）されるとあって、これを機に県民のスポー



ツに対する関心も一段と深まってきた中、第7回長野県民運動競技大会（昭和54年）において、高齢者に格好のスポーツとして定着させるべき主催者が、ゲートボール競技を行い大会種目にしようとアピールしました。この頃を契機に高齢者を中心に急速に人気が高まり、ゲートボール団体と長野県ルールを考案した長野県教育委員会体育課が積極的に普及活動を展開、県内のゲートボール愛好者数5万人とまで言われるようになりました。

当初は各地にいくつかの民間指導団体があり、それぞれに異なったルールで競技が行われていましたが、ルールと組織統一の要望が高まり、文部省の認可を得て昭和59年12月に財団法人日本ゲートボール連合が設立され、昭和60年全国の都道府県教育委員会（体育課）に対し、各県毎にその県を代表するゲートボール団体を認定、あるいは代表組織を作り各県教育委員会の副申請を添えて加盟手続きするよう要請があり、これを受け長野県教育

委員会体育課が中心となり、長野県内で活動しているいくつかのゲートボール団体を統一するため、その協力についての呼びかけが行われ、昭和60年11月29日長野県ゲートボール連盟設立総会において「長野県ゲートボール連盟」が設立されました。

爆発的な人気に支えられ発展し続けてきた本連盟は、昨年（令和2年）設立35周年記念を迎える運びとなりました。

本連盟では、これまでゲートボールは、仲間づくりと高齢者の健康維持に役立つレクリエーションスポーツとしてもとらえ、弾力性のある指導者の養成にも力を注ぎ、一方でチャンピオンスポーツとして競技力の向上も図っております。

現在ではジュニア・若年層への普及も図り小中学校児童、企業等への指導もしております。

多様化する軽スポーツの中にあってゲートボールは、今後幅広い普及活動が要求されております。スポーツとレクリエーション、福祉の本来の姿に立ち返り着実な発展を続けて参りたいと存じます。



長野県カーリング協会

- ・昭和62年10月長野県カーリング協会設立
- ・昭和63年第1回～平成9年第10回全労済カップ 長野県カーリング選手権大会 開催
- 第3回カナダチャレンジカップ開催
- ・平成元年第4回カナダチャレンジカップ開催
- ・平成2年第5回カナダチャレンジカップ開催
- Kスガハラカーリングスクール開催
- ・平成3年第6回カナダチャレンジカップ開催
- レイタンブルカーリングスクール開催
- ・平成5年 G・ジャクソンカーリングスクール開催
- ・平成6年世界選手権視察研修（オーバーストドルフ）
- ・平成7年世界選手権視察研修（ブランドン）
- 会員制カーリング施設 カーリングホールみよた開設
- ・平成8年5th日本ジュニア選手権 常呂大会
- 男子：チーム柏木 優勝
- ・平成9年世界ジュニア選手権1997 軽井沢大会

- 男子日本代表：柏木寛昭・敦賀信人・柳沢和人・柳沢敬太・中山隼 出場
- ・平成10年第11回～令和3年32回長野県カーリング選手権大会開催
- 1998長野冬季オリンピックカーリング開催 軽井沢
- ・平成11年7th日本ジュニア選手権 軽井沢大会
- 男子：チーム柏木 優勝
- ・平成12年17th日本選手権 軽井沢大会
- 男子：チーム柏木 優勝
- 8th日本ジュニア選手権 男子：チーム柏木 優勝
- 世界男子選手権2000 グラスゴー大会
- 日本男子代表：柏木寛昭・柳沢和人・市村尊則・柳沢敬太・中山隼 出場
- ・平成13年9th日本ジュニア選手権 軽井沢
- 男子：チーム柏木 優勝
- 18th日本選手権 男子：チーム柏木 優勝

- 平成14年19th日本選手権 常呂大会
男子：チーム柏木 優勝
- 11th日本ジュニア選手権 男子 チーム両角 優勝
- 世界男子選手権2002 ビスマルク大会
日本男子代表：柏木寛昭・柳沢和人・市村尊則・柳沢敬太・中山隼 出場
- 平成15年20th日本選手権 軽井沢大会
男子：チーム柏木 優勝
- 13th日本ジュニア選手権 青森大会
男子：チーム両角 女子：チーム掛川 優勝
- 平成17年22th日本選手権 軽井沢大会
女子：チーム土屋 優勝
- 14th回日本ジュニア選手権 妹背牛大会
男子：チーム両角 優勝
- 平成18年23th日本選手権 軽井沢大会
男子：チーム両角 優勝
- 15th日本ジュニア選手権 軽井沢大会
男子：チーム松村 優勝
- 世界女子選手権2006 アルバータ大会
日本女子代表：土屋由加子・園部淳子・園部智子・亀山智恵美・佐藤みつき 出場
- 平成19年24th日本選手権 常呂大会
男子：チーム両角 優勝
- 16th日本ジュニア選手権 青森大会
男子：チーム松村 優勝
- 平成20年25th日本選手権 軽井沢大会
男子：チーム両角 優勝
- パシフィックアジア選手権2008 ネズビー大会
男子：チーム両角 2位
- 平成21年26th日本選手権 青森大会
男子：チーム両角 優勝
- パシフィックアジア選手権2009 軽井沢大会
男子：チーム両角 2位
- 18th日本ジュニア選手権 軽井沢大会
男子：チーム松村 優勝 女子：チーム土屋 優勝
- 世界男子選手権2009 モンクトン大会
日本男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・佐藤正徳・両角公佑 出場
- 平成22年19th日本ジュニア選手権 常呂大会
男子：チーム松村 優勝
- 平成23年28th日本選手権 名寄大会
女子：チーム藤澤 優勝
- パシフィックアジア選手権2011 南京大会
女子：チーム藤澤 出場
- 平成24年29th日本選手権 青森大会
女子：チーム藤澤 優勝
- 21th日本ジュニア選手権 青森大会
男子：チーム速水 優勝
- パシフィックアジア選手権2012 ネズビー大会
男子：チーム両角 2位 女子：チーム藤澤 2位
- 平成25年30th日本選手権 札幌大会
男子：チーム両角 優勝 女子：チーム藤澤 優勝
- 6th日本ミックスダブルス選手権 軽井沢大会
チーム佐藤・柏木 優勝
- 世界男子選手権2013 ビクトリア大会
日本男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・両角公佑・清水芳郎 出場
- 世界女子選手権2013 リガ大会
日本女子代表：藤澤五月・市川美余・清水絵美・松村千秋・佐藤美幸 出場
- 世界ミックスダブルス選手権2013 カナダ大会
日本代表チーム：佐藤由美子・柏木寛昭 出場
- パシフィックアジア選手権2013 上海大会
男子：チーム両角 2位
- 通年型6シートカーリング場 軽井沢アイスパーク開設
- 平成26年31th日本選手権 軽井沢大会
男子：チーム両角 女子：チーム藤澤 優勝
- パシフィックアジア選手権2014 軽井沢大会
男子：チーム両角 2位
- 7th日本ミックスダブルス選手権 青森大会
チーム佐藤・持田 優勝
- 世界男子選手権2014 北京大会
日本男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・両角公佑・松村雄太 5位
- 世界ミックスダブルス選手権2014 ダンフリー大会
日本代表チーム：佐藤みつき・持田靖夫 出場
- 平成27年32th日本選手権 常呂大会
男子：チーム両角 優勝
- 24th日本ジュニア選手権 軽井沢大会
女子：チーム土屋 優勝
- 世界男子選手権2015 ハリファクス大会
日本男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・両角公佑・松村雄太 6位
- パシフィックアジア選手権2015 カザフスタン大会
男子：チーム両角 2位
- 平成28年世界ジュニア選手権2016 デンマーク
日本女子代表：土屋文乃・鈴木結海・上野結生・金井亜翠香・山本冨 10位
- 33th日本選手権 男子：チーム両角 優勝
- 世界男子選手権2016 バゼル大会
日本男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・両角公佑・谷田康真 4位
- パシフィックアジア選手権2016 ウイソン大会
男子：チーム両角 優勝
- 平成29年34th日本選手権 軽井沢大会
男子：チーム両角 優勝 女子：チーム松村 優勝
- 世界男子選手権2017 エドモントン大会
日本男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・両角公佑・平田洸介 7位
- パシフィックアジアカーリング選手権2017 エリナ大会
男子：チーム両角 3位

- ・平成30年 長野県選手、悲願のオリンピック
カーリング競技平昌冬季五輪出場 男子8位
男子代表：両角友佑・清水徹郎・山口剛史・両角公佑・
平田洸介・コーチ 長岡はと美
- 11th日本ミックスダブルス選手権 青森大会
チーム 藤澤・山口 優勝
- 27th日本ジュニア選手権 軽井沢大会
女子：チーム江並 優勝
- 世界ミックスダブルス選手権2018 スウェーデン大会
日本代表チーム：藤澤五月・山口剛史 5位
- ・平成31年・令和元年
世界ジュニア選手権2019 リバプール大会
日本女子代表チーム：山本冨・江並杏実・鈴木みのり
・両川萌音・金井亜翠香
9位

- 36th日本選手権 札幌大会
女子：チーム中嶋 優勝
- 12th日本ミックスダブルス選手権 軽井沢大会
チーム 藤澤・山口 優勝
- 28th日本ジュニア選手権 妹背牛大会
女子：チーム山本 優勝
- 世界女子選手権2019 シルケボーク大会
日本代表チーム：中嶋星奈・北澤育恵・松村千秋・石
郷岡葉純・清水絵美 4位
- 世界ミックスダブルス選手権2019 ノルウェー大会
日本代表チーム：藤澤五月・山口剛史 5位
- ・令和2年13th日本ミックスダブルス選手権
札幌大会 チーム松村・谷田 優勝
- ・令和3年14th日本ミックスダブルス選手権
青森大会 チーム吉田・松村 優勝

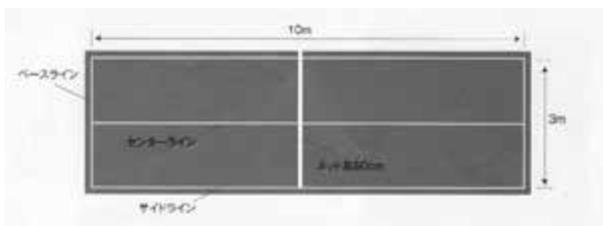
長野県バウンドテニス協会

【バウンドテニスとは】

「バウンドテニス」はひと言でいうならば、狭いスペースでできるテニスです。

バウンドテニスは、ラケットボールを原型に、テニスとほぼ同様のルールで狭い場所でも手軽にでき、しかも運動量も十分あるスポーツとして、メルボルンオリンピックで活躍した、レスリングのゴールドメダリスト、笹原正三氏によって昭和55年（1980年）に考案、開発されました。

バウンドテニスの「バウンド」とは、ボールが良く“弾む”こと（バウンド）と“限られたスペース”でできること（バウンダリー）に由来しています。具体的にはコートは3m×10m、ネットの高さが50cmと定められ、テニスコートの約6分の1の面積でプレーができ、場所を選ばず楽しめることが何よりも大きな特色となっています。



使用するラケット、ボールともにテニスより小さい用具なのでなじみやすく、小学生から高齢者まで誰でも気軽にプレーすることができます。

さらに、バウンドテニスには他のスポーツには見られない「B Tラリー戦」という新しい種目があります。これは、初めてラリーが続けられるようになった最初の感激を、そのまま競技として活かしたもので、1分間に何

回ラリーが続くかを他のコートと競い合います。このように本来のスポーツ性をそこうことなく競技性を保ちながら、生涯スポーツ、レクリエーション・スポーツとしての工夫とアイデアも取り入れています。

1. 協会の発足

長野県バウンドテニス協会は昭和58年（1983年）3月に設立されました。日本バウンドテニス協会が昭和56年（1981年）に設立しましたの



で、長野県は全国でも早く発足したことになります。

平成3年（1991年）4月に財団法人長野県体育協会（当時）に加盟させていただきました。

2. その後のあゆみ

長野県バウンドテニス協会設立後は長野県内各地で普及講習会を各地で行いました。

昭和58年（1983年）11月に第1回長野県バウンドテニス選手権大会を開催し、同年開催の第1回全日本バウンドテニス選手権大会（広島県開催）にも12名の選手を派遣し、シニア女子シングルスでは優勝と3位となるなど活躍を致しました。その後も毎年長野県バウンドテニス選手権大会が開催され、全日本バウンドテニス選手権大会に選手を派遣して優勝・準優勝等多くの上位入賞者が出ております。

平成10年には設立15周年を迎え、10月に〔設立15周年

記念誌]を発行いたしました。

平成17年からは北信越ブロックバウンドテニス選手権大会も開催されるようになり、第1回大会のシニアシングルス優勝をはじめとして、その後も多くの優勝者が出ております。

設立25周年には、日本バウンドテニス協会・北信越各県のバウンドテニス協会に加え、交流の深い近県のバウンドテニス協会からもご出席をいただき創立25周年記念式典と記念親善大会を盛大に開催いたしました。



近年一般財団法人日本バウンドテニス協会はジュニア層への普及を推し進めており、長野県でも小学校のクラブ活動への講師派遣や愛好者の子供を中心とした地域クラブの活動などを支援しており、長野県バウンドテニスジュニア選手権大会も開催されております。

また、バウンドテニスは長野県においても、全国的に見てもシニア層の愛好者が多いので、日本バウンドテニスゴールド大会“ゴールドカップ シニアチーム日本一決定戦”が毎年開催されております。平成30年に開催された第21回日本バウンドテニスゴールド愛媛大会では長野県の「シナノスイート」チームが念願の日本一に輝きました。

最近の長野県バウンドテニス協会登録者数を150～200名程度が続いております。毎年の大きな目標は、生涯スポーツとして協会員を増やして、バウンドテニスを楽しんで貰う事。また競技スポーツとして県全体の技術レベルを上げる事です。毎年協会員の増加を目指して、初心者教室や講習会を行っておりますが、なかなか増えないのが現実です。バウンドテニス知られていないことで苦戦していますが、これからも活発に活動したいと思います。

3. これからの展望

現在まで、国民体育大会に於いてバウンドテニスはデモンストレーション競技として開催されてきました。

2016年 一般財団法人日本バウンドテニス協会は国体公開競技参加のための資料を提出し、ヒヤリング調査な

どが行われました。そして、2017年に第78回佐賀大会・第79回滋賀大会・第80回青森大会・第81回宮崎大会における公開競技参加が決定されました。

次の第82回は長野県が内々定している長野大会です。

【歴代 会長】

平成1年～8年	下条進一郎
平成9年～20年	後藤 幸雄
平成21年～27年	片峯 正
平成28年～令和2年	後藤 秀作
令和3年～	立岩 之博

【歴代 理事長】

昭和57年～61年	中澤 豊
昭和62年～平成2年	関 良一
平成3年～6年	峯村 寿一
平成7年～10年	島田 高子
平成11年～14年	小山 一泰
平成15年～20年	立岩 之博
平成21年～22年	加藤 芳忠
平成23年～24年	笠原 正司
平成25年～	中沢 泰夫

【長野県スポーツ振興功績者 有功賞】受賞者

平成9年度	大野 重治
平成11年度	峯村 寿一
平成12年度	島田 高子
平成14年度	小山 一泰
平成17年度	山本 弘
平成18年度	後藤 幸雄
平成19年度	後藤 正行
平成20年度	立岩 之博
平成21年度	高木 重由
平成23年度	渡邊 正博
平成26年度	小山由紀子
令和元年度	島 幸知

【長野県バウンドテニス協会ホームページ】

URL <http://bta-nagano.main.jp/>

特定非営利活動法人 長野県武術太極拳連盟

○沿革、あゆみ

- 1985年（昭和60年）1月
長野県太極拳協会設立 会長・中島深水
- 1987年（昭和62年）
第1回フェスティバル開催（長野市）
参加12団体、120人
- 1991年（平成3年）
長野県体育協会へ加盟
- 1992年（平成4年）2月
長野県武術太極拳連盟に改組
- 1993年（平成5年）
第1回長野県選手権大会開催（上田市）
- 2018年（平成30年）6月
組織改革のため特定非営利活動法人に改組

1985年（昭和60年）に長野県の団体が設立されました。1972年（昭和47年）が日中国交正常化の年ですから、それから13年目の設立になります。日本における武術太極拳界を統轄し、代表する団体である日本武術太極拳連盟（現在は公益社団法人）は1987年（昭和62年）4月に設立されました。同じ年の9月に横浜市で第1回アジア武術選手権大会が開催されています。日本武術太極拳連盟はその後、1990年（平成2年）に（財）日本オリンピック委員会に、翌年1991年（平成3年）には、（財）日本体育協会に加盟しています。武術太極拳の国体への参加は、2019年（令和元年）の「天皇陛下御即位記念 第74回国民体育大会 いきいき茨城ゆめ国体2019」にて初めて「公開競技」として実施されています。

長野県武術太極拳連盟は1985年（昭和60年）に前身の長野県太極拳協会として出発して以来、太極拳の普及に努めて来ました。1992年（平成4年）、現在公益社団法人となっている日本武術太極拳連盟に加盟する時に名称を変更し、長野県武術太極拳連盟としました。

今日、県内各地に教室が有り、多くの愛好者が太極拳

を楽しんでいます。

太極拳は動作が穏やかでゆっくりしていることから、心臓や肺などへの負担が極めて少なく、体質の強弱を問わずに出来る優れた健康法であり、更に脳の活性化に極めて有効な運動と認められており、老若男女を問わず大勢の人達が練習しています。長拳（カンフーの形）は太極拳とは反対に速い動きが特徴ですので、愛好者のほとんどが小中高生です。

太極拳のことをもう少し説明いたします。

太極拳は伸びやかで大きく、ゆったりとした動作であり、意識・動作・呼吸の三つが調和して運動をするのが特徴です。柔らかい動きで相手の力を外しバランスを崩して合理的な力を用いて相手を倒す技法、すなわち化勁の武術であり、用意不用力を旨とします。

太極拳の動作はすべて陰陽が交替するものであり、虚と実、合と開、蓄と発などが互いに入れ替わり変化します。陰の部分が重要で有用であることに着目して動作します。

太極拳は中国に伝わる伝統武術のひとつであり、徒手及び剣・刀・槍等の武器を使う格闘技であり、日本では太極拳が広く行われるようになって、約40年がたちます。

中国武術の起源はかなり古く、様々な技法を組み合わせた数多くの武術の流派が生まれ、河南省で考案された武術の一つと、18世紀に武術家の王宗岳が著した『太極拳論』が結びついて太極拳という名称が用いられるようになりました。

格闘技としての武術は、社会状況の変化につれて、しだいに健身、スポーツ種目として心身の鍛錬と修養を目的とするようになってきました。「武術太極拳」という名称で、太極拳、長拳、南拳や各種の伝統武術など、各種の中国武術・中国拳法を総称して、普及されています。そのなかでも、日本では太極拳の愛好者が圧倒的に多く、1956年（昭和31年）に編纂された簡化二十四式太極拳が普及しています。

スポーツ競技も行います。

試合は、演武競技が主であり、定められた時間とルールに基づいて、縦8メートル、横14メートルの特製の絨毯を敷いたコートの中で1人（組）ずつ演武し、審判員が与える得点によって順位を決定します。太極拳、太極剣、南拳、南刀、南棍、長拳、剣術、刀術、槍術、棍術等の種目を行います。

競技の採点は、10点満点からの減点方式で行い、姿勢や動作の正しさ、動作の均衡と力の運用の正しさ、精神・風格等の表現について判定します。

従来、演武競技は選手が各種目の武術の特徴を備えた足技、打法、跳躍技などを自分で組み合わせて演武する自由演技で競われてきましたが、国際化の流れのなかで、



各国の選手の技術の向上を促進し、また、採点をより合理的に行うために、武術競技用統一規定演武型（規定套路）が定められ、1990年（平成2年）の第11回北京アジア競技大会から、この規定演武型が採用されています。

スポーツ競技における長野県選手の実績は以下のとおりです。（令和3年3月まで）1988年（昭和63年）に開催された第5回全日本武術太極拳選手権大会において、長野県の選手が集団競技で初めて入賞しました。

以後、個人種目での入賞が続いております。

1994年（平成6年）の第11回全日本武術太極拳選手権大会で、24式太極拳・女子で長野県の選手として初めて全国大会1位を獲得しました。翌年の1995年（平成7年）の第12回全日本武術太極拳選手権大会では、総合太極拳・女子で1位を獲得するなど、56回の入賞を果たし、活躍しております。

また2019年（令和元年）の第74回国民体育大会でも、少年女子：ジュニア太極拳2で3位に入賞しております。

全国大会での入賞記録は以下の通りです。

○全国武術太極拳選手権大会入賞

拳式	入賞回数	最高位
集団競技	1	3位

拳式	入賞延べ人数	最高位
総合太極拳 女子	4	優勝
総合太極拳 男子	1	3位
24式太極拳 男子	6	2位
24式太極拳 女子	2	優勝×2回
ジュニア太極拳2 男子	4	優勝×3回
ジュニア太極拳1 男子	4	優勝×3回
ジュニア太極拳1 女子	1	3位
初級長拳 男子	3	4位
32式太極剣 男子	4	2位
88式太極拳 男子	15	3位
呉式太極拳 男子	6	3位
孫式太極拳規定 女子	5	優勝

○国民体育大会入賞

拳式	入賞延べ人数	最高位
少年女子：ジュニア太極拳2	1	3位

長野県武術太極拳連盟は組織改革を行い、2018年（平成30年）6月に特定非営利活動法人となりました。恒例行事として年1回、長野県日中友好武術太極拳フェスティバルを開催し、長野県内の各団体の演武の発表や交流を行っております。

昨年2020年（令和2年）の第33回フェスティバルは残念ながら新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、2021年（令和3年）9月26日に長野市のビッグハットにおいて第34回フェスティバルを開催する予定で、準備を進めております。

長野県武術太極拳連盟は、一人でも多くの長野県民の皆様が楽しみながら出来る太極拳の練習を通じて、心身の健康の維持と増進を図り、長野県が日本一の健康長寿県となることを目指したいと存じます。



長野県トライアスロン協会

私ども『長野県トライアスロン協会』（略称NTA）は『公益社団法人日本トライアスロン連合』（略称JTU）の下部組織として、長野市を拠点に活動しています。

最初に「トライアスロン」競技の歴史について説明させていただきます。始まりは諸説ありますが、1974（昭和49）年に、米国カリフォルニア州サンディエゴで誕生したといわれています。水泳（スイム）、自転車（バイク）、ランニング（ラン）の3種目を連続して行うことから、ラテン語の3を意味する「トライ」と、競技を意味する「アスロン」を組み合わせることが語源と言われ、サンディエゴ・トラッククラブのメンバーが、連続競技を世

界で初めて『トライアスロン』と称し、競技を行ったことが始まりとされています。

トライアスロンの歴史を語る上で、転機となった大会があります。1978（昭和53）年にそれまでハワイのワイキキで行われていた「ラフウォータースイム」（スイム3.86km）、「アラウンドオアフ」（バイク180km）、「ホノルルマラソン」（ラン42.195km）を元に、同じ距離を連続して行う大会が、15人の米国海軍兵士により行われました。このような大会は『IRONMAN』と呼ばれ、ビジネスとしても成立したことにより、以後、世界各地で開催され、成長を見せていくことになりました。

1989（昭和64）年には、『国際トライアスロン連合』（ITU）が設立され、同年『第1回ITU世界選手権大会』がフランス・アビニオンで開催されました。そして1994（平成6）年には、トライアスロン競技がオリンピックに正式種目として採用され、これを受け競技人口も増えて、世界的な広がりを見せていくことになりました。1982（昭和57）年に始まった『国際トライアスロンシリーズ』（USTS）は、距離をスイム1.5km+バイク40km+ラン10km（計51.5km）に設定しましたが、現在ではこの距離が「オリンピックディスタンス」と呼ばれて、オリンピック、世界選手権を始めとする数多くの大会で採用されています。なお、ジュニア選手権や一般大会では、51.5kmの半分の距離で行われる「スプリントディスタンス」も導入されています。

さらに、2016（平成28）年の『リオパラリンピック』からは「パラトライアスロン」も正式種目に採用され、2021（令和3）年開催の『東京パラリンピック』では日本選手が、各カテゴリーでメダルを獲得し、障害を持つアスリートの活躍の場の広がりの一助となったものと感じています。

今日では、世界5大陸120カ国を超える国と地域で様々な距離の大会が開催されている他、ラン+バイク+ランで行われる『デュアスロン』やクロスカントリースキーとマウンテンバイクを取入れた『ウインタートライアスロン』などの関連複合競技も盛んに行われています。

一方日本では、1981（昭和56）年に「鳥取県の皆生温泉」でロングディスタンスの大会が初めて開催され、同大会は今も人気大会として継続されています。その4年後、「神縄県宮古島」、「滋賀県びわ湖」でロングディスタンスの大会が、また、熊本県天草でオリンピックディスタンスの大会が開催されましたが、中でも『宮古島大会』がNHK-BSで中継放送されたことにより、トライアスロンが一躍脚光を浴びることになりました。今では、全国で数多くの大会やセミナー、練習会、リハーサルイベントなどの普及イベントも開催されています。

トライアスロンと聞くと、「苦しさや過酷」という負のイメージがありますが、日本国内では小学生から80歳を超える方が「生涯スポーツ」として自分のペースで楽しんでいます。この素晴らしいスポーツをJTUおよびNTAは、様々な形でサポートしています。

次に『長野県トライアスロン協会』（NTA）の沿革について述べさせていただきます。長野県では、1986（昭和61）年に『第1回日本雪上トライアスロン戸狩大会』が開催され、そこに集ったメンバーがNTAの礎を築いていくことになりました。その2年後に開催された『第1回御嶽スーパートライアスロン』を経て、協会設立の機運がより一層高まり、翌年に設立総会を開催し、『長野県トライアスロン協会』を設立すると共に、「日本トライアスロン協会」に13番目の組織として加盟しました。なおこの年には、「日本トライアスロン連盟」も設立されましたが、その後、オリンピックの正式種目になった

ことを機会に、現在では『公益社団法人日本トライアスロン連合』に統合されています。

NTA設立後の活動としては、各種大会への協力、選手派遣などを行ってきましたが、取り分け1990（平成2）年から開催されている『氷上トライアスロン小海大会』の後援、および『野尻湖カップトライアスロンジャパンオープン』（現在大会名変更）の主管は、現在まで続くロングラン事業となっています。

新たな取組みとして、2021（令和3）年から『SUWAKO ∞ PEAKS.MIDDLE.TAIATHLON』（諏訪湖および八ヶ岳をめぐるミドルディスタンスの大会）を開催すべく準備を進めて参りましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、残念ながら翌年へと延期されることとなりました。また同年、信濃町の野尻湖において計画した『のじりっ子トライアスロン大会』（ジュニアの大会）は、規模の縮小はありましたが実施することができました。

大会・競技会以外の活動として、普及と選手強化、指導者ならびに審判員の育成と派遣、国民スポーツ大会（旧国民体育大会）関連の事業なども行っています。普及では、ジュニア選手の発掘・育成に力を入れています。長野市と岡谷市において「ジュニアスイム教室」を毎週行い、また、「バイク・ランの講習会」も開催しています。この取組みのために、ジュニア育成委員会を新たに立ち上げ、指導には若い指導者にも加わってもらうと共に、中央競技団体からオリンピックなどを講師として招き、活動の活発化を図っています。また、ジュニア選手の意識の高揚とさらなる強化のために、エリート選手との合同合宿も行っています。選手強化は、主に「国民スポーツ大会」を目指すエリート選手を対象として、技術・体力の向上を図る目的で合宿を中心に行っています。

当該合宿には、中央競技団体および競技部を保有する企業にもご協力いただき、オリンピックを含むトップアスリートからのご指導もいただいています。指導者については、上記で述べた普及、選手強化に必要な資格を持つ



第74回茨城国体

た指導者の養成、スキルアップのために、講習会への参加の後押しをしています。近年、指導者の数も増え、選手個々に対する細やかな指導ができるようになってきました。

トリアスロンの審判員には第3種から第1種まで、国際審判員はレベル1からレベル3までの種別があります。各種別の審判員の数を増やすこと、またそのスキルアップを図ることも重要課題と捉え、講習会を開催し受講を促したり、各地で行われる大会への派遣を行っています。『国民スポーツ大会』関連の事業としては、主に毎年開催される国体への選手選考・派遣を行ってきました。

また、2028年開催予定の『長野県国民スポーツ大会』

の準備も進め、同大会で活躍できる選手の発掘・育成を中心に、指導者と審判員の増員とスキルアップを図り、大会の成功はもとより、天皇杯・皇后杯にも貢献できることを目指し活動しています。

トリアスロン競技はまだ歴史が浅く、長野県トリアスロン協会も設立から32年と、長い歴史を誇る団体ではありませんが、近年では、「長野県スポーツ振興功績者表彰」をいただける人材も現れるなど、徐々に認知されてきているものと嬉しく感じています。今後は、40年、50年と一層の発展を遂げられるよう努めて参りますので、公益財団法人長野県スポーツ協会をはじめ、長野県、その他の競技団体、関係の皆さまからのご指導ご鞭撻を賜りますよう切に願っております。

JABA長野県野球連盟

「長野県野球協会」設立へ

平成28年（2016年）、NPB（日本野球機構）とBFJ（全日本野球協会）により「日本野球協議会」が設立されプロ野球とアマチュア野球が連携して野球振興に取り組む時代となりました。長野県でも同年に「長野県青少年野球協議会」が設立され、アマチュア野球の様々な課題解決に向けての取り組みが進められ、競技人口拡大のためのイベント等が開催されました。

令和2年（2020年）、長野県野球界の発展と県内のさまざまな野球関連団体を統括する組織として、プロ野球（信濃グランセローズ）を含む全ての野球関連団体が連携した「長野県野球協会」設立に向けての準備が始まりました。

令和3年（2021年）、「次世代を担う青少年世代の支援と野球人口増加への取り組みを推進すること」「全ての加盟団体の競技力向上を図ると共に、他のスポーツ団体との相互協力や多様な社会貢献に寄与すること」を目的とし、プロ・アマ・女子すべての県内野球関連団体（14団体）を統括する組織として、令和4年（2022年）4月より「長野県野球協会」が本格的に活動することを記者会見し発表しました。

また、長野県野球協会の設立記念イベントとして、令和4年（2022年）3月19日・20日にオリンピックスタジアムで県内のBCリーグ（信濃グランセローズ）・社会人野球（千曲川硬式野球クラブ・信越硬式野球クラブ）・大学野球（松本大学）の4チームによる第1回長野県知事杯争奪プロ・アマドリームトーナメントが開催されることも発表されました。

今後の長野県野球協会の活動としては「野球普及イベントの開催」「指導者講習会・研修会の開催」「幼稚園・保育園への普及活動」「地域貢献・ボランティア活動」等が予定されています。

当連盟からは、長嶋会長が副会長として横井専務理事・高橋事務局長が協会役員としての参加が予定されています。

2021年度長野県野球連盟の活動

◇第62回長野県知事旗争奪JABA長野大会

期日：4月7日（水）から5日間

球場：長野オリンピックスタジアム・県営上田野球場

参加チーム（16）

TDK・七十七銀行・JFE東日本・鷺宮製作所・明治安田生命・ENEOS・東邦ガス・ジェイプロジェクト・トヨタ自動車・Honda鈴鹿・神戸ビルダーズ・三菱重工West・信越硬式野球クラブ・Fedex・伏木海陸運送・ロキテクノ富山

優勝：ENEOS（神奈川県）

◇第7回JABA北信越クラブカップ予選 長野大会

期日：5月15日（土）・16日（日）

球場：長野オリンピックスタジアム

参加チーム（4）

千曲川硬式野球クラブ・佐久コスモスターズ・上田硬式野球倶楽部・長野好球倶楽部

優勝：千曲川硬式野球クラブ

◇第46回社会人野球日本選手権北信越大会

期日：5月28日（金）から3日間

球場：オリンピックスタジアム

参加チーム（7）

信越硬式野球クラブ・Fedex・伏木海陸運送・ロキテクノ富山・IMF BANDITS富山・バイタルネット・JR新潟

優勝：バイタルネット

◇第7回JABA北信越クラブカップ大会

期日：7月17日（土）・18日（日）

球場：オリンピックスタジアム

参加チーム（7）

千曲川硬式野球クラブ・上田硬式野球クラブ・長野好球倶楽部・全新潟ブラックス・新潟コンマーシャル倶楽部・富山ベースボールクラブ・HardBallClub
金沢

優勝：千曲川硬式野球クラブ

◇第92回都市対抗野球一次予選長野県大会

期日：8月29日（土）・30日（日）

9月5日（日）

球場：佐久総合運動公園野球場

オリンピックスタジアム

参加チーム（6）

Fedex・長野好球倶楽部・佐久コスモスターズ・千

曲川硬式野球クラブ・上田硬式野球クラブ・信越硬式野球クラブ

優勝：信越硬式野球クラブ



長野県マレットゴルフ連盟

平成のニュースポーツとして驚異の発展を遂げたマレットゴルフとは？スティックとボールを使い決められた打ち出し地点からボールをできるだけ少ない打数で入れることを競うスポーツです。

マレットとは「木づち」との意味でゴルフのルールを用い競技をすることでマレットゴルフと名づけられた。

昭和52年に福井県で開発され昭和57年に長野県体育センターにより推進普及され市町村の協力によって山麓地・河川敷・原野・公園等が整備され県内に200か所近くのマレット場が出来上がる。

2000年（平成12年）に長野県マレットゴルフ連盟は長野県マレットゴルフ協会との間で統合する。

発足時には支部数も県内に50余りが発足し会員数も約9,000人に迫る勢いになりました。

懸案だった長野県体育協会、現在の「公財長野県スポーツ協会」に加盟が叶いマレットゴルフがスポーツ競技として公から認められたことでマレットゴルフを継続していく誇りを感じさせることが強くなった。

「何時でも何処でも誰でも」のキャッチフレーズで手軽に安全性が確保出来ることで生涯スポーツとして取り

入れられ長野県から平成9年「県民さわやかスポーツ祭」の参加が要請され競技に加えられる。

文部科学大臣杯・厚生労働大臣杯・長野県知事杯等を開きより多くの県民が気軽にスポーツに親しみを感じ年齢や性別に関わらずスポーツを通じて交流・親睦ができる場を確保し元気な県民づくりに寄与しております。

平成15年からは全国でも珍しい松本浅間カントリー倶楽部の白馬コースを借り受けて夏と晩秋に大会を開催して醍醐味溢れる競技を開いております。



浅間 晩秋大会

長野県マレットゴルフ連盟あゆみ

●1988年 昭和63年3月6日長野県マレットゴルフ連盟設立

歴代会長任期中の発足大会

▲初代会長 西沢直人（上山田）

■1988年～1992年

[昭和63年3月～平成4年3月]

※第1回長野県マレットゴルフ連盟選手権(昭和61年)

※長野県マレットゴルフ連盟競技規則(昭和61年)



浅間 夏季大会



- ▲ 2代目会長 原 徳則（坂城）
- 1992年～1998年
 - [平成4年4月～平成10年3月]
 - ※第1回全日本選手権大会（平成3年発足）
 - ※第1回市町村対抗大会（平成8年サングリーンで発足）
 - ※長野県体育協会に加盟（平成8年）
 - ※県民さわやかスポーツ祭（平成9年参画）
 - ※長野県体育協会有効章受章（平成12年）
- ▲ 3代目会長 藤森宗清（松本）
- 1998年～2006年
 - [平成10年4月～平成18年3月]
 - ※第1回長野県知事杯グランドチャンピオン大会（平成11年）
 - ※長野県マレットゴルフ連盟・協会統合に至る（平成12年）
 - ※全日本マレットゴルフ連盟競技規則新刊発行（平成14年）
 - ※全日本選手権大会～文部科学大臣杯大会に変更（平成14年）
 - ※市町村対抗～長野県知事杯支部対抗大会に変更（平成14年）
 - ※連盟選手権～長野県知事杯選手権大会に変更（平成14年）
 - ※長野県体育協会有効章受章（2人目）（平成16年）
- ▲ 4代目会長 浅井志郎（塩尻）
- 2006年～2010年
 - [平成18年4月～平成22年3月]
 - ※全日本マレットゴルフ連盟競技規則改訂（平成18年）

- ※第1回厚生労働大臣杯伊豆伊東温泉大会（平成18年）
- ※長野県体育協会有効章受章（3人目）（平成20年）
- ※第1回長野県M・G連盟レディース大会（平成21年）

▲ 5代目会長 中島 睦（池田）

■2010年～現在に至る

[平成22年4月～現在に至る]

- ※長野県体育協会有効章受章（4人目）（平成22年）
- ※全日本マレットゴルフ連盟競技規則改訂（平成22年）
- ※レディース～長野県知事杯レディース大会名称変更（平成23年）
- ※第1回長野県マレットゴルフ連盟ペア大会（平成26年）
- ※全日本マレットゴルフ連盟競技規則改訂（平成26年）
- ※支部対抗～長野県知事杯市町村対抗に変更（令和2年）

以上歴代会長任期中に新規事業発足内容を出来る限り調べ上げたが、時間の経過が立ちすぎ資料が足りなく当時の事業について携わった人たちの証言が少なく分かることだけを載せることとした。

2018年招致が決定された長野県国体にマレットゴルフが福井県国体同様に取り入れられ、若者がマレットを高齢者スポーツと見る向きが代わり連盟に加盟されることを期待する声が県内各地から聞こえてくる。

明るいニュースですが、令和2年10月13日に中島睦会長が（公財）長野県スポーツ協会の格段なるご厚意とご協力を賜り犀北館2階大広間にて県知事表彰を頂きました。

マレットゴルフ連盟が発足して33余年になりますが、県知事表彰は初めてのことであり県連盟全会員の榮譽でありました。



表彰式会場の様子

長野県ゴルフ協会

【沿革】

日本ゴルフ協会（JGA）が日本体育協会に復帰加盟したのは1992（平成4）年。これに伴い、47都道府県にアマチュアゴルファーを統括する競技者団体の設立が進め

られた。1996（平成8）年1月、JGAならびに関東ゴルフ連盟（KGA）の強い要請を受ける形で長野県ゴルフ場連盟、信濃毎日新聞社が数回の打ち合わせを行い、藤原正男、小坂健介両氏により発起人会が設立された。同

年3月、ゴルフ場連盟、長野県ゴルフ愛好会、信濃毎日新聞社、信越放送から74人が出席して、設立総会を開催した。長野県体育協会への加盟は同年6月14日。JGAには体協会員として8月に加入し、同協会規定により、KGAに所属することとなった。ゴルフ競技の国民体育大会参加は1999（平成11）年からである。

【組織運営】

協会の構成員は東信、北信、中信、南信の4支部、加盟団体（長野県ゴルフ場連盟）、ゴルフ競技会主催団体関係者である。役員構成もこれに沿っており、それぞれの組織から選出された理事と学識経験者からなる理事会の互選で理事長、常任理事を選出する。実際の運営に当たっては、総務企画委員会、競技委員会、ジュニア育成委員会の3つの専門委員会が活動している。総務企画委員会は協会全体の活動方針や常任理事会に諮る議案を審議、競技委員会は主催競技会の規則と運営を担い、ジュニア育成委員会はジュニアスクール、ジュニア研修会、ジュニア競技会の運営やジュニアゴルファーの指導に当たる。委員の人材確保のため、理事でない人も特別委員に任命し活動している。2019年に全世界一斉にゴルフ規則の大幅改定が行われ、これに対応した研修会を開くなど日々進化を図っている。

【事業の拡大】

事業の柱である競技会の開催、運営はゴルファーの各層、広い年代を対象にしている。1968（昭和43）年に始まった県アマチュアゴルフ選手権大会は県内最高峰の大会「県アマ」として親しまれているほか、県シニアアマチュア選手権、県女子アマチュア選手権に加え県ジュニアゴルフ選手権まですべての年齢層にチャンピオンをめざす競技の機会を提供している。また、団体戦として県市町村対抗ゴルフ大会、60歳以上を対象とした県シニア市町村対抗大会、レディース地区対抗大会を開催しゴルフを通じた親ばくと健康増進に寄与している。世界共通のハンディキャップシステムの下で競う県アンダーハンディキャップゴルフ選手権も主催する。

県アマのチャンピオンと上位入賞者はKGA主催の関東アマチュアゴルフ選手権への出場権が付与されるほか、県ジュニア選手権は関東ジュニア選手権、関東小学生大会への予選を兼ねている。国民体育大会、日本マスターズゴルフ、関東アンダーハンディキャップゴルフ選手権への選手派遣も合わせ、関東へ、全国へと道は開かれている。

【ジュニア育成】

ジュニア育成は協会発足当初からの大きな目標である。単に強い選手というより、礼儀やマナーをわきまえた良い「ゴルファー」を育てることが将来のゴルフ界にとっても大切であるとの考えのもと、夏季ジュニア・ゴルフスクールやジュニア研修会を実施している。ゴルフ

スポーツ少年団活動へのバックアップ、ゴルフにつながるゲーム「スナッグゴルフ」の普及にも力を入れている。

ジュニアの育成強化は、確かな成果を生みつつある。関東ジュニア選手権、さらに日本ジュニア選手権、ジュニアの枠を超えて日本アマチュア選手権、日本女子アマチュア選手権へと駒を進める選手も次々と出てきた。

協会直接の事業ではないが、当協会、県ゴルフ場連盟、県プロゴルフ会などが協議し県内ゴルフ振興を目的に2017年に設立した「一般社団法人長野県ゴルフ振興基金」は、一般ゴルファーにゴルフ場でプレーする度に振興金（50円）を拠出してもらい、これを集めてゴルフ振興のための基金とする仕組み。ジュニアのプレー費補助などに充てられ大きな力となっている。

【国体入賞へ一丸】

競技力の向上を最も具現化したい大会は国民体育大会（国民スポーツ大会）である。これまでの県勢最高成績は2007（平成19）年「秋田わか杉国体」における成年男子（広田文雄、百瀬将道、田中孝幸）の8位。唯一の団体入賞である。女子の団体は、ここ数年入賞ラインにあと一步のところまでレベルアップしており、2019（令和1）年の茨城国体9位が最高成績。最終ホールまでつば競り合いの末、7位と1打差で入賞を逃した。

個人では2015（平成27）年の和歌山国体で成年男子の丸山雄也（日体大）が7位に入賞。2年後の愛媛国体女子で平木亜莉奈（御代田中）が8位入賞した。茨城国体では市村杏（佐久長聖高）が7位に入賞した。

【課題と展望】

冬季のゴルフ場開業期間が短い本県は気象条件に恵まれてはいない。少子化の波も否応なく押し寄せている。有望な選手が進学を機会に県外に流出してしまうケースも多かった。競技を続けるのに費用がかかる、若い親世代に経済的にも時間的にも余裕がないなど、一朝一夕に解決できない課題も多い。

しかし、ゴルフ場関係者、ジュニア指導者、ゴルフ愛好者の熱意は他県に引けを取らない。ジュニアゴル



夏季ジュニア・ゴルフスクール

ファアのプレー費減額、強化費補助など、環境整備を行ってきた。近年では県内にとどまり飛躍を目指す選手や、県外から活躍の場を求めて入学するケースも目立っている。スポーツ少年団や地域のクラブでの地道なジュニア育成事業で頭角を現し、中学・高校年代での成長を経て成年の主力選手となる理想の形がようやく見え始めている。

日本のゴルフ界には今まさに追い風が吹いている。2019年AIG全英女子オープンで渋野日向子が42年ぶり二人目の海外メジャー制覇を果たしたのをはじめ、2021年には松山英樹が4月、世界四大メジャー大会のマスターズ・トーナメントで日本人初優勝。6月には19歳の笹生優花が全米女子オープンで畑岡奈紗とのプレーオフを制して優勝という快挙を達成した。日本人同士の海外メジャー大会プレーオフなど、一昔前には想像すらできないことだった。

2010年前後から活躍し人気を博した石川遼、宮里藍らに刺激され、ジュニアゴルファーが一気に増えた。そうした中から現在国内外で活躍する人材が育ってきた。この流れを一過性のブームに終わらせることなく、大きな夢を抱きながら頑張る若いゴルファーたちを足元から応援する活動に結びつけていきたい。

【役員】

・会長

小坂 健介 平成8年～平成25年

小坂壮太郎 平成25年～現在

・副会長

塩沢 鴻一 平成8年～平成22年



茨城国体で7位入賞した市村杏（中央）

高澤 克治 平成16年～平成22年

田幸 淳男 平成22年～平成24年

宮坂 久臣 平成22年～令和2年

小根山克雄 平成24年～令和4年

平澤 豊満 令和2年～現在

・理事長

藤原 正男 平成8年

加藤邦太郎 平成8年～平成12年

川上 陸水 平成12年～平成14年

加藤 久雄 平成14年～平成25年

井口 恒雄 平成25年～平成28年

柄沢 洋一 平成28年～現在

・事務局長

牛山 洋 平成8年

細田 欽也 平成8年～平成18年

野澤 信五 平成18年～平成20年

林 正夫 平成20年～平成24年

吉川 博 平成24年～現在

長野県合気道連盟

私共「長野県合気道連盟（旧長野県合気道連合会）」は設立が平成7年で、平成9年（1997年）に長野県スポーツ協会への加盟を認可されました。設立当初の状況からご説明したいと思います。

合気道は、合気道開祖植芝盛平翁が幾多の武道と宗教的な研鑽を極め完成した武道であり、昭和30年代後半から日本国内に少しずつ広まってきました。昭和50年代ころには長野県下各地に合気道団体が生まれ始めていましたが、長野県内の統一組織は存在していませんでした。合気道の大きな特徴の一つは、競技スポーツと違い勝敗を決める試合がないということにあります。これは開祖植芝翁が「真の武道はいたずらに力に頼って他人と強弱を競うものではなく、自己の人格の完成を願っての求道である」と説かれ、試合を行わず、互いに切磋琢磨し技を磨き上げていく道としての武道を完成させたからです。ですが、逆に、いわゆる試合が無いことが、統一組



長野県体育協会加盟記念祝賀会（1997年）

織づくりが遅れた一つの要因になったとも考えられます。

しかし、年々合気道人口が増えていくと共に、県内の合気道団体が協同して合気道の素晴らしさを正しく理解してもらい長野県に普及を図ろうとする機運が高まって

いきました。そして、平成7年、松本合気道協会が呼びかけ団体となり、県内の合気道統一団体を作り、長野県体育協会（現スポーツ協会）への加盟活動を始めました。この呼びかけに県内各地の合気道団体10団体が呼応し長野県合気道連合会が発足しました。活動は非常に順調で平成9年には長野県体育協会への加盟が承認されました。

平成9年より、合気会合気道本部道場より講師をお招きし、毎年実技講習会を行うことになりました。平成11年には本会の活動が評価され、合気会の推薦により平成10年度武道優良団体として、日本武道協議会より日本武道館にて表彰を受けました。



日本武道館にて武道功労賞を受賞（1999年）

平成19年、長野県合気道連合会を長野県合気道連盟と名称変更しました。また、発足当初は本会への加盟資格は市町村体育協会加盟団体を基本としていましたが、時代の多様化に対応するために、平成27年に、道場単位でも加盟可能としました。加えて、大学合気道部との連携を密に図るため、大学合気道部は準加盟団体として加盟可能としました。そして、発足時10団体でしたが、令和3年（2021年）現在、21団体となり、長野県全体に加盟団体が広がっています。

現在の主たる活動は、本部道場より講師をお招きして実技講習会を行うことにより個々の技術レベルアップを図ると同時に普段は稽古できない相手と講習会で共に稽古することで親睦と親交を深めています。また県内各地で合気道教室、合気道演武大会などの開催により合気道普及活動を行っています。昨年2020年は新型コロナウイルスの影響で、残念なことにはほとんど全ての活動が中止となりましたが、今年は、感染予防対策を十分に行之、徐々にですが通常の活動に戻ってきています。

先にも触れましたように、合気道は勝敗を決する形の



本部道場長植芝守央先生を囲んで（1998年）



講習会記念写真（2000年）

試合体系がありません。しかし、だからからこそ、誰もが学ぶことができる「生涯武道、生涯スポーツ」として、今後さらに注目される武道となると確信しています。老若男女を問わず、稽古を通じて心身両面を鍛える事が出来る合気道を長野県民に広く正しく普及させることを第一目標とし、今後もさらに団体間の絆を深めて連携して活動していきたいと考えております。

今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

長野県合気道連盟沿革

1995年（平成7）松本合気道協会が呼びかけ団体となり、市町村加盟団体中心に10団体にて長野県合気道連合会が発足する。

会長に萩原清氏が就任する。

理事長に古畑公幸氏が就任する。（現長野県合気道連盟顧問）

1996年 長野県合気道連合会 合気道研修会開催

1997年 長野県体育協会へ加盟 長野県体育協会加盟記念祝賀会開催

第1回実技講習会開催（講師：本部道場 市橋紀彦先生）

1998年（平成10）第2回実技講習会開催（講師：植芝守央本部道場長（現合気道道主））

1999年 第3回実技講習会開催（植芝守央合気道道主）平成10年度武道優良団体として表彰される。

2000年 第4回実技講習会開催（講師：本部道場 市橋紀彦先生）

2001年 第5回実技講習会開催（講師：本部道場 関昭二先生）

2002年 第6回実技講習会開催（講師：本部道場 関昭二先生）

2003年 第7回実技講習会開催（講師：本部道場 関昭二先生）

理事長に原野隆行氏就任する。（現長野県合気道連盟副会長）

2004年 第8回実技講習会開催（講師：本部道場 菅原繁先生）

2005年 第9回実技講習会開催（講師：本部道場 金澤威先生）

2006年 第10回実技講習会開催（講師：本部道場 大澤勇人先生）

2007年 第11回実技講習会開催（講師：本部道場 横田愛明先生）

長野県合気道連合会から、長野県合気道連盟に名称変更する。

- 2008年（平成20）第12回実技講習会開催（講師：本部道場 小林幸光先生）
- 2009年 第13回実技講習会開催（講師：本部道場 菅原繁先生）
理事長に中島久典氏就任する。
- 2010年 第14回実技講習会開催（講師：本部道場 横田愛明先生）
- 2011年 第15回実技講習会開催（講師：本部道場 栗林孝典先生）
- 2012年 創立十五周年記念行事
特別講習会（講師：石垣晴夫技術顧問）と記念祝賀会の開催
- 2013年 第17回実技講習会開催（講師：本部道場 藤巻宏先生）
- 2014年 第18回実技講習会開催（講師：本部道場 森智洋宏先生）
- 2015年 第19回実技講習会開催（講師：本部道場 菅原繁先生）
道場単位、大学合気道部も加盟可能とした。
加盟団体17団体（含む準加盟1）
- 2016年 第20回実技講習会開催（講師：本部道場 栗林孝典先生）

- 2017年 第21回実技講習会開催（講師：本部道場 金澤威先生）
- 2018年（平成30）第22回実技講習会開催（講師：本部道場 栗林孝典先生）
- 2019年 第23回実技講習会開催（講師：本部道場 藤巻宏先生）
- 2020年 第24回実技講習会 新型コロナ感染拡大防止のため中止とする
加盟団体21団体（含む準加盟1）となる



長野県合気道連盟創立十五周年 平成24年4月22日

創立15周年祝賀会（2012年）

長野県ダンススポーツ連盟

沿革

1993年（H5年）にアマチュアのダンススポーツ団体として発足し、ダンススポーツの振興と県民の心身の健全な発達ならびに社会貢献に寄与することを目的に活動してきました。上部団体の日本ダンススポーツ連盟（JDSF）に加盟し、国体種目、オリンピック種目採用に向けて、普及活動と選手強化の活動を進めています。

2018年には世界シニアIV選手権大会を長野市のホワイトリングで開催し、世界各国からシニアIV（60歳、65歳以上）の選手が参加し、大変盛り上がりました。

会員数は'20年現在663名、内選手282名です。

長野県ダンススポーツ連盟の歩み

- 1993年（H5年）5月 長野県アマチュアスポーツダンス協会 設立 会長 岡田明義 就任
会員数386名 でスタート
- '93年11月 設立記念ダンススポーツ大会開催
- 1994年（H6年）～2000年（H12年）
 - ・講習会&ダンスパーティー 4支部開催
 - ・県ダンススポーツ大会 2回/年開催
 - ・指導者養成講習会
 - ・ジュブナイル（小学生）の育成
- 1998年7月 JADA都道府県対抗長野大会開催



長野県チーム 総合2位

- 1998年10月 国民文化祭 選手派遣ジュブナイル、ジュニア部門スタンダード優勝
- 2001年（H13年）～2005年（H17年）
 - ・ダンススポーツ大会 2回/毎年
 - ・講習会、研修会 2回/毎年
- '01年3月 長野県体育協会への加盟申請
- '01年6月 第10回長野県ダンススポーツ大会（佐久）
新芸能人社交ダンス部を迎えて観客2,500人を超え

る。一般に広まる。

’03年8月 創立10周年記念祝賀「夢の大舞踏会」



’04年6月 県連盟ホームページ開設

’04年9月6日 長野県体育協会 加盟

’05年3月21日 長野県体協加盟記念

「アップルブロッサムボール」開催（松本）



2006年（H18年）～2010年（H22年）

- ・ダンススポーツ大会 2回/毎年
- ・講習会、研修会 2回/毎年

’06年10月 全国ねりんピック（静岡）

上倉&戸谷組 W・Tともに全国優勝

’07年7月 第21回長野県ダンススポーツ大会

併催 第1回北信越選手権大会（佐久）

’07年11月 会報誌「クローバー通信」創刊発刊

’08年9月 創立15周年記念事業（ホワイトリング）

’09年4月 会長交代 高橋淳 就任

’09年11月 第17回都道府県対抗戦（新潟）

総合4位

第11回東部ブロック選手権 総合5位

’10年7月 第5回オールジャパンジュニア大会

（長野市ホワイトリング）



15都道府県より355名参加

2011年（H23年）～2015年（H27年）

- ・ダンススポーツ大会 2回/毎年
- ・講習会、研修会 2回/毎年

’12年7月 第6回北信越選手権大会（富山）

団体 総合優勝

’12年10月 全国ねりんピック（仙台）団体9位

’12年11月 都道府県対抗戦（岐阜）総合9位

’13年9月 創立20周年式典&第36回長野県ダンススポーツ大会（ホワイトリング）

’13年11月 都道府県対抗戦 団体 総合3位

’14年10月 全国ねりんピック（栃木）総合4位

’14年11月 第8回北信越選手権大会 団体優勝

関東甲信越ブロック大会（群馬）

団体 総合4位

’15年11月 関東甲信越ブロック選手権（ホワイトリング）団体 総合4位

2016年（H28年）～2020年（R2年）

- ・ダンススポーツ大会 2回/毎年
- ・講習会、研修会 2回/毎年

’16年5月 第10回北信越選手権

団体 総合優勝

’16年11月 関東甲信越ブロック選手権（新潟）

団体 総合4位

’17年4月 会長交代 百瀬芳正 就任

’17年7月 第11回北信越選手権（新潟）

団体 総合3位

’17年7月 シニアIV世界選手権プレ大会（ホワイトリング）

’17年11月 関東甲信越ブロック選手権（栃木）

団体 総合7位

’18年7月 シニアIV世界選手権（ホワイトリング）

13の国と地域から114組参加

他の区分を含めて延べ458組参加



’18年8月 北信越選手権大会（富山） 総合2位

’18年11月 関東甲信越ブロック選手権（川崎）

団体戦 総合7位

'19年1月 創立25周年式典・2019アワード



支部対抗戦

'19年10月 第13回北信越選手権（新潟）
団体戦 総合2位

'19年11月 関東甲信越ブロック選手権（東京）

団体戦 総合4位

'19年11月 都道府県対抗戦（茨城）

団体戦 総合7位

'19年11月 全国ねりんピック（和歌山）

団体戦 総合8位

'20年コロナ禍で全ての大会・行事中止

2021年（R3年）～

5月 第49回長野県ダンススポーツ大会（塩尻）
コロナ禍で中止

長野県エアロビック連盟

1. エアロビック競技の沿革

エアロビックは、米国で提唱された健康体力づくりプログラム「エアロビクス」を起源として、その後に派生した「エアロビック・ダンス」を運動技術の側面から体系化して、スポーツとして発展させたものです。

2. 組織の活動状況

- ①エアロビックの県選手権大会、競技会、発表会等開催。
- ②エアロビックの全国大会規模競技会等に対する代表選手の選定と派遣。
- ③長野県内5団体の市スポーツ協会加盟による、各種の普及活動。市スポーツ協会市民祭・スポーツ教室・総合型地域スポーツクラブへの指導者派遣・支部主催の大会・講習会等の協力・技能検定会開催・スローエアロビック教室開催。

3. 競技普及への取り組み

- ①県大会開催による練習会開催、年2回。
- ②毎月月末の日曜日にスキルアップ教室開催。
- ③夏冬の選手のための合宿を開催。
- ④県連強化選手の指定による選手発掘。
- ⑤審判員・テクニカルアドバイザー・コーチの養成のための中央研修会参加の支援。

4. 指導者の養成及び資質の向上

- ①指導者養成のための各種練習会・資格更新研修会開催。
- ②県連による「C級審判員養成講習会」の開催。
- ③「公認エアロビック指導員」の養成講習会開催。

5. 今後の組織整備及び競技普及

- ①支部活動を活性化するために、支部単位の競技会や発表会を開催し県連盟挙げて協力と支援を行っていく。
- ②県連コーチによる強化合宿の開催推進。

長野県エアロビック連盟沿革

- 平成4年：長野県エアロビック連盟松本協会（以下 県連盟）を設立、初代会長に小林武義氏が就任。「第2回フレッシュライトカップ」を松本総合体育館にて開催（生涯エアロビックの普及を促進する催事）現在29回の開催
- 平成5年：一般愛好者や指導者を対象に各種講習会開催。
- 平成7年：財団法人松本体育協会加盟。
社団法人日本エアロビック連盟に長野県エアロビック連盟設立準備委員会として加盟。
- 平成8年：8月文部大臣認定公認エアロビックC級指導員養成講習会を県連盟が主管で開催。2年ごと開催現在に至る。
- 平成9年：「第11回全国スポレク祭り大会」からエアロビックが正式種目に採用され長野県代表の選出派遣を平成23年「第24回スポレクとちぎ大会」までおこなう。
- 平成18年：全日本エアロビック選手権大会「スズキジャンカップ長野県大会」の主管や「エアロビックチームチャレンジ長野県大会」を主催し、上位入賞者を「中部地区大会」に派遣現在に至る。「エアロビック技能検定会」を開催、年2回開催現在に至る。
- 平成19年：社団法人日本エアロビック連盟に「長野県エアロビック連盟」として正式加盟、組織改正を行い会長に本郷一彦氏が就任。



平成23年：「スズキワールドカップ2011 第22回世界エアロビック選手権大会」において長野県の中澤彩子選手が女子シングル部門優勝。



平成26年：4月公益財団法人 長野県体育協会加盟。
平成28年：公益社団法人 日本エアロビック連盟本部国会議員連盟発足（平成28年10月設立）。
議員連盟活動内容一競技エアロビックの促進・スローエアロビックの普及促進・学校体育へのエアロビック導入。
平成29年：「全日本エアロビック大会」「スズキジャパンカップ第34回全日本総合エアロビック選手権大会長野県大会」に変わりました。
ブロック協議会の結成「中部エアロビック競

技会」参加。（静岡 愛知 富山 石川 三重 岐阜 長野 福井）

平成30年：本部国会議員連盟発足に伴い
顧問就任 衆議院議員 務台俊介氏
令和元年：長野県体育協会一「長野県スポーツ協会」
令和3年：スズキジャパンカップ長野県大会を5月16日（日）コロナ感染対策のため、無観客 開会式 閉会式を中止して行いました。



長野県スポーツチャンバラ協会

昭和46年に田邊哲人先生が「護身道」（現在のスポーツチャンバラ）を創立し、翌々年の昭和48年に全日本護身道連盟が設立



され、田邊哲人先生が会長に就任しました。平成23年には公益社団法人として認可を受け、翌平成24年には公益社団法人日本体育協会（現日本スポーツ協会）へ加盟しました。

現在では2年に一度の世界大会が日本にて開催されています。

護身道の中の特に短いものを巧みに使い、身を護るという「小太刀護身道」が全国的に評判を得て、この部門

を核として指導・普及し、各地で小大会が開催される様になりました。

長野県では中中信地区を中心に昭和63年に高沢正直元会長が長野県小太刀護身道連盟を設立しました。

そして翌年の平成元年には、長野県で第1回目となる長野県小太刀護身道選手権大会が箕輪町民体育館にて開催されました。以来、長野県では毎年大会が開催されています。

平成20年には名称を長野県スポーツチャンバラ協会に変更とし、この年は第20回長野県スポーツチャンバラ選手権大会が開催されました。

1993年、平成5年に公益財団法人日本レクリエーション協会に加盟し、レクリエーション協会が開催する様々

なイベントにスポーツチャンバラも力を入れて参加してきました。

平成27年に長野県で開催された第69回全国レクリエーション大会には長野県スポーツチャンバラ協会も参加し、第27回長野県スポーツチャンバラ選手権大会を兼ねたスポーツチャンバラ交流大会が行われました。



2014年（平成26年）交流大会
前列中央：藤森正樹会長

平成29年には、長野県スポーツチャンバラ協会も長野県スポーツ協会へ加盟し現在に至っています。

長野県では箕輪、松本、駒ヶ根の各支部を主な活動拠点として、幼年から成人会員まで男女の隔てなく活発に鍛錬を重ね、明るい人間形成と護身の技を学んでいます。

スポーツチャンバラはエアで出来た様々な種類の得物を使い、最小限の防具として面のみを着け試合をします。現在は小太刀、長剣（フリー、両手）、二刀、楯小太刀、楯長剣、棒、杖、短刀、楯短刀、短槍、長槍、長巻などがあります。



長槍を使った試合

長野県からも全日本選手権大会、世界選手権大会へ、選手・審判員が参加をし、平成24年の第38回スポーツチャンバラ世界選手権大会の長剣フリーの部では藤森正啓選手が準優勝、平成25年の第39回全日本選手権大会の小太刀5～6級の部では宮崎翼選手が準優勝、平成26年の第40回全日本選手権大会の楯長剣の部では村内泰久選手が3位入賞などの成績を収めています。



選手整列（世界大会にて）



世界大会 長剣フリーの部の試合
右側：藤森正啓選手

今日、スポーツチャンバラは時代の流れを受けながらより良いスポーツ団体を目指し、老若男女を問わず日本国内に留まらず世界中に広がりつつあります。今後も「公平と安全」そして「自由」を基本理念として、規制にとられない自由な発想による剣術を広めるよう精進していきます。

長野県スポーツチャンバラ協会

名誉会長	宮下一郎		
会長	藤森正樹		
副会長	片山英治	大前信夫	
理事長	北村 豊		
副理事長	横山幸之助		
常任理事	刈間亘二	村内泰久	北村元貴
	藤森正啓	堀内勝至	
理事	松村秀樹	竹澤賢仁	高梨秀隆
	藤森皇広	大澤 剛	齊藤祐哉
	遠藤良兼		
監事	松村秀樹	大澤 剛	
事務局	山口知佳		

長野県グラウンド・ゴルフ協会

はじめに ～グラウンド・ゴルフとは～

グラウンド・ゴルフは、ゴルフをヒントにアレンジした生涯スポーツの振興を目的につくられたスポーツです。クラブでボールを打ち、ホールポスト内に静止するまでの打数を数えるゲーム的なスポーツであり、複雑なルールはありませんので初めての人でも大人でも子供でも楽しくプレーすることができます。

グラウンド・ゴルフ発祥の地は鳥取県のほぼ中央に位置する泊村という小さな村です。

昭和57年（1982）に、文部省（現文部科学省）は生涯スポーツ推進事業として高齢者の健康、体力づくりを目標に「高齢者にふさわしい新しいスポーツ開発」を目指して考案されました。グラウンド・ゴルフは、身近にある広場や公園、学校のグラウンドなどで楽しむことが出来、名前の由来のように手軽に楽しめるスポーツとして誕生しました。

1. 県グラウンド・ゴルフ協会の発足

昭和62年4月（1987）、県GG協会設立にむけて日本協会及び県内の協力者として犬飼一雄、武井深両名が発起人となり発足準備が始まりました。

翌年の6月15日、長野県GG協会が発足し会長に古林恒太郎、副会長に武井深と犬飼一雄（事務局長兼務）、理事長に野口紘の各氏が就任しました。

6月30日には日本グラウンド・ゴルフ協会に登録加盟（全国で9番目の加盟）しました。

平成17年4月に、犬飼一雄が会長就任、副会長に堀内知徳及び百瀬公人、理事長に上条昇一、事務局長に犬飼桂子が就任し新しい体制で活動が始まりました。

2. 組織の改革

長きにわたり長野県GG協会会長としてグラウンド・ゴルフの普及に貢献された犬飼一雄は平成30年6月に会長を退任し、新たに長野市GG協会顧問の服田高が新会

令和元年第29回北信越ブロックGG交歓大会風景



長として就任し組織改革に着手されました。

開かれた協会を目指し、常任理事会におきまして規約の改正、体協加入委員会設置などの活動を開始し平成31年4月1日念願であった長野県スポーツ協会に加入しました。

県GG協会は、長野県を北信、東信、中信、南信の4ブロックに分け、協会の下部組織と位置づけ、ブロック長（副会長）を配置し大会主管地区の運営責任者となりました。

又、事務局を充実させ、スポーツ協会担当者を決めて会計、経理の予算統制管理を充実させるなど実行体制の強化を進めてきました。

令和3年4月には服田高が会長を退任し、理事長の間柄順三郎が新たに会長に就任し現在に至っております。

3. 役員 令和3～4年度（1期2年）

当協会の令和3年度は次に示す各氏による執行部体制により活動を開始しました。

会 長	間柄順三郎
副会長（北信）	富澤 俊雄
副会長（東信）	猪飼 憲二
副会長（中信）	中村 浩之
副会長（南信）	後藤 和彦
理 事 長	松村 博夫
副理事長	松山 博保
事務局長	松本貴代己
会計担当	中村 吉秀



開会式風景

経理兼スポーツ協会担当 松山 博保
顧問 服田 高

4. 主な大会・開催について

当協会では年間事業計画の日程、開催要領等を会員に周知していますが、思い出に残る主な大会としては、昭和63年7月31日に松本市で開催の第1回長野県グラウンド・ゴルフ交歓大会、同年8月10日に鹿児島県指宿市で開催された第2回全国グラウンド・ゴルフ交歓大会に長野県協会から23名の会員が参加しました。

平成2年5月6日には第3回全国グラウンド・ゴルフ交歓大会が松本市陸上競技場で行われ、北海道から沖縄まで全国から1,100人が参加しましたが長野県会員の参加者は350人でした。

北信越ブロックGG交歓大会

毎年、北信越ブロックGG交歓大会を開催していますがこの大会は福井県、石川県、富山県、新潟県、長野県の5県で輪番開催しており当協会が開催担当した大会は次のとおりです。

第19回：平成21年4月26日

長野市南長野運動公園 757名参加

この年行われました善光寺ご開帳に花を添えた大会となり大成功でした。

第24回：平成26年5月25日

松本市広域公園ターミナルゾーン 496名参加

第29回：令和元年5月26日

長野市運動公園（野球場、陸上競技場、運動広場の3つの会場使用）550名参加

5. ホールインワン基金の設立

当協会では開催する全ての大会を対象に、ホールインワン達成者から1本達成につき100円の基金を募るホールインワン基金を設立しています。募金は福祉団体等に支援しています。

募金額、寄付額の明細は日本GG協会に所定用紙で報告しています。

6. 県グラウンド・ゴルフ会員登録の現況

当GG協会の会員の年会費は1000円で内500円は日本GG協会会費とし、どこの大会にも参加できる資格を有することとして会員増強に努めています。

日本協会の会員登録数は令和3年4月時点で144,645人ですが長野県会員は524人全国では北海道、富山県につき下から3番目であり退会する会員が増えている現状です。

高齢化・病気などによる会員減少傾向にどの県も同じ悩みを抱えていることと思います。

常設のグラウンド・ゴルフ場設置の期待

北から南、広大な大地の長野県、会場に足を運ぶことが困難な会員が増えてきていることから、高齢者の健康維持の一手として身近な所でいつでも誰とでも気軽にプレーが出来る常設のグラウンド・ゴルフ場があればグラウンド・ゴルフを楽しむ人が人を呼び、会員増につながるものと期待し関係部署に働きかけをしています。

.....

人生100年時代と言われる今日、高齢になられても介護や医療とは無縁で社会に貢献できる高齢者が住む長野県となるよう、長野県GG協会はグラウンド・ゴルフの普及に取り組んでいます。

II 学校体育団体

長野県中学校体育連盟

昭和37年、第1回長野県中学校総合体育大会が長野県教育委員会、長野県市町村教育委員会連絡協議会、長野県中学校長会、そして長野県体育協会の4者主催により開催されました。それから60年、競技種目は9から19に増え、県中体連はその時々状況により様々な変遷をたどりつつ、今日に至りました。

県体育協会へは昭和45年に中体連としての加盟が承認され、現在は県総合体育大会の共催団体として、中学生のスポーツ活動に対し物心両面において多大なるご支援

をいただいております。

以下に、昭和63年以降の中学校体育連盟のあゆみをまとめます。

【昭和63年度】

- ・中学生の国体参加が始まり、体操1、陸上1、水泳7、フィギュアスケート2の計11名が参加。
- ・全国中体連が（財）日本中学校体育連盟となる。